
朝の世界

Cechilia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝の世界

【Nコード】

N66860

【作者名】

C h e c h i l l i a

【あらすじ】

温暖化が進んだ地球、さらに核汚染に侵されたかつての大陸の調査に行った女博士を救出する任務を負った男。死んだ世界だと考えられてきたはずだった大地を支配していたのは だった。人類にとって瀕死の地球で起こるのは人間の想像を遥かに超えた現象ばかり。

悪魔

気象学者やら、地球学者やら、地質学者やら、科学者やら。とにかく、そういう類の人達の大昔の予想はことごとく外れた。ほんとうに大昔の話で、どれくらい前の話だったか、僕にはよくわからない。僕だけじゃない、地球で生きのびた人々の多くは、そんなこと気にもしていないだろう。というより、生きるのに必死で、興味を持てないんだろう。まあ、全員というわけではないかもしれない。偉い学者やら、歴史やらに知識のある人もいるだろう。とにかくそれほど古代の話なんだ。

大昔の研究者たちは口を揃えて言った。例外もいたが、基本的にはそうだった。地球温暖化やらなんやらで地球の気温が上がる。近い未来、地上は灼熱の地獄と化し、飲水はなくなる、海拔が上がり多くの島が沈む。それに加えて、資源の枯渇。これは相当に深刻だったらしく。石油だったか、そんな名前の種類、そうだ、化石燃料とかいうかつての人類に必要な不可欠だった資源が尽きた。

そこで人々は今は誰も立ち入らない、死んだ大地。かつてのアジア大陸だったか、ヨーロッパ大陸だったか。とにかくロシアという名前だった広大な土地をもつ国に原子炉やら原子発電所を大量に作った。原子炉ってというのは、簡単に説明するとエネルギーを作り出す場所だ。じゃあ大丈夫じゃないかと思ったが、話によると原子炉ってのは莫大なエネルギーを作り出すが、リスクもあった。簡単にいうとものすごく危険ということだ。事故が起きるとアルマゲドンのような爆発を起こし、毒ガスを撒き散らし、想像を絶する広範囲を死の土地にしてしまう。これが炉心融解だったかな。

まとめよう、つまりそれは悪魔との契約だ。契約すると絶大な力を手にできるが、ひとつ間違えば悪魔がやってきて、そこいらで暴れまわる。

笑える話をしよう。さっき人類が悪魔と契約したことは話したが、

これはまだ言ってなかった。67の悪魔が同時に地球にやってきたこと。

到着

「視界ゼロ、エトセトラオールクリア。気圧、異常なし。オキシジエン良好。これよりマスタング降下を行う。幸運を祈る。」

幸運を祈る。ね。全く味気ない言葉だ。と思った。機械に応援されたところで、嬉しくともなにもない。この低空飛翔船ドローンに乗っているのは僕だけだ。

「スリー・ツー・ワン・テイクオフ」

プログラミングされた音声が続いた。ドローンの腹が開き、魚雷のように発射されたカプセルの中に僕はいた。直後、推進力を持ったドローンはカプセルの上空を通過した。舵を失ったドローンはそのままはるか前方で墜落すると予測していたが、はるか前方の上空で爆発した。たいした爆発ではなかった。僕の乗ったカプセルはというと、先端からトーマスエンジンが逆噴射し、後方から超高度のハード・ファイバーでできたパラシュートを広げていた。徐々に速度と高度を落とし、凄まじい音を立てて地面に滑り込んだ。着地してからカプセルは1マイルほど進み続けた。その間15秒ほど、僕の鼓膜は地獄の騒音に苛まれていた。ようやくカプセルが止まった頃、僕はほとんど気絶寸前だった。

ヘル

何世紀も前、地球は回転することをやめた。多くの学者は地球の回転が止まるところなるだろう、ああなるだろうという仮説を打ち出していたが。実際に起こったことはこうだ。なぜか朝と昼がなくなつた。ずっと夜なのだ。地球全体がどうなのかはわからないが、とにかく今人類が住める場所に太陽の光が差し込むことはない。

僕たち人類が住んでいるのは、昔、太平洋と言う海があつた場所のほぼ中央だ。そこ以外の土地は猛烈な寒さで、住むどころか呼吸することもままならない。地球の裏側に行こうとした勇敢なものもいたが、1人として帰ってくることはなかった。10マイルも進めば吸った空気で肺が凍りつき、たちまち絶命してしまうような地獄だ。

それから海がなくなつた。温暖化によつてなのか、地球の回転が止まつたことによつてなのかはわからない。とにかく海は干上がった。そして毎日が夜になつた世界は極寒で、人類は到底生き延びてはいけないだろうと予想されていたが、これも外れた。確かに極寒だが、人類は滅びていない、確かに数は大幅に減つたが、地球の隅っこで集まつて生き延びている。科学力も昔のそれとは比べ物にならないほど進歩した。最も生活に適した土地に人類は巨大なシエルトーを作つた。それでもあの圧倒的な寒さには敵わないのだから、やはり寒いのだろう。ただ不思議なことにシエルトーから北西、つまり悪魔の襲来によつて滅びた地獄の大陸。不毛地帯。今ではヘルと呼ばれる土地。そこに近づけば近づくほど、気温は高くなるのだつた。まあ、それでも寒いらしいが。

ポリノ・スーツ

頭が痛かった。さっきの騒音のせいだろう。耳の奥に高い周波数の嫌な音がまだ残っている。カプセルから出ようと右側にある扉のスイッチを押したのだが、扉は開かなかった。僕は左腰のガンホルダーからプラズマ銃を取り出した。精一杯右側の扉に身体を押し付けた僕はプラズマ銃の引き金をひいた。銃口からわずかに目に見える青い光が出ている。光の先では高温のレーザーが硬いカプセルの装甲を溶かしている。そこから発せられる熱のせいでカプセル内は猛烈な暑さになったが、身につけている強化外骨格と体温維持を兼ねる特殊スーツ（ポリノ・スーツ）のおかげで、出られるだけの熱の切り目がつくまで、熱中症で倒れずに済んだ。僕は円を描いた切り目の真ん中を足の裏で蹴り飛ばした。一気に外から冷たい空気が入り込んできた。だけどそれほど寒くはなかった、生身でも死ぬほど寒いほどじゃないだろうな。ポリノ・スーツ越しに僕はそう思った。地獄に送り込まれた哀れな生贄。

ジョン・ビジネス。僕の名前。シンプルでいいだろう？

「到着した。只今よりミッションを開始する。」

「了解。元大陸まで約3マイル。着陸地点が思ったより近くてよかったな。ジョン。」

ポリノ・スーツの襟首の無線から声がした。

「そこから先2マイルあたりから無線が通じにくくなると思う。どうしてかは未だ不明だよ。こちらのリーダーにはなぜかそこから先の状態が映らない。おそらく磁場の関係だ。その影響を受けるとこの無線も役に立たなくなるだろう。気をつけてくれ。」

この声はポリノだ。このスーツを作った男だ。僕はポリノと呼んでいるが、多くの人は名前に博士をつける。

「ポリノ・スーツの調子はどうだい？」

「悪くない。寒いカプセルの中でも大丈夫だった。プラズマ銃を使った時は相当熱くなるだろうと身構えたんだが・・・」

「プラズマ銃？」

ポリノが驚いたような声を上げた。

「君、どうしてそんなものを？戦いに行くわけじゃないんだし、その周辺には危険な動物もいないとデータにでてる。今回の君の任務は調査だ。博士と博士の部隊にあつてコンタクトをとること、何しろもう1ヶ月も音沙汰なしだ。」

「わかつてる。だが何があるかわからんだろ？今まで科学者の予想がばつちりあたったことはあるか？」

「あるに決まつているだろう？全てじゃないけどね。」

「落ち着くんだよ。装備があると。」

「装備つて君まさか・・・」

そのとおりさ。僕は小さい頃から軍隊で訓練を受けていた。この小さくなってしまった人間の世界で戦争など起きる気配はなかったが、いや、起きようがなかったな。国と呼べるような国はない。あるのはシエルター内の大きなコミュニティだけだ。とにかく、それでも、軍隊と言うものはなくならなかった。不思議なものだ。

「一通りの装備は持つてきたよ。ヘイヴンアーミー式のやつだ。」

予想したとおりだ、無線からため息が漏れた。

「はあ、余計な物を。ポリノスーツだけで十分なのに。そっちに行つてもあるのは荒れ果てた荒野だけだよ。大昔の核被害で荒れ果てた場所。なにもない場所。」

そんなところで女博士は迷っているかどうかしているんだから、やはり女の地理感には呆れたものだ。あの博士も女は女だな。

「それよりポリノ、ポリノスーツの放射能遮断は大丈夫か？」

「もちろんさ。そのスーツはハード・ファイバーを圧縮、さらに内部には薄い新鮮な空気の壁を作つてある。その点は絶対に大丈夫だ、君がマスクを脱いだりしなければね。それと」

「なんだ？」

「君は勘違いしているようだけど、そのスーツの機能は防寒じゃない。体温維持だ。暑かろうが寒かろうが君の体温を一定に保つてくれる。」

「それは頼もしいな。」

「いいかいジョン。その先は未知だ。未だに放射能が残っている可能性も十分ある。むしろその可能性が高い。君が吸う空気、酸素そのものが猛毒なんだ。気をつけてね。」

「まかせておけ。」

無線のスイッチを切った僕はカプセルに開けた穴から外に身を乗り出した。外は暗闇だった。遠くの方に燃えているドローンの残骸が見えた。それ以外は何も見えない。頭まですっぽり覆ったスーツにつながるゴーグルを暗視モードにしてみると、雪が降っていることがわかった。左足から地面に脚をおろした。ざくつという音がした。踵ぐらいまで雪が積もっている。そんな感じがした。

壁

さて、ここからの3マイルなんだが。生身では相当の重労働になっただろう。なにしろここから元大陸だった場所へ続くのは長く急な坂道だ。それはかつてここが海辺だったことを想像させた。こんな世界になっても、大いなる大地は簡単に姿を変えたりしない。のんびりと坂を登って元大陸に近づいた。元大陸と呼ぶのは、海がないからだ。元々は大陸だった場所も、海がなければバカでかい台地か、山にしか見えない。200mほど歩いたころ、暗視ゴーグルが意味をなさなくなった。この暗視ゴーグルは僅かな光を集め、拡大して視界を少しでも広げようとしてくれていたが、ここにきて光源が全くなかった、カプセルの僅かな機械的な光の点滅、内部ランプの光からはかなり離れたからだろう。はるか前方ドローンの火が消えたのもある。

「まあいい。」

僕はひとりごとを言った。僕はバックパックから昔ながらの懐中電灯を取り出した。これが生まれたのは何十世紀も前だ。頭につけたり、ペンの反対側につけたり、使い方やサイズはいろいろだが、その役目は何世紀たっても変わらない。懐中電灯の明かりを点けると、人工的な光が80mほど先まで道を作った。相変わらず辺りは静寂に包まれていた。

ポリノ・スーツは僕の運動能力を最大限、いやそれ以上に引き出してくれていた。もう2マイルほど急傾斜の坂道を登り続けたにもかかわらず、僕は全く疲れを感じ無かった。強化外骨格とは便利なもので、しようと思えば、5mほどの跳躍が可能になるらしい。しかも、それはもとの人間の身体能力をサポートするので、身体能力の高い人間がこれを身につければ、さらに強力な身体能力を手

にすることができる。

ここまで来ると、雪は止んでいた。雪ももう積もっていない。実を言つと、数分前から僕はめまいを覚えている。懐中電灯が照らし出す先の地面が、緑色だった。基本的にコンクリートの地面で覆われているシェルターで産まれてシェルターで育った僕だって、地面の色ぐらいいは知ってる。シェルターから少し離れればそこはむき出しの大地だ、シェルターに住んでいるからといって、一步もそこからでないなんて人はあまりいない。これは本当に地面なんだろうかと僕は疑った。ポリノ・スーツの上に履いたアーミーブーツが踏みしめる感触も、土や岩の感触ではない。柔らかく、つるつるとしている気がする。ずっと気持ち悪い地面を見ていて気づかなかったんだろう。ふと顔をあげると、そこには木があった。巨大な木。1本ではない。僕は並ぶ木々を目で追った。驚愕だった。東西か、南北かは今はよくわからない、とにかく、左右に、続く巨大な木々が壁を作っていた。見たこともない巨木、巨木の森、80m、いや100m以上の高さがあるのは間違いない。それ以上の上空は、この懐中電灯の光では照らせない。

「なんだ・・・これは・・・。」

ずっと目を見開いていたのだろう。ずっと口を開いていたのだろう。眼球が乾き、舌が乾いても、それでもまだ僕は動けなかった。

朝

ふと我に返った。瞬きをすると眼球に水分が染みいった。

「ポリノ！まだ繋がっているだろうな！？おいっ！」

僕は無線のスイッチを入れ、襟元のマイクに向かって叫んだ。しかし、反応はなかった。予想通りの音信不通。

「なんてこった……。」

博士のことは後回しにして、一度引き返したほうがよさそうだと思う。フィルターまで引き返すことはない。無線が繋がるところまで引き返すだけでいい。そもそも無線が繋がらないことには回収船はやってこない。

これは明らかに異常事態だ。フィルターの外に木があるなんて、誰が想像できただろう。そう判断し踵を返そうとした時だった。何者かに左手の手首を掴まれた。いや、何かに巻き付かれた。(……。)。と気づいた瞬間。ものすごい力でその何かに引つ張られた。本当にものすごい力だった。ポリノスーツの上からにも関わらず、僕の左の手首はギシギシと悲鳴を上げている。動物的なスビードで僕を引きずるそれは木々の方から伸びている。方向的にはそうだ。鈍い痛みに悲鳴を上げそうになったが、悲鳴を上げる前に僕は行動を起こした。今にも浮き上がりそうな両足をしっかりと地面に押し付けた。それから右手で何かを掴みにかかった。懐中電灯と一緒に握りしめたそれは、ロープか何かのようだった。太さは人間の腕とかわからない。スーツの力を借りて何かを引きちぎるつもりだったが。その力は想像以上だった。生身だったらどうなっていたのか。

動物的本能だろう、あそこに引きずり込まれて、いい予感はない。ブーツが騒音をあげながら地面を削り込んでいく。巨木の壁にどんどん近づいていく、必死に抵抗したのだが、僕は為す術も無く大木の森の中に引きこまれていく。森の入口、とでも言うんだろう

か、巨木が壁を作っている間に吸い込まれる瞬間。ブーツの足首から刀身が20cmを超える大きな圧縮アーミーナイフを取り出し、思い切り大木に突き刺した、つもりだった。切れ味抜群のナイフに加えてポリノースーツの加護を受けた馬鹿力で突き刺したつもりだったが、この巨木にそんなものは役に立たなかった。小さな傷を付けただけで、ナイフと右手は弾き飛ばされた。金属バットで地面にフルスイングした時のような痺れが腕に伝わってきた。

気付くと2つめの木が目の前に迫っていた。思い切り木を蹴りつけて身をよじる。激突は免れたが、バランスを失った僕はその裏にあった巨木に身体を叩きつけられた。右肩に衝撃を受けどっしりとした痛みを受けた僕はおもわず目を強く閉じて唸った。痛みで眼を開けられない。そのぐらいの激痛だった。その時、もう一つの何かが僕の右の太ももに巻きついたのが感覚でわかった。眼を開けた僕は、一瞬、今の状況を忘れかけた。

さらなる勢いで森の奥に背中から吸い込まれる。その時左右から色々な植物が猛烈な速度で通り過ぎていた。それはさっきからそうだ。

だが、僕が見た光景は、本当にそのことを忘れるぐらい衝撃的なものだった。とにかくこれだけはわかった。

朝がきた。

カーテン

そのとき、僕は生まれて初めて、朝の世界にいた。今のシエルタ―に住んでいる人間たちは皆、本当の意味で朝を知らない。止まってしまった地球のせいで、太陽の位置が地球の反対側になってしまったのか、はたまた、遥か上空、宇宙と空の境目に何か特殊な、太陽光線を遮ってしまう何かが発生しているのか。そうだ、昔はそんなことを科学者が言っていたっけ、ああ、あれは高密度の厚い雲が地球の表面を覆ってしまうんだっただか。名前は忘れてしまったが、あの科学者は「だから気温がこども低いんだ。」とか言ってたな。とにかく、そういう理由で僕たちは朝というものを、太陽の光というものを知らなかった。

このまま引き摺られ続けていくと、何か絶望的なことが起こってしまう。僕はそう予想していた。それなのに、その景色に圧倒された僕は、壊れたデジタル時計みたいに止まっていた。

一瞬、目を開いた僕は素早くもう一度目をとじそうになった。眩しかったからだ。

再度とじかけた目をこじ開けたのは、想像を絶する景色だった。目の前に広がったのは遥か天空から伸びる逆さまの木々だった。何百メートル、いや、何キロあるか想像もつかない巨大な木が天空からぶら下がっていた。どこから宙吊りになっているのか、僕の視力ではとらえ切れなかった。宇宙から生えているとも思えなくもない、それぐらい遥か遠くの空。

僕は瞬時に、ピントをさらに奥へ変えた。僕が引きずり込まれた巨木の間から外を確認しようと思ったからだ。咄嗟ながらも僕の頭は割と賢く考えたらしい。「どうして外に光が漏れていなかったんだ？」理由がわかった。たぶん、逆さまの木々のように、上空から垂れ下がっているのだらう。それは、それらは、黒い色の葉っぱだった。形状は見たところ変わったところはない。大きさも、シ

エルターで見かける木の葉っぱと大差はないだろう。問題はその量だ。まさに木の葉のカーテンだった。壁と言ってもいい。天空から垂れ下がる漆黒の木の葉が、少なくとも、僕の視力が見渡せる限りの上空から、僕が見渡せる限りの範囲まで、巨大なカーテンのように、僕の後方からの太陽の光を遮断していた。

つまり、僕からは外の景色どころか、外から見えた巨木すら見えなかった。カーテンには無数の黒点があった。奇妙な木々に陽光が遮られている箇所だろう。

だしぬけに、僕の背中を重い衝撃が襲った。ドン！という鈍い音がなった。後方への進行が停止した。だが、じわりじわりともう一度、僕に巻きつく何かが僕を引きずろうとする。おかげで右の太ももと左腕に強烈な負荷がかかった。ずるずる、ブーツが地面を削る時の音がする。突然あたりが静寂に包まれた気がした。

「刃物か爆弾はないか！？あるなら急いでわたせ！！」

重低音の声、大男にありがちな声が静寂を切り裂いた。

手榴弾

僕ははつとした。そうだ、少し前まで命の危険さえも予感していたというのに。刻々と死に近づきながら呆然としていた頭を強引に現実に戻す。(これは夢じゃないのか?) 夢であつても、ここは覚醒しなければならぬ。さもないと死ぬ。そう思った。そうだ、この低い声の主は誰だ? どうでもいい。とにかく、迫る死を回避するには従うほかない。いや、僕にはそれ以外の選択肢はもうない。必死に覚醒させた頭が、猛烈な思考を開始する。刹那の判断だった。脳内の血液が火花を散らしそうな、それぐらいの瞬時の熟考が、バツクバツクのサイドポケットに手榴弾が入っていたことを思い出させた。あれもアンティークだ。そう思った。

「バツクバツクの右にパイナップルがある!」

僕は大声で言った。最低限の単語だけだったが声の主は理解したようだ。無言で素早くポケットに手を突っ込む。

「よし。」

荒い鼻息のなかに安全ピンを引き抜いた音が聞こえた。後ろの人物が手榴弾を投げた反動を背中を感じた。それほど遠くへ投げた感じではない。即座に男の声がした。ニヤリ。とするような声だった。「近いぞ、覚悟しろ。」

その言葉の直後、太陽の光とは一味違った、火を伴った光が僕の背中を襲った。凄まじいのは音の方だった。僕は両耳を塞いでいなかった。男の言葉は遅すぎたし、もっとも、僕に耳を塞げるだけの時間があったとして、左手首は動かせない。爆発した場所は3mも離れていないに違いない。轟音が聞こえたのは一瞬で、そのあとはキーン、という高音が耳の中で轟いただけだ。耳の中で反響するその音は鼓膜を引っ掻き回すようだ。これが酷い。吐き気を引き起こすような音の拷問だ。それに比べれば、火薬臭い熱風の暑さなどどうでもよかった。

僕は両耳を押さえて地面に転がった。顔を地面に押し付け、うずくまった。僕が地面に転がり込めたということは、耳を抑えられたということは、僕を掴んでいた何かは僕を掴むのをやめたということだ。猛烈な吐き気が込み上げてくる。僕はそのまま気を失った。

破損

「起きろ。」

端的な言葉が低い声で聞こえた。あえぎながら僕は目を覚ました。夢だと思いたかった夢のような光景はあいかわらず僕の眼前にある。仰向きに倒れている僕を覗き込んだのは黒い肌の大男だった。男の奥に見えるのは空ではなかった。それはなんなのか、正確には僕にはわからない。暗いと言っているのか、明るいと言っているのか。どう表現していいのか、最上部は見えなかった。暗くて見えないのか、いや、たぶん遠すぎて見えないのだ。長いトンネルの先が見えないのと同じようなものだ。先に光があるのかどうかわからない。だが、たしかに先があるということはわかるのだ。簡単に行ってしまえば、それは木もれ陽だ。何百、何千もの太陽の光が斜から地面に突き刺さっている。その中には木々に遮られるものもあった。遙か上空から降り注ぎ、僕が引きずり込まれた黒い葉のカーテンに突き刺さっているものもあった。僕が見えない遙か上空にも木もれ陽はあるのだろう。籠るような低い声で男は言った。

「ポリノスーツか。ということはハリー・エルンスト博士のところだな。」

ああ、本名はそんな名前だったか。と僕は思った。僕は何か違和感を覚えた。わかった、頭を覆うマスクが外されている。僕は焦った。猛毒の空気を吸ってしまったように両手で口と耳をふさいだ。もつともそんなことをしても無駄なのだが。そんな僕の様子を見て男は言った。

「大丈夫だ、空気は新鮮だ。シエルターの空気より何倍も綺麗だ。馬鹿でかい空調設備があるわけじゃないが、ここの空気は最高さ。」

僕には意味がわからなかったが。男の口調は皮肉を帯びていた。「どういうことだ？これは・・・」

弱々しい口調だったと自分でも思う。まるで他人の声のような気

がした。耳の不快感がまだ消えていない。そのせいだろう。

「詳しいことは博士に聞いてくれ。助けに来てくれたのだろう？報告することが多そうだな。」

「そういうことだ。博士は無事なのか？」

「もちろんだ。こんなところだったとは予想外だったが、我々がいるんだ。何とかなつてよかった。」

「よし、とにかく回収船を呼ぼう。」

「どうすればいい？」

「一度外に出なければならぬ。理由は正確にはわからないが、とにかく戻らないとコイツが通じない。」

そういつて僕は親指をかえして襟元を指した。大男がしかめっ面になった。

「修理する必要があるな・・・」

大男がため息混じりに言った。落胆の表情だった

ブルーノ・ガンド

僕は慌てて無線機を見た。男は修理する必要があるといったが、直せるだろうか。物理的なダメージだ。外部からの直接の衝撃によるダメージ。小型で頑丈な無線機はひしゃげていた。

「とにかく、博士にそれを見てもらうしかないな。大丈夫、彼女なら直せると思う。」

「すぐに回収船を呼べそうにはないな。なんてことだ。」
「気にするな。」

男は大きな手で僕の方を叩いた。ずっしりとした重みだった。

「お前のせいじゃないさ。とにかく、博士のところに行こう。だが覚悟しておいたほうがいい。」

「そうだろうな。」

男と僕の目線が合った。

「まだ名前を聞いてなかったな。おれはガンド。ブルーノ・ガンドだ。」

そう言っただけでガンドは右手を差し出した。グローブを付けていない手は大きく頼もしかった。

「ジョン・ビジネスだ。よろしく頼む、ガンド。さっきはありがとう。あんたは命の恩人だ。」

僕は手を握り返した。力強い握力を感じた。

「たしかに、あれは運が良かった。博士がそろそろ助けが来る頃だろうと予測していたからおれが偵察に来ていたんだ。ここを見たらみんなブツたまげるだろうからな。来てみたらあそこに鉄の塊が突っ込んできた。」

ガンドは太い指で例の黒い葉の壁を指した。なるほど、一部分が焼けている。

「どうして偵察にたった一人で？」

ガンドの黒い顔がさらに暗くなった気がした。ガンドは握っ

た手を離して腰に当てた。僕も手を下ろした。

「・・・人材難だよ。ここに乗り込んだのは15人。博士も合わせ
てな。来た途端に7人の兵士が死んだ。化物草にやられたよ。お前
が捕まったあれだ。ありゃあ肉食性の馬鹿でかい植物だ。」

「そうか・・・。」

悪かった。と続けようとしてやめた。どうしてもわからない。
だけどそれがいいと思った。僕は必要な話をした。

「どうして博士と一緒にいない？君や兵士と行動を共にしたほうが
安全だろう？」

「もちろんだ。だが安全な場所を見つけたんだよ。比較的ね。」
僕は驚いた。

「比較的？あの化物草はうようよいるってのか？」
ガンドは皮肉的な笑い方をした。

「ハハ、あれなんかまだまだましさ。あれはこの森の外にいる生物
を引きづり込んで食うだけのようだ。詳しくはわからんがどうもそ
のようだ。不可解だな。」

「森の外には生物はいなかったからな。それで」
僕は一拍おいた。

「博士はどこにいるんだい？安全とはどういう事だ？」
ガンドはニヤリ。とした。驚くなよ？というニュアンスが伝わっ
た。

「遺跡があつた。古代のな。いつの時代かはわからん。あいにく、
メンバーに歴史学者はいないのでな。」

僕は啞然とした。「信じられない。」とやっと声に出した。

「そろそろ出発しよう。ジョン。」

僕は声に出さなかったが、大きく頷いた。

歩み

「遠いのか？僕は訊ねた。」

「そこそこだな。」

ガンドは答えた。

「おれがポイントマンになる。武器は持っているようだな。軍人か？」

ポイントマン？と僕は思った。そしてその意味がわかった。警戒しながら進む必要があるということだろう。さっきの化物草みたいなやつがまだいるのか・・・

「ハイヴンアーミーの訓練生だった。」

僕は控えめに答えた。成績は優秀だったが。

「訓練生？」

ガンドは首を傾げた。そして目尻にしわを寄せた。

「そりゃあ頼もしいな。若いと思ったよ。」

笑顔で言っているが、皮肉かどうかはわからなかった。

「念のためにひと通りの武器は持ってきたんだが、まさかこれほど役に立ちそうだとは思わなかったよ。」

今度は僕が皮肉ってやる番だった。

「俺もさ。幸運だったよ。武器がなかったら入り口で全員死んでいたよ。あの化物草の餌になってただろうな。」

「すまない。」

今度はそう言った。

「気にするな。」

男は背中に背負っていた巨大な銃を手を持った。この大男の巨体をもってしてもなんだかアンバランスな、それほどの大きさだった。それに応えて、僕も腰のホルスターから小型のコイルガンを取り出した。小型のと言っても通常の銃の1・5倍サイズはある。持てるなら可能なかぎり強力なものがないと踏んだのは正解だった。強化

外骨格がなければこんな重いものはサバイバルには適さない。そうだ、これはサバイバルだ。

「行こう。」

ガンドは心なしか小さな声でそう言っただけで歩みだした。ギシリ、と地面を踏む音がした。

僕はガンドのあとに続いた。地面には大量の葉っぱが落ちていた。歩くたびにギシギシと音を鳴らす葉は湿っているのだらう。それにしても不思議な色をしている。ぱっと見て2種類の葉があることに僕は気がついた。まず1つ目の葉っぱは完全に円形をしている。そしてその色は輝くオレンジ色だった。黄金が蠟燭の光を帯びたときの色に似ていた。サイズは僕の手ひらの半分ぐらいしかなかった。湿った紙幣のような柔らかみがあった。もう1つは針葉樹のものと思われる葉っぱだ。こっちは赤に近い色だった、そうだな、濃赤、臙脂色というべきかもしれない。ワイン色とも言える。難しい色だ。大きさはオレンジの葉と大差はない。周りの木々は相変わらずはるか天空まで伸びているし、どれもこれも巨大だった。形状は明らかに木だがその直径は大小様々だった。直径300mはゆうに超えるだらうというバカみたいにかいものがあった。だが地面から生える木々たちの直径は最低でも50mはあっただらう。地面から生える。とわざわざ言ったのはそうでないものがあるからだ。僕が見たことのあるサイズの木がそれに値する。それらは木から生えていた、横に。巨大な樹の枝だったのかもしれないが。僕の目には木そのものに見えた。枝の生え方や木と木のつなぎ目を見ても、やはりそれは木から生えた木に見えた。たまに僕達が踏んでしまいパキッと音を立てて折れる落ちている木の枝はこの小さな木から落ちたものだらう。それから、ありとあらゆる場所、地面、木、樹の枝からはチューリップやバラ、コスモス、僕が見たことのある普通の花が生えていた。異様な光景だった、どれもこれも単独で咲いていたし、どうしてそんな所からと思わずにはいられないところから生えていた。30分ほど歩いているとき僕は完全に無防備だった。おかしい風景

に口を開けた大間抜け、ジョン・ビジネス。アリスの森に迷い込み、
呆氣にとられる生贄うさぎ。

蜂

「どうして軍隊に？この世界に戦争はない。もつとも、戦争するほど人間はいない。だからと言ってまるつきり平和ってわけでもないけどな。」

ガンドが言った。なんというか、この男は割と弄れたタイプの男だな、と思った。皮肉屋だ。それに皮肉が好きなんだ。

「どうしてだろう。血じゃないかな。先祖には軍人が多いらしい。」
「面白いもんだ。戦争のない時期もあったが、何故か軍隊つてのは常に存在してた。」

僕はコクリと頷いた。風はない。あたりの木々が、花々が、草々が、じつとこちらを見ているような気がした。沈黙の中、植物の監視の中を僕は延々と歩いた。僕はふと弾かれたアーミーナイフを思い出した。あれは大昔の僕の祖先が使っていたナイフだった。もともとはただのナイフだったが、ポリノがぼくの家の倉庫からホコリみれのそれを改造して圧縮アーミーナイフにした。まあ、僕はそういうノスタルジックなことにあまり興味はない。行方不明になったまま消息不明になった先祖の名前が今でもスパインに彫られている。ポール。そんな名前だった。わりと便利だったのに、無くしてしまった。そう思った。伝統のものを失ったとか、そんな感覚はなかった。

出し抜けに、ガンドが立ち止まり、手で僕を静止した。ごつい手のひらがこちらを向いている。じつと遠くのほうを見つめていたガンドは手を払い、こっちへ着いてこい。の動作をした。潜むようなガンドの動きにつられて、ぼくもそれを真似た。妙な緊張感が湧いてくる。僕らは地面すれすれに生えている、横向きの木に見を潜めた。

「どうしたんだ？」

僕は訊ねた。ガンドはスナイパーのように木から向こうを伺っている。

「蜂だ。」

「蜂？」

僕は不思議に思った。今度は別に驚きはしなかった。生物が、虫の1匹や2匹いたところで、驚かない。それぐらいでは驚かなくなってしまうのだろうか。僕が不思議に思ったのは、ガンドが身を潜めるように促したことだ。

「蜂か……。」

はちみつでも食べたらうまいだろうな。そんな風に思いながら、僕も木から顔を出した。アホのように見えたに違いない。

「蜂だ……。」

そう言っただけ僕は固まった。撤回しよう。簡単に言おう、驚いた。そこには1匹の蜂がいた。蜂の姿をしていた。実際には、身体が、胴体と腹が少し膨らんでいる蜂。普通、蜂つてのは集団でいるものだ。だがこの蜂はたった1匹。木にとまっていた。茶色い木の側面にとまっていたので、見えてしまえば明らかだ。蜂がいる。

蜂独特の縞模様が、緑と黒で構成されていた。

「スイカ蜂。そう呼んでる。」

となりの大男が言った。僕の質問には抑揚がなかった。平行なトーンだった。

「色のことか？サイズのことか？」

「……両方。」

エメラルド

僕は阿呆のように繰り返した。深く納得した。2本の腕が生える上半身、とても言うのか、とにかく頭、上半身、下半身と分けるならば、上半身と下半身はまさにスイカのそれだ。大きさ、色、まさにスイカ。細かい毛の生えたスイカだ。大きなエメラルドグリーンの瞳がひととき不気味で、まさにエメラルドのそれだった。正六角柱のエメラルド宝石を敷き詰めた巨大なハニカム構造の巨大な目。

「見つからないようにいくぞ。静かに。」

小声でガンドが言った。

「凶暴なのか？毒は？」

僕は聞いてみた。いや、確認してみたといったほうがいい。どうみても凶暴そうだし、絶対に毒もあるな。ケツに毒針が仕込んであるに違いない。

「どうだろうな。今のところ、襲われた奴はいない。毒はわからないが。あるだろうな。毒がなくても噛まれりや大怪我だろう。下手すりゃ食われるな。単独行動らしいのだけが救いだぜ。」

「もつともだ。」

本気でそう思った。あんなものの集団に襲われたら生き残る自信は微塵もない。僕たちはエメラルドグリーンの瞳から目を離さないようにしながらジリジリとその場を屈んで進んだ。スーツがなければ腰を痛めていたかもしれない。わりと長い時間そうしていたに違いない。突然、スイカ蜂が翼を広げた。額に冷たい汗が滲んだ。緊張が走った。僕は決死の思いでコイルガンを構えた。銃口は蜂の方を向いている。ガンドも巨大な銃のトリガーに指をかけた。じっと身構えた。身の毛もよだつ羽音が轟いた。気持ちの悪い音だった。ハチやハエが飛び回るときの音を耳元で聞いたときのあれと同じだ。全身が鳥肌になった。ところが、スイカ蜂は明後日の方向へ飛び去った。蜂が見えなくなってから僕たちは立ち上がった。

「ふう・・・」

ふたりとも額の汗を拭った。そしてまた歩き出した。

「もうすぐだ。」

「そりゃあ嬉しいね。」

僕は言った。

夜の世界

僕は歩き続けた。感覚的には1時間ほどだったと思う。僕が初めて朝を見てからかなり時間が立っているのだが、太陽の光の眩しさはそれ以上強くも弱くもならなかった。この世界は、不思議な巨木の森は、永遠の朝の世界なのだ。木漏れ日に向かっている間にも僕は見たこともないような現象や草花、生物に驚かされた。何故か大きなリーチを描いてそびえ立つ巨大な桜の樹が本当に美しかった。10m程上空へ伸びたかと思うと、そこから釣り針を描くようにして下向きにカーブを描き、その先端には花びらが咲いていた。気絶しそうなほど誘惑的な香りはおの桜の花びらから発せられているに違いない。その時、僕は桜の花びらが蜜を出すということを初めて知った。地面から3m程のところにある逆さの桜の花々は淡いピンク色の蜜を滴らせていた。みると、その下の地面にはピンク色の水溜りができていた。甘美で艶やかな液体はワインに染められた水銀を思い出させた。あまりの美しさに僕はかえって毒々しさを感じた。永劫の眠りを与える。それほどの美しさだった。魅惑的毒々しさだった。僕はやつとの思いで、あの水溜りに近づこうとする自分を諫めたのを、よく覚えている。

「近づくなよ。」

ガンドにそう言われなければ、僕は永遠の眠りについていたに違いない。

「おれもあれを近くで見たくなった。おれが近づこうとしたとき、鳥が飛んできた。明らかにあの蜜溜りに近づこうとしていた。ところだが、急に鳥が落ちたんだよ。本当に眠るようだった。蜜溜りの手前に墜落して動かなくなった鳥を、おれは啞然として見ていた。何事かと思っただ。そのまま鳥は動かなかった。」

すると、桜の花びらから何か黒くて小さな物が落ちてきた。生き物だったに違いない。大量の、極小の生物。蟻だったのかもしれない。

ない。見たこともない数の蟻が鳥の全身を覆い尽くしたかと思うと、あつというまにその小さな生物は樹を登って花びらの中に戻っていた。鳥がいた場所には何も残っていなかったよ。一羽も、血の一滴も。」

そっけいのは共生というんだったかな。と僕は思った。この話を聞いた時ぐらいから、僕はもうどんな事があっても驚かないだろうな。と思った。これだけ自分の想像の遙か上をいく事態を連続して経験させられると、そうなんても仕方がない。

「到着だ。」

出し抜けにガンドが言った。

「到着？何も無いじゃないか。」

「ここだよ。」

ガンドは足元の落ち葉を足で払った。大量の落ち葉はそれなりの重みがあったらしい。ズズ、という音がなった。見ると地面から大きな取手があった。何で出来ているかはわからないが、頑丈そうなのは見てわかる。

「手伝ってくれ。」

僕はガンドと一緒に取手に手を掛けた。タイミングを合わせて同時に引き上げた。思ったよりも分厚く、大きな扉だった。扉の上から落ち葉が流れ落ちていく。スーツの補助がなければ到底開けられなかったに違いない。

「なんだこれは・・・」

僕はひとりごとを言ったつもりだった。完全に開いた扉の下に梯子があった。地下はかなり深く、地表の様子は見えない。

「入るぞ。」

ガンドは端的に言っで。僕を促した。

「気をつける。」

僕は頑丈そうな素材の - あの取手と同じ素材だろう - 梯子に足をかけ、慎重に体を沈める。それに続くようにしてガンドが上から梯子

に足を掛けた。

「よし、扉をとじるぞ。」

「わかった。」

ガンドは右手で内側の取手を握り、唸りながら扉を勢い良くしめた。轟くような爆音がなった。同時に強烈な風が上から僕を襲った。油断していたら吹き飛ばされていたかもしれない。それぐらいの音だった。音の方も、パイナップルの爆発音を間近で聞いたりしていなければ、かなりまいっていたとおもう。

扉が閉まると、そこは絶対の暗黒だった。漆黒の宇宙だった。周囲数メートルも、数センチもなかった。一切の視野がなかった。僕は僕の周りの空間に吸い込まれそうになった。永遠につづくような闇に溶かされそうになった。僕はその感覚に気を失いそうになった。今僕は上を向いているのか、下を向いているのか。暗黒は、重力さえも飲み込んでしまったのかと思えるほど、僕は平衡感覚を失っていた。

気が遠くなるのがわかった。このままでは梯子から両手を離し、落ちてしまうだろう。いや、僕は本当に今、梯子につかまっているのだろうか、僕はもう落ちているのかもしれない。絶対の不可視が、僕からすべての感覚を奪ったように感じられた。

潜水艇

出し抜けに光が見えた。それは紛れもなくガンドの点けたライトの光だった。頭上に光が見えたので、さっきまで失っていた上下の感覚が戻ってきた。重力が足元に向けて力を発揮していることも感じられた。平静を取り戻した僕は、自らのライトが何か、光を放つ何かを探そうとして、森の外で使った懐中電灯を思い出した。だがそれはすでに僕の手元にはなかった。バックパックのどこかにしまってしまった記憶はなかったので、圧縮アーミーナイフと一緒にどこかに落としてしまったのだらうと諦めた。そこで僕は、スーツの胸ポケットから頑丈なペンを取り出した、反対側を絞ると、それは蛍のように――人工的な光ではあるが――発光した。ペンライトとしては強力な光だったが、ガンドが使うさつきよりも小型のアンチマテリアルライフルのサーチライトよりは微弱な光が僕のまわりを照らし出した。だが地下の空間はサーチライトや僕のペンライトが照らし出せる範囲よりはるかに広大で、やはり四方の空間の広さを把握することはできなかった。足元を照らしてみても、やはり下の空間は光の照らし出す範囲より相当に深く続くように感じられた。実際そうだろう。

「この梯子はどれくらい続くんか？」

「1時間ほど下れば足元がある。墜ちたらただでは済まないだろう。スーツがあれば死にはしないだろうがな、頭さえ打たなければ。」僕は気が遠くなりかけた、あと1時間、この梯子を下り続けなければならぬのだ。僕は深海を着実にめぐり続ける深海潜水艇を思い出した。何一つない圧倒的な暗闇のなかで、自らのために発光し続ける孤独な一人旅。実際のところ、僕は潜水艇はおるか船すら見たことはないのだが。そもそも海というものは存在しなかった。しかし今では、広大な海だって、どこかにあるのではないかと、地球を疑えるまでになっていた。

保存食

ガンドは見た目より気さくな男で、長大な梯子を降りている間、いろいろな話を聞かせてくれた。その話によると、この先には研究所があるらしい。信じられない話だったが、死の大地から逃れようとした人々が作ったシェルターだろうと言われて、僕はなんとなく納得した。太平洋という海があった場所に逃げ出した僕らの先祖とは別に、地下に避難所を求めた人々も存在していたのだ。ということとは、他にもどこかにシェルターが存在している可能性は大いにある。ただし、そこに逃げ込んだ人々が行きっている可能性は高くない。ガンドが言うには、ともかくこのシェルター内には一切の生命反応がなかったらしい。人間どころか、虫や鼠のような小動物の一匹も存在しないということだ。それより小さな微生物や植物に関しては確認できなかったらしい。生き物の死骸や残骸は全く見当たらなかったという。これは少し妙だった。逃げ込んだ人々がいたのならば、何らかの痕跡があってもおかしくはないはずだからだ。何しろその地下施設には今でも飲み食いできる食料と水が―そのすべてが保存食ではあるが―あるというのだから。僕は何世紀も前の保存食を想像してみた。うまく想像できず、それが形を成す前に僕は想像を諦めた。僕は森に落としてしまったアンティークの懐中電灯と先祖の思い出が詰まっていたであろうアーミーナイフの話をした。僕はそれほど気にしていたわけではないが、それを聞いたガンドは気の毒そうな顔で「残念だったな。」といった。

「いいんだよ。そういうことには興味がないんだ。実際、僕は先祖の顔も知らないからね。」

「いや、惜しいことをしたぜ。そういうものはきつとお前を守ってくれるんだ。」

「そういうものかい？」

「そういうもんさ。」

地下の地表に足をつけたとき、僕は心底安心した。大地の温かみを地の底で感じた。比喻表現ではなかった。

同化

梯子から手を離したとき、しばらく拳を開くのに時間がかかった。僕は思ったよりも強い力でずつと梯子を握り締めていたらしい。グローブの中の指先まで血液が行き渡る音が聞こえた。それは実際に聞こえた。何しろここは静かなのだ。僕は両手の手のひらを見つめた。心臓の運動に合わせて、両手は鼓動しているように思えた。暗黒世界の圍繞の中で、僕の両手ははつきりと熱を帯びていた。

「よっ」

鈍い音がしたが、僕は特別に見向きもしなかった。ガンドが梯子から飛び降りた音だと僕は疑わなかった。そして実際にそうだった。彼の巨体が約2mの高さから飛び降りたというのに、頑丈な地面は僕にわずかの振動すら与えなかった。

「行こう。あとは歩くだけだ。もちろん、わりと歩かんと行かんが大丈夫だな？」

大丈夫じゃない。と言いたかったが、僕は頷いた。まったく、女博士はよくこんな道のりを乗り越えたもんだ。と僕は思った。スーツの力がなければ、女性が突破できる道りではない。もつとも、スーツなしでは僕だって途中で力尽きていただろう。

この広大な地下のスペースに、まさか暖房設備があるとは思えなかったが、どうしてか、ここの温度はかなり快適なものだった。だがそれでも、永遠につづくかとも思える巨大な、触れることのできない暗黒の壁は何かしらの底知れぬ悪寒を僕に与え続けた。ここが人工的に作られたものなのか、自然に生まれた場所なのかという判断が僕にはつかなかった。地面に入り口が、ご丁寧に扉があったのだ、だからもちろん、ここが人によって作られたことは明らかなのだが、それでも何かしらの自然の空気がここには漂っていた。おそらく、長い時間が立ち過ぎたのだろう。人工的に作られた地下シエルトーは長い時間を経てその役割を果たし、恒久の時間によっても

う一度、自然に戻されたのだ。何しろ長い間、それこそ永久とも言える期間、この空間は止まっていたのだ。ただ時間だけを残り、忘れられていた。時間が全てを自然に返し、同化させた。

施設

「着いたぜ。」

ガンドがあまりにも出し抜けにそう言ったので、僕は少し驚いた。ガンドのサーチライトが照らすその先に、拍子抜けするほど人工的で、何の変哲もない扉が現れた。どんな素材でできているかは僕には想像できなかったが、それは鋼鉄のような物質だろうと僕は想像した。実際にそれは鋼鉄に近い何かに違いない。鉄というのは独特の冷たさや重みがある。そういう雰囲気があるのだ。匂いがするのだ。

扉の中に入った僕はもつと拍子抜けした。驚いたことは驚いたのだが、あまりにも準備ができていた。どんなところだろうと僕は想像していた。その想像はありえないことだった。突拍子も無い想像だったが、確かに想像していた。だから僕はガンドに、ここがどんなところか訊ねなかった。簡単にいえば、僕はそこが何かの研究施設のようになっているのではないかと思っていた。あの変わり者の女博士が滞在することに決めたのだ、それぐらいのびっくり施設じゃないと、彼女はそこに留まろうとはしないだろう。部隊の、彼女を護衛する隊員が、露骨に嫌そうな表情をしたところで、彼女はそれをみんな無視して奥へと進む。そういう女性だ。なんとなく、それは間違いないかと僕は信じていた。結果的に言えばそこはやはり研究施設と言つてよかった。大昔のコンピュータや機器がそこにはあった。超が頭につくほどの年代物のホロ・スクリーン・システムや、原始的な配線の伸びたビル式コンピュータなどがそこにはあった。そしてその施設は、僕の想像よりも遥かに狭かった、天井は3m半ほどしかなく、面積もテニスコートより少し広い程度だ。驚いたのは、そこにある施設のコンピュータなどのいろいろな機器が作動していたことだった。ほんとうはそれにだって驚いていいはずだった。慣れというものは怖い。夢想だにしないハプニングやイレギ

ユラー、驚きに対しても人は慣れることができるのだと僕は悟った。
証拠は僕、精神がおかしくなっているのかもしれないけれど。

博士

「やあ。」

眠そうな声がした。女の声だった。やっとお出ました。肘掛け付きの椅子を滑らせて女博士がホロスクリーンの向こう側から現れた。スクリーンを突き破るようにして現れた彼女は白衣を着ていた。僕はそれに少し驚いた。女博士はそんな僕の心理を見透かしたように言った。

「着心地は悪くないんだがな。むしろよく出来ている。さすがに彼の作るものは良い。文句なく高性能だ。何と言ったか……。」

「ポリノだ。」

眉間を右手の人差指と親指でつまんだ彼女に僕は言った。

「そうだ。ポリノ博士。しかしなんというか、あのスーツを着ていると……着るべきものを着ていると言う感じがしない。」

そうだろうな。と僕は思った。彼女は白衣の下に白いブラウスを着ていたが、そこから連想されるのはあまりにも女の体だった。あのスーツは――実際には問題はないのだが――この美しい体には似合わない。ブラウスのすべてのボタンを止めるのはかなり困難だろう。

「脱がせてもらったよ。」

「そっちの方が似合ってる。問題ないだろう。」

「外に出るときは身につける必要があるんだがね。算出したところ、地上の放射線レベルは人体に悪影響を与えるレベルではなかった。

しかし、あの自然だ。まいったよ。専門外だ。私は動物や植物に関する研究をしたことは一度もない。それらの細胞や遺伝子や組織のことならそれなりの知識が通用するかもしれないが、はっきり言って、ここにいるあれらは生物であるというところまでしかわからない。そもそも、存在したことに驚いた、生物類がね。存在しないものを研究するなど、馬鹿馬鹿しいことだ。」

僕とこの女博士は初対面だ。僕の方は彼女のことを知ってはいたが、

何しろ彼女は有名人だ。変わり者の天才科学者として、ポリノと双壁をなす変人。名前も知らない初対面の男に、これだけ捲し立てられるのは変人だけだ。度を超えて馴れ馴れしいと言ってもいい、とにかくこのフレンドリーな女博士にとって僕の名前など興味の対象の枠を大きく外れているのだろう。

「ジョン・ビネズだ。」

僕は彼女の話が文脈的に句切れがいいと思ったところで、人生で最もシンプルな自己紹介をした。

「ビネズ。忙しそうな名前だな。君は歴史に興味はあるか？あるいは君が歴史学者としてこのチームに参加してくれる人材ならば、大助かりなのだよ。」

「生憎だが。歴史の知識については一般の範囲を出ないよ。どうして？」

「動植物がいるからさ、生物学者が研究しているのはあくまでシエルター内の農作物だけだ。彼らに関して、私は農作物学者と呼ぶことが正しいと思うね。いや、別に彼らに対して不満があるわけではない。私はこう考えるのだよ。この遺跡と言ってもいい原始的な、まあうまく作られてはいるが、地下シエルターにしてもそうだが、ここに存在している生物も、あるいは古代に存在した種族なのかも知れないと思ってね。すでに絶滅したと思われる種類のものだよ。例えば、サメとか、クジラとか、ゾウとか、カロールとか。私だって名前ぐらいは聞いたことがある生物か、それとも少なくとも我々には未知の既存生物か。何しろここは何世紀も未踏の極地だったんだ。もしそう仮定するなら――」

僕はそろそろ、彼女の言葉が自分に向けられている言葉なのか、彼女のひとりごと過ぎないのか、判断が付きづらくなってきた。

「――歴史学者に力を得たほうが効率が悪さそうに思えるのだよ。」
彼女が続きの論理を発せようとした時、他の女の声が、博士の言葉を遮った。

「彼女はファリス・ロマンコフ博士。知ってると思うけどね。それ

から私はミュキ・エレンス。よろしくね。」

明らかにミュキ・エレンスは女博士の代わりの自己紹介をした。

「ありがとう。」

僕は心の底からそういった。

生態系

ミュキ・エレレンスは博士とは対照的に背の低い女性だった。知的な雰囲気は博士とそれほど変わらないが、彼女の場合、それは怪しげな魅力になった。

「ジョン。よく来たわね。よく来れたわね。と言うべきかしら？ 私たちを助けに来てくれたのね？」

博士とは違ってスーツを着たままのミュキ・エレレンスが透き通った声で言った。

「僕は助けに来たつもりだ。ポリノは興味本位かもしれない、つまり何か面白い発見か何かがあったんじゃないかっていうやつさ。その博士が死ぬわけない。何かあったんだろ。と言ってたな。」僕は博士の方を見て言った。

「何かあったな、完全に何かあったと言えるな。」

後ろからガンドが言った。彼の巨体を見たあとのミュキの姿は小動物のようだ。

「どんなことがあったのかは後で詳しく訊かせてもらうつもりだ。だがその前に、ここは何なんだ？」

「わからんな、入り口があれなんだ、研究所兼ねたシェルターだと考えるのが妥当だろう。見ればわかると思うが、これらの、年代物のコンピュータがまだ作動するということには驚かされたな。」

「そういえば、入り口はあそこだけなのか？」

「おれは知らん。ここについてわりとすぐに戻ったからな。どうなんだ？ 探索チームにはお前も入っていたはずだ。」

「2人死んだわ。」

小柄な女は俯いて言った。躊躇無く言った言葉だったが、やはりそれは僕達の心を暗くした。それでも女は、立ち向かうように続けた。「地上に繋がりそうな扉は3つあったわ。1つは開かなかったけど、たぶん、向こう側に何かがあって開かないのよ。もうひとつはまだ

調べていない。とにかく、3つの扉があるところまで調べたのよ。」
そこでミュキ・エレレンスは両手を頭の後ろで組んで俯いた。

「続けて。」

2人の――僕には誰だかわからないが――死に悲しんでいないわけではなかったが、博士は半ば機械のようにミュキに言った。ミュキはそれに不満を感じているように見えなかった。むしろ、そうするのが正しい。という風に、一度ふつと口から空気を吐き出してから続けた。

「とにかく私たちは扉から出てみることにしたわ。最初に行ったのがさっき言った開かずの扉、次の扉を開けてみると、実際にそれはその世界とつながっていた、私たちがここに来るまでに見た不思議の森の続きのような場所だったわ。だけど――」

僕は何人のうちの2人が死んでしまったんだろ。と思った。もし3人なら、彼女以外は全滅してしまったことになる。

「――違うのよ。明らかに生き物の気配がしたのよ。それも1匹じゃないわ。ここに来るまでに見た獰猛な植物のことを言ってるんじゃないのよ？ たしかにそういうのもいたと思う。」

僕はゴクリと唾を飲み込んだ。

「動物がいたわ。一種の生態系があったわ。実際そういう痕跡はあったし、何より――」

この時、ミュキ・エレレンスは今までで一番難しい顔をした。

「あれは虫だったわ。大きな虫が私たちを襲ってきたのよ。」

ジョージ・バンディクー

ミュキの話によると、彼女たちは、外に出るための他の扉やら、古代人が残した何らかの遺跡やら道具やら、とにかく未知の何かを探索しようと4人のチームを作り、実際に探索をしていたらしい。すると3つの扉が見つかったものでそのうちの1つを開けてみた、それは確かに外の世界につながっていた。ところがその先には訳の分からない生物がいて、隊員の2人がその謎の生物に襲われ、死んでしまった。その生物は残ったミュキ・エレレンスとジョージ・バンディクーにも襲いかかるうとしたが2人は間一髪のところまで襲撃を逃れ、ここに帰ってきたということだ。

「見たこともない生物だったわ。体長は4mほどあった。あの大きな、不気味な羽音は―」

ミュキは両耳を抑えた、スーツの下では鳥肌が立っているに違いない。

「―思い出すだけで吐き気がする。大きな目が複眼で2つあった。私たちの頭より大きな目玉よ。細長い6本の手足に細長い胴体。背中には4枚の、とにかく大きな透明の羽があったわ。」

ブリックは高速で飛んできたあれの羽に胴体を引き裂かれて死んだわ。彼の悲鳴が耳から消えないのよ」

ミュキは嘔吐を堪えて続けようとしたが、ガンドがそれを遮った。「無理に話さなくていい。2人だけでも助かっただけでした。」

「いや、話しておいたほうがいい、ミュキも話すのは辛いだろう。おれが続きを話そう」

そこには短軀で筋肉質な男が立っていた。

「無事でよかった、ガンド。それからよく来てくれた、感謝する、ジョン。ジョージ・バンディクーだ。よろしくな」

昆虫

「ジョージ。よく帰ったな。怪我はないかね？」

「もちろんさ、博士。怪我一つ無い。ブリックとウエインのおかげだよ。感謝しなければならぬ。2人には」

「そのようだな。悲しいものだ」

博士は手近にあった椅子に腰掛けた。その表情は部下を失った上官のそれだった。立場的には実際にそうなのだろう。実質的に彼女がリーダー的な存在であるとは思えないが、名目的には彼女がこのチームのリーダーなのだ。

「とにかく、話さなければならぬ。さっきあったことを。ミュキ、その場にいた君に話す必要はない。気分がすぐれないなら、向こうで休んでも構わないよ」

大丈夫よ。とミュキ・エレレンスはすぐに応えた。

「いいだろう。ミュキの言ったとおり、ブリックとウエインが死んだ。巨大な昆虫に殺された。俺が知っている、つまりシエルター内でも見かけられるハチとか、アリなんかとは全く違う構造をしている。」「

「攻撃的な生物なのか？」

ガンドが訊ねた。早くもこの大男は戦闘時のことを考えている。僕ははやれやれと思った。何しろ、ガンドがそう考えているということは、そういう事態が起りうるということなのだ。馬鹿でかい（4 m だった？）昆虫の駆除。

「いや、体の構造からは攻撃的なものとは思えなかった。毒針も牙もなかった。武器になりそうなものといえば、あの羽だな。薄い鉄板のような羽が高速で羽ばたくんだ。肉食性にも見えなかった、そもそも口がなかったから、バタフライのように樹液か何かを吸っているのかもしれない。」「

「そんな昆虫が2人を殺したのか？」

僕は訊ねてみた。仮にも軍隊の人間が強化外骨格を身につけていたのだ。

「そうだ、もちろん準備があればそれなりの対処はできただろう。しかしあれは本当に突然の出来事だった。いきなり後ろから飛んできたんだ。あれは相当な速さだった。そのときだよ、奇妙な羽音がして、突然何かが破裂するような音が聞こえた。気づいたときにはブリックは10mほど先にあった巨大な木に激突していた。彼の胴体は右の脇腹から心臓に渡って完全に避けていた。ほとんど即死だったろう。もし彼が死んでいないのであれば、俺達は今からでも助けに行かなければならない。だけど、あれは、完全に死んでいた。」

俺たちはすぐに上空を見た。羽音がする方向だ。そこにやつがいた。1人殺されたんだ。俺達は退散しようとした。その扉は例によつて地面から地下へつながるものだった。つまり梯子があったんだよ。俺達は一人ずつ扉に入る必要があった。扉の近くにいたミユキが先に扉に入った。次に俺が入ろうとしたとき、やつはウェインの背中に向かって突進した。俺が咄嗟に銃を取り出そうとしたとき、ウェインはブリックの死体と反対側の木に激突していたのだよ。致命傷だったに違いない。背骨が反対側からへし折れるような衝撃だっただろう。その時、ウェインにはまだ息があったと思う。そして巨大な昆虫は俺に向かって突進を試みようとして、明らかにこちらに向かって飛んできた。」

「ちよつと待つてくれ。ということは、ウェインはまだ生きているかもしれないのか？」

ガンドが僅かながら非難するような目で言った。

「いや、だめだろう」

「なぜだ？」

「例の化物草がいたんだ。扉に飛び込んだ時には、もうウェインはやつの触手にとりつかれていた。そうやって間一髪、俺達は逃げたわけだよ」

「そうか、何にせよ。その昆虫の対処法を考えておく必要があるな。」

いづどこでそいつに襲われるかわからん」
やはり戦うときは来てしまふのだろっか。

外科医

「ところで、大佐と先生はどこに行つたんだ？」

まるでさっきの話を、つまり2人の死の話を聞いていなかったように博士は言った。無論、彼女にも、その死を残念に思う気持ちはあるのだろうが、僕にはよくわからなかった。つまり、彼女が本当にそういう事に対して関心があるのかどうかということだ。たぶん、あるのだろう。彼女だって人間で、そして女だ。僕はあまりにも、彼女の世間一般のイメージを持ち過ぎていた。そのイメージは気づかないうちに増大していた。しかし実際、彼女は「確かに変わっているが」人間的な心を持ち合わせているのだ。

「先生？」

僕には意味がわからなかったので、あまりにも意味がわからなかったので、自分の意志とは関係なく、ほぼ脊椎反射的に訊いてしまった。本当は僕はこの間、口を閉じているつもりだったのだ。

「そう呼んでいるだけよ、だってこういう所に来るんだもの、ドクターは必要でしょう？本名はレイヴン・ジャックよ。ドクター・レイヴン・ジャック。優秀な医者よ」

それを聞いて僕は驚いた。

「レイヴン・ジャックだって？」

彼がこの作戦に参加しているというのか？ミユキは僕に彼は優秀な医者だと言った。それぐらいのことは僕も知っていた。ミユキだって僕が彼のことを知っていることはわかっていたはずだ。なぜなら、ドクター・レイヴン・ジャックは有名人で、現在の衰退した文明で言うなら、彼以上の名医はいない。天才外科医として世に名を知らしめる最高の名医だ。だが僕が驚いたのはそんな最高の医師がこのチームに携わっているからではない、レイヴン・ジャックという人間が携わっているということに驚いたのだ。そもそも、彼は嚴格たる医師免許を持っていない、そのことは誰もが承知だ。だが多

くの患者が彼のもとを訪れる。極点な人間を象徴して話すなら、天才レイヴン先生のもとに行けば万病は治癒し、あらゆる怪我が復元されると思われている。

そんなことがあるはずはない。馬鹿馬鹿しい、どんな病気も、怪我也も治してしまう医者。そんな人物がいるとすれば、それは天才科学者であり、天才精神科医だ。だが実際、彼はそうではない。天才科学者であるかどうかについては僕は知らない。あるいはそうであるのかもしれないけれど、僕は知らない。僕が確固として否定できるのは、彼が天才精神科医ではないということだ。

レイヴン・ジャックは医師免許を持たない。そして彼は良心の治療行わない。つまり、彼の治療には莫大な金が必要なのだ。そのために彼は医師免許を持たない、そんな医者が良き精神科医でありえない。

僕が入隊したちょうどそのぐらいの時、ドクター・レイヴン・ジャックは世間を大いに賑わせた。

ある老人を不老不死にさせたのだ。

それは科学的成功だった。老人の生命サイクルが半永久的に続く」と理論的に確認されたのだ。そしてその証明には著名な、権威ある2人の科学者が立ち会った。ポリノと、ここにいるファリス・ロマンコフ博士だ。その時の2人の博士の言葉を、僕はよく覚えている。あの日、研究施設に帰ってきたポリノの顔は青ざめていた。気絶しそうな目と、さも恐ろしいことが起きてしまったという風に、こう話した。

「あつてはならないことが起きてしまった。生命への冒涇だ。恐ろしいことだよ。確かにシン老人の生命サイクルは理論的には半永久的に繰り返されるだろう。けどね、人間は摩耗するんだよ。摩耗する永久機関と変わらない。それは真の永遠ではないんだ。わかるかい？あの男が創り出したのは、単なる残酷な処刑なんだ。精神的処刑だよ。彼が治すのはね、殻だよ」

そしてファリス・ロマンコフ博士の言葉を新聞で目にした。

「すごいことなのかも知れない」
それから3週間後のことだ。ドクター・レイヴン・ジャックは、
その老人を殺害した。

神業

「ヤブ医者^{クアック}じゃないか」

僕は立ち上がりかけた。僕とポリノは昔からの友人だ。彼が凶人だと呼ぶ人物を、僕は好きになれそうにない。たとえポリノがそう思っていないとも、僕の好きなタイプではないことは明らかだ。

「違うのよ、ジョン」

「誰がやかましい（クアック）って？」

そこに立っていたのは不気味な色、不気味な顔をした男だった。ポリノスーツとは別の強化骨格スーツの上に黒いコートをまとった男は、僕に死神を思い出させた。

「先生、大佐と一緒にじゃなかったんですかい？」

ガンドが意外にも好意的な、友好的な雰囲気です話しかけた。

「カッサード大佐なら1人で探索を続けてる。私も行くと言ったんだがね。大丈夫だと退かなかった」

「でもいくら大佐でもあんな大きな怪物が出てきたら太刀打ち出来ないわ」

「君が言っていた昆虫のことかね？ 私たちが見つけたのは外へ出る扉ではなかったよ」

「というと？」

いつの間にかはつか煙草を啜えている博士が言った。

「別の部屋を見つけたってことだな」

「素晴らしいな」

「私が行くと邪魔らしい。それに私が負傷すると何のための医者かわからんそうだ」

「なるほど、さすがはカッサードだ」

僕はこの会話を啞然として聞いていた。僕の目は言葉を発する人物へと次々視線を変えていた。実際的にそれは何かを見るという行為でなく、あるいはただ漠然と見るという行為をしていただけかも

しない。

この黒尽くめの男は闇医者で、詐欺師で、殺人者なのだ。そしてそれより、どうしてこんな男がこの作戦に参加している？要請があったとして、それはわからないでもない、超一流の、神の手を持つ医者だからだ。問題は どうしてこの気まぐれな大物が、世間からはじかれ者が、その要請に応じるのだ？

僕は乾いた唇を無理やりこじ開けて声を出した。

「どうしてあんたがここにいる？」

医者は戸惑いもせず答えた。

「私だつてこんな、一文にもならない話はごめんだ」

そして医師はニヤリと、悪意ある笑みを浮かべた。

「正式な医師免許が欲しくてね」

「国の要請か？」

「もちろんだとも、わかつてるだろう？私が善意でこんなことをするとでも？」

そう言つて笑うドクターを見て、僕は奇妙な感覚を覚えた。確かにとびっきりの悪人だ、僕は好きになれそうにない。しかし彼からはどこかしら僕が想像してた程の狂人的性質は感じられなかった。

「守銭奴め」

「君が私の何を知っているか知らんが、そうさ、私はね、金というものが大好きなんだ」

医師はニヤリと笑っている。僕の悪態を全く気にする様子はない。おそらく、慣れきっているのだろつ、こういう悪態をつかれることに。もし慣れていないとしても彼はこういうことに動じない性格なのだ。僕は何となくそれがわかった。彼は世界の嫌われ者であることに愉悦を感じているようにすら見えた。

「だが、私は君のことを知らない。恨みを買った覚えはない。つまり君と私は初対面だ。治療を断ったことも、治療をしたこともない。つまり君も私のことを本当はよく知らない。だがね、私はあんたの想像通りの人間さ。そう思つてくれて構わないぜ」

彼は悪人特有の余裕を惜しみなく持ち合わせていた。神がいるのならあまりにも不公平だ。あるいは彼が神の両手をもぎ取ってしまったのかもしれない。彼がどんな人間であれ、その両手には神業が備わっているのだ。

探索

「カッサード大佐が見つけた部屋というのはどこなんですかい？先生」

「南だ。ただ、扉の先にあつたのは部屋ではなく廊下だよ。カッサード大佐は1人で探索を続けている。向かうかい？」

「そうですね、大佐と合流してこれからの方針を立てたい」

「私が案内することになるようだね、やむを得ない」

「3人程度でいいわね、大佐を見つけたら帰ってきましょう」

「それがいい、私はここに残って作業を続ける」

博士ははつか煙草をくわえて年代物のコンピュータに向き直った。「作業？」

一度コンピュータに向き直った博士に、僕の声は届かなかった。

答えたのはガンドだった。

「無線機だ。俺達がここに持ってきたものは使い物にならなくなってしまった。周波数の問題だったか、地場の関係だったか、とにかく博士が今、新しいものを作っているんだよ。幸いにも材料や器具は揃っている」

「じゃあ僕の無線機はどうせ使い物にならなかったわけだ」

「そうとも限らんよ。ポリノ製だろう？俺達のものとは違う、もしかすると使えたかもしれん」

「悪かったな」

巨体に見合った笑い声と共にガンドは僕の背中を叩いた。

「気にするな。とにかくもう無線機は使えない。新しいものができるまでまとう。博士のことだ、そう長くはかからんよ」

スーツを着ているにもかかわらず背中に強烈な振動を感じたのは、大男もスーツを来ているからだろ。凄まじい怪力の持ち主なのだ、この男は。

「私と先生、それからジョン。この3人で行きましょう。ガンドは

博士をお願い。できれば女2人が一緒にいるのは避けましょう」

「うむ」

ガンドは力強く頷いた。

「ジョン。この施設の全容を、私たちも理解しているわけじゃないんだけど、あなたはここに来たばかりだし、私たちと一緒に行きましょう」

「わかった、役に立てればいいけど」

「大丈夫よ、あのエルンスト博士が選んだ人だもの。さあ、急ぎましょう」

ただ友達だからだよ。僕はそう思ったが、口には出さなかった。事実、僕が選ばれたことは事実だし、役に立つつもりでいたからだ。

想像

博士と会った大部屋の南側には扉があつて、その先には廊下があった。そして廊下は二手に分かれていた。一方の道をミュキとジョージ、そして死んでしまつたウェインとブリックという2人の男が向かった。そしてもう一方の廊下を進んだのがレイヴン・ジャックとカッサード大佐だ。

僕はカッサード大佐という人物を想像してみた。頭が良い人物なのだろう。敏腕のエリート軍人、そんな感じだろうなと僕は想像した。何しろあの博士に「さすがはカッサードだ」と称され、ひねくれ者のレイヴン・ジャックにそれなりの指示を出し、おそらく超優秀と言える軍人の集まりであるこの部隊の要に選ばれた人物なのだ。ガンドのような大きな体にミュキのような知性を持ち合わせ、ジョージに劣らぬ社交性を持ち合わせた完璧な男、そんな男の姿を想像しようとしてみたが、それはひどく難しい作業だった。それは僕の想像する完璧を超えた完璧なのかもしれない。

「先生、ここから先はお願いします」

「かまわんが、ただまっすぐ歩けばその扉はある。それから先にまた廊下が続く。そこから先は私たちにとって未知だ。冒険だな」

「カッサード大佐を1人で行かせたのか？つまり、先が無くなつたから大佐を残したのではなく、大佐1人にその冒険をさせたのか？」

「そうだ、はつきり行つて彼が太刀打ちできない問題が発生したとしたら、私など足手まといにしかないならんよ」

医師は歩みを続けながら話した。僕の目は先にある扉を見続けていた。それからふと、天井の両隅にあるライトのことを考えた。どいう仕組でこのライトは機能しているのだろうか。博士が点けたのだろうか。まさか大昔から点きっぱなしだったわけではないだろう。

「2人で引き返してもよかったんじゃないか？何か急がないといけ

ない理由でも？」

「さあね、私は医者だ。軍人の考えることなどわからんよ。大佐がそういう性格なのかもしれん。無駄を省略したいのかもな」

「ミユキ。そういえば僕は聞いていない、なぜこんな地球の最果てに調査に来ているんだ？結果的に、こんな場所があつたわけだけど、それは予想されていたことなのか？」

「何も聞いていないの？エルンスト博士もわりといい加減なのね。科学者の人たちってみんなそうなのかしら」

女博士に会ってから、僕もそれについて多少の疑問を持っていた。

空調管理

「私たちが探していたのはね、熱資源よ。この地域に近づくほど気温が上がるのは知ってるわよね？」

「えらく安易な考えだな」

「それがそう単純でもないのよ。確かに考え方はシンプルよ。だけど状況はあなたが考えているよりはるかに深刻だと思うわ。」

最も簡単な言い方をするならこうね、私たちの住むシエルターにはもう、資源がないのよ。エネルギーを作り出すための資源がね。シエルターで最もエネルギーを使っているのはどの機関か知ってるわよね？」

「空調管理かい？」

「そうね。もつと詳しく言うならばね、温度調節よ。ナスカ・システムも万能じゃない。時間と共にじわりじわりとその力を失っているわ。食物や電気に関わるエネルギーを作り出すのにサラ・システムはそれほどの資源を必要としない。熱を創りだすのにもね。だけど熱に関して私たちが枯れ果てた自然界以外から補わなければならぬ莫大なエネルギーはね、ナスカ・システムをもつてもそれほど長く持たないことがわかったのよ」

「補えなくなるとどうなるのかね？」

「質問したのはレイヴン・ジャックだった。」

「寒くなるなんてものじゃない。シエルター内の人間全員がこのスーツを常に身につけたとして、1日に何人もの凍死者が出ると思われます」

「不可能だな。そもそもこのスーツをつくるのにどれほどのエネルギーを必要とするか」

後に聞いたところ、この医師の着ているスーツだけはファリス製でも、ポリノ製でもないらしい。ファリス製のものに似ているのは、彼が女博士と共同で自分専用のスーツを使ったからだ。

制作に莫大な費用を要するこのスーツを特注することを、政府はもちろん拒んだ。しかし最終的にはこのやぶ医者に専用スーツを用意するはめになった。医師の言い分としては、医者には医者のやり方と用意がいる。ということだ。もっとも、ファリス製とポリノ製のスーツに大した違いはない。やぶ医者専用スーツがどのようにできているかは知らないが、多少の構造や装備の違いはあれど、そのスペックに大きな差はないだろう。

「だがそれで、どうしてここに来るんだい？新しい熱エネルギー算出システムを考えるほうが可能性がありそうなものだが」

「その可能性がなかったのよ。この問題を解決するためにファリス博士と、あなたのよく知るエルンスト博士はシステム開発に躍起になった」

知らなかった。ポリノはそんなプログラムにも参加していたのか。「だけど無理だったのよ。一時的な熱を僅かな期間作り出すことは可能だったけど私たちの生活を支えられるほどの熱のみを生み出すことはできなかった。本当の、ただの熱だけを生み出すことができなかったのね。具体的に言うとな、私たちが求めていたのは気温なの、気温という自然のものを作り出すプロセスは、シエルター外部が極寒となってしまった今、どうしようもなく実現できないことなの。片方のパズルを組み合わせると、必ず反対側のパズルが外れてしまう。ファリス博士がそう言っていたわ」

ここに来てようやく、女博士がファリスと呼ばれることに僕は慣れてきた。しかしポリノがエルンスト博士と呼ばれることに慣れるのには、もう少し時間が必要かもしれない。

綱

「つまり、これは最終手段なのよ。人類の最後の頼みの綱」

知らなかった。今日は知らなかったことをいっぺんに知りすぎだ。何しろポリノはそんなことを僕にいちいち説明しなかったのだ。

「全く不運だ。どうしようもないから、とにかく暖かいところに行つて、そこは住めるのかどうか、あるいは何故そこに気温があるのか、生贄にされに來たというわけだぜ」

あるいはレイヴン・ジャックの言葉は正しいのかもしれない。

「まず住めそうにないね。そして僕らはまだ先に進まなければならぬ」

「そうよ。そして確かめないと、外で見た光が本当に太陽の光ならそこでミュキは「あなたもそう思ったでしょう？」という目をこちらに向けた。

「―私たちの、はっきりしないものだけど、私たちの歴史の間違いが証明される、太陽はあったのよ、私たちに見えないところにあっただけ。素敵だと思わない？」

僕はそれについて何も答えることができなかった。あの時、僕は確かに、天空から突き刺さる光の束を、本能的なものだろう、太陽の光だと感じた。そんな僕の心を見透かしたように、レイヴン・ジャックは言った。

「あれは太陽の光だね。私も初めて見たが、私の本能はあれを太陽だと疑わなかった。世界に存在する最高のプログラムはね、本能だよ、ジョン」

僕の方を向いた世紀のやぶ医者、犯罪者、殺人犯のカラスのような目は、僕には掴めない曖昧さと不自然さの霧の中に、優しそうな影をちらつかせていた。

「先生、ロマンチックなことですよ。プログラムだなんて、機械的な言葉で片付けしないでください」

黒い衣装に包まれた医者は笑った。

「ロマンチックなのかい？これは？面白いぜ、君は。だが君だって、初めてなのにそれが恋と、初恋だとわかっただろう？」

僕がミュキ・エレレンスの女性らしさについて、容姿と言葉遣い以外で感心したのはこれが初めてだった。

非現実的な空間での非現実性は、それとは逆の一種の現実性を僕に感じさせた。

「さて、ここから先の道は私にはわからない。開けてもいいのか？」
「僕が開けよう」

安全装置

僕は念のためコイルガンを右手に構え、安全装置セーフティを外した。それに答えるようにミユキはペルーサー19を両手に構えた。歴史ある、女性らしいマシンピストルだ。カップアンドソーサーのそのスタイルが美しく、これもまた女性的だった。レイヴン・ジャックはというと、両手をポケットに突っ込んだままだ。この男は銃を持っていないのだろうか。

僕は扉に左半身を寄せて逆手の左手でノブをしっかりと握った。ノブからは何の感触もしなかった。スーツからつながるグローブの生地が軋むような音を少し立てただけだ。

反射的に軍隊式の言葉が口から出た。ただしそれほど大きな声を出さないようにはした。

「ムーヴ」

それと同時に僕は室内に飛び込んだ。思ったほどドアは重くなかった。鋼鉄に近い種類の材質の扉だったが、僕はほとんど力を込めずにそれを開けることができた。そうだ、僕が着ているのは強化外骨格をまとった特殊スーツなのだ、鋼鉄の扉があつたとして、こじ開けるのにどんな苦労も必要ではない。もっともこのドアに鍵穴は存在しなかったのだが。

僕が飛び込んだすぐその後に、身を寄せるようにしてミユキが飛び込んできた。僕は両足でしっかりと床を踏みしめて右斜め前方に向けて両手でコイルガンを構えた。跳ね上がりの強いコイルガンの衝撃に備えたその構えはフィンガーレストだ。僕はここに来る前、しっかりと僕の指の形にあわせてトリガーガードを削っていた。万全の準備は時に不安を取り除いてくれる。だがそれは非戦闘状態の時の気休めに過ぎないと僕は知った。ミユキ・エレレンスは左膝を地面に付け、僕とは反対側、つまり左斜め前方に向けてペルーサーを構えた。美しいカップアンドソーサーは依然として変わらない。

刹那の時間、僕らはその体制を保っていたが、すぐに大した危険がそこにはないと判断できた。やはりこの施設内は安全なのだろうか。地上にいた僕達に危害を加えるおそれのある動植物はそのテリトリーをこの地下に向けてはいない。というよりも物理的に見つけられず、侵入もできなかったのだらう。恒久に近い時を経て、この空間は僕達に侵されたのだ。

僕は銃を降ろした。安全装置は念のため外したままにしておいた。ミユキも立ち上がり、ほっとしたように銃をホルスターに戻した。見るとミユキ・エレレンスのペルーサには見事なエングレーブと、見たことのない文字が彫ってあった。当然その文字の意味は僕にはわからなかった。だがとにかく、どことなく芸術的で美しい文字だった。実際には、それが本当に文字なのかどうか、僕に判断のしようはないのだが、なんとなくそれは文字だと感じられたし、おそらく本当に何かの文字なのだ。

両手をポケットにしまったまま、レイヴン・ジャックがドアから入ってきた。

「これは何というか、馴染みのある感じの部屋だな」

部屋

そこにあつたのはベッドのある部屋だった。もちろん、意味のない飾りのついた豪華なベッドではなく、とてもシンプルな、悪く言えば見窄らしい簡素なベッドだった。その空間は失われた熱に支配されていた。確かにある数の人間がその部屋を使っていたような痕跡があつた。なぜならこの部屋にはベッドの他にも椅子とテーブル、簡易なキッチンが備え付けられていたからだ。人が生活するために作られたスペースであることは明らかだ。木製のテーブルが時の流れに崩壊させられずにいる光景は、まさに時間という概念の消失を僕に感じさせた。それでもやはりそのテーブルは古びている、木そのものの齡が感じられた。そして僕はそのテーブルから一種の生命をも感じることができた。

ミユキ・エレレンスはゆっくりと、優雅な動きを伴い、左手でグリップを下から包み込んだ。すでに右手の人差し指はトリガーに添えられている。敏速な動きではなかったが、その動作からは緊張感が滲み出ていた。

この空間には――僕達が入ってきたドアのちょうど反対側にあるもうひとつのドアを除けば――異様な物体がひとつだけあつた。ペルサーの銃口はそこに向けられている。それは黒い布をかけられていたが、その中身の形は容易に想像することができた。黒い布の内部のそれは、明らかに人の形をしている。

アサルトライフル

「そーら、おいでなすった」

余裕のある声の主はレイヴン・ジャックだ。だがその声とは裏腹に行動は戦闘態勢に移ろうかという姿勢だ。懐に手を忍ばせ身構えている。ミユキの姿勢も戦闘に身構えたそれだ。何があの黒い布の中から現れるかわかったもんじゃない。

僕は黒い布の中にある何かの頭だと思われる部分に照準を定めたまま、じりじりとそれに近づいた。嫌な汗が出た。だがその汗はすぐにスーツの内側に吸収された。

気づかないうちに僕はできるだけ音を立てないような歩き方に移行していた。これが本能だろう。自らを守るために入力された最高のプログラム。本能、生存本能。

だしぬけに、何かの気配を感じた。それは黒い布の方向からではない。僕にはそれだけが判断できた。僕の方に向かってきたそれはあまりに素早かった。まだそれが何なのかわからない。僕は黒い布を睨みつけ、戦闘準備の構えをとったままの姿勢から動けない。

僕の右のこめかみに突き付けられていたのは、アサルトライフルの銃口だった。

大佐

「動くな、何者だ」

男の声は最小限の言葉しか発しなかった。渋味のある、深い井戸の底で発したような、低く轟くような声だ。

「待って！カッサード大佐！」

僕を死の恐怖から解放させてくれそうな言葉が女の口から発せられた。ミユキ・エレレンスの声だ。

僕は横目で男の方に目を向けた。視界が届かない。男の位置は見事に僕の視界の範囲から消えている。男の姿は臃げにしか確認することができない。そのうえ体の大部分はアサルトライフルの銃口によつて死角となっている。おそらく全て計算の上なのだ。ただ者ではない。僕も一端の軍人なのだ。

「彼は味方です」

アサルトライフルは僕のこめかみに突きつけられたままだ。この男に油断の二文字は存在しないのだろう。だがその銃口からは殺意は感じられなかった。しかし僕がその銃口をかい潜り、反撃の一手を加えるというのは賢い考えとは思えない。僕は本能的に感じているのだ。この男は上手だ。圧倒的な実力差がある。僕を組み伏せる程度のことは一瞬でやってのけてしまう。それがわかる、本能的に。「大佐。そこをぶち抜いちまったら治療も何もあつたもんじゃないぞ」

ひどくひねくれた言葉のように聞こえたが、それはカッサード大佐を諷めた。僕はこの医者をもどくように判断していいのかわからない。大物感たつぷりのその口調は、やはりだだの無礼な医者だというわけではなさそうだ。

「あんたなら治せそうなもんだ」

大佐はアサルトライフルを降ろして言った。僕は心の底から安心した。助けに来たつもりが逆に殺される、なんて不幸でマヌケな話

だろうか。僕は危うくそういう話を作しかけたのだ。

長身

僕はやっとその男の姿を見ることができた。頬のこけたいかにも軍人という感じの男だ。赤土のような色の短く切り立てたような髪は鋭く硬そうだ。顎と唇の上には濃い無精髭が生えている。高い鼻に彫りの深い顔。目は老練で油断がない。

何よりも目を見張るのは男の長身だ。身の丈はガンドのそれよりさらに大きい。それに加えての細身の体がさらにその長身を際立てている。痩せこけたように見える容姿だが、長大で重みのある軍式アサルトライフルを軽々と片手で構えていたことを思い出すと、スーツの下にある細身の体に備えられた逞しい筋肉を想像するのは難しくなかった。

やはり僕が無闇に反撃に出なかったのは正しい判断だったのだ。

「すまん」

大佐は至極短い言葉で言った。

「お前さんはもう少しリラックスしたほうがいいな。早死するぜ。シエルターの中に危険な生物はいないみたいだから、もう少し気を抜けよ」

レイヴン・ジャックが呆れたように言った。

「どうか。敵がいなくても限らないようだ」

「どういう意味ですか大佐。もし敵がいたとしても彼であるはずがありません」

そうだ。もしシエルター内に僕達に攻撃を仕掛ける何かが居たとしても、それは例の化け物草とか、恐ろしく大きな生物であって人間である確率は低い。仮に人間だとしたら、こちらに攻撃を仕掛けては来ないはずだ。

「彼が人間だからか？」

やはり、その程度のことは大佐にも判断できている。腕っ節だけの軍人ではない。

「そうです。もう少しで彼を殺すところでした」

僕には恐ろしくて口にできないような言葉をミユキは口にした。それとも、僕がカッサード大佐に対して恐怖し過ぎなのだろうか。おそらくそうだろう。

「すまなかった。何しろ、そうとも限らんだ」

そう言っただけでカッサード大佐はさっきの黒い布をつかんだ。

どういう事だ？ そうとも限らんだよ？ 僕が敵となる可能性がある、ということか？ 人間が存在し、僕達に危害を加える可能性がある、ということか？

カッサード大佐は勢い良く何かに被せられていた黒い布を剥ぎ取った。

男

「なんだこれは・・・」

僕は阿呆のように口を開けた。啞然としたというやつだ。見ると、ミユキも驚きの表情を隠せないでいる。

「こりゃあ、たまげた」

レイヴン・ジャックですら驚いた布の中身は人間だった。いや、正確に言うならば、人間と全く同じ姿をした何か。

それはスキンヘッドの男の姿をしていた。妙に青白い肌を除けば、彼は僕達と全く同じ姿をしていると言えるだろう。ただし、見開かれたままの目からは生氣というものが全く感じられなかった。彼はただただ何も無い空間を見つめ続けている。それはまさにこの男の時間というものが止まってしまっているようだった。

「これは、何でしょうか？」

誰にというわけでもなく、ミユキが疑問の言葉を発した。

「人間なのか？」

僕はカッサード大佐に訊ねたつもりだったが、答えたのはレイヴン・ジャックだった。

「違うな。彼は人間じゃないぜ。私にはわかる」

医者はこの男を人間ではないという、だが医者は男を彼と呼んだ。「生物なのか？生物特有の匂いが感じられない気がする」

医者は男を生物ではないという。どういふことなのだろうか。あるいは医者が間違った判断をしているという可能性もあるが、彼の言葉にはどこかしら僕達を納得させるものがあつた。確かにそうなのだ、この男は完全に止まっている。それは彼が生物だったということなのか、もともと生物だったのか、僕にはわからなかった。

アンドロイド

「さすがだな、医者よ」

カッサード大佐の声が響いた。すかさずミュキが疑問の音を上上げる。

「どういうことですか？これは、何なのですか？」

ミュキが少し興奮気味なのを僕は察した。それは動揺と呼ばれる心理状況だ。それは僕にも言えることだ。ただし、ミュキほど物事に対して色んな疑問点を見つけることができない分、僕は彼女よりは落ち着いていた。

「落ち着け、ミュキ。彼はアンドロイドだ」

当然のようにカッサード大佐もそれに気付いていた。アンドロイド？何を言っている？そもそも、それが本当だとして、どうして大佐がそのことを知っているのだ。

「アンドロイド？」

僕は眩暈を感じながら言った。カッサード大佐の顔はまるで冗談を言っているようには見えないし、そもそも大佐が必要でないことを口にする性格には見えなかった。

「ちよつと待ってくれ。何もかもがいきなり過ぎる。アンドロイドって？」

「アンドロイドだ。人造人間だろう」

「どうして彼がアンドロイドだとわかるんですか？」

ミュキはこのアンドロイドを（彼）と呼称することに決めたようだ。

「ここだ」

大佐はアンドロイドの首筋を指した。黒くはつきりとした、全く劣化していない文字で `Android` `COM-LOG` と記されている。

ミュキは不思議そうに動かないアンドロイドの腕を撫でている。

その感触はきつと僕らの腕と何ら変わらないのだろう。

「アンドロイド・コムログ? どういう意味でしょうか」

「それは私のマニユナンバーです。設定上の正式名称としてはタウマタファカタンギハンガコアウアウオタマテアポカイフェヌアキタナタフとお呼びください」

クロノキ

僕が驚愕で声を上げそうになっている時、カッソード大佐は既にアサルトライフルをアンドロイドに向けていた。既に完璧な構えが整っている。「お前は何者だ？」とは言えない。何しろアンドロイドは既に名前を言っている。馬鹿みたいに長い名前だ。

数秒間の沈黙があった。僕とミユキの銃口もアンドロイドを捉えている。レイヴン・ジャックは少し下がったところで腕を組んでいる。

アンドロイドは完全に沈黙している。恐怖を感じている様子も、焦燥を感じている様子もない。さっきコイツが喋ったのは気のせいだったのだろうか。僕はできれば何となくだが―そうであって欲しいと思っていた。だがアンドロイドは時折、瞬きをするのだ。その瞬きは全くもって生身の人間と同じで、それは妙に不気味に見える。

大佐は様子を見ているのだろう。もしこのアンドロイドが何らかの攻撃を僕達に仕掛けようとしたならば大佐は簡単にアサルトライフルの引き金を引くだろう。だがそれでこのアンドロイドが生き絶えるのかどうかは僕に判断できることではなかった。アンドロイドは相変わらず、両手を上げることもなく立ち尽くしている。人間ならば咄嗟に両手を上げてしまうものだ。

「どうしました？ 私はあなた方に危害を加えるつもりはありませんが」

アンドロイドはもう一度口を開いた。

「どうしてここにいる？」

呼応するように大佐は言った。アサルトライフルはもちろん構えられたままだ。

「ここに住んでいるからです」

「どうということだ？」

「どういうことだと申されましても・・・ここに住んでいるのです」

「ここはどこだ？」

「クロノキです。正確に言えばクロノキ第4地区シェルターです」

クロノキ。彼はおそらく地名のことを言っているのだろう。だがそれは間違いなく大昔の地名だ。僕たちはこんな土地に名前をつけてなどいない。この時にもう全員が気付いていた。このアンドロイドは大昔に製造されたのだ。

「今はいつだ？」

当然そのことに気付いていたカッサード大佐はそう訊ねた。

「瑞歴47年です」

停止

僕達にはそれがどれくらい昔のことなのかわからなかったが、このアンドロイドの時間が止まってしまっていることは理解できた。

アンドロイドは人間らしく作られすぎたせいで、機械的な時計機能を持ち合わせていないのだろう。仮に彼が精密な時計機能を持っているのならば、何年かわからないと答えるだろう。ただし経過時間ぐらいは把握しているはずだ。

「それはお前が機能停止状態になった時点の時間か？」

そうか。と僕は思った。アンドロイドは既に彼が機能停止状態にあった時の時間を計算に入れているのかもしれない。仮にそうだったとするならば、僕たちはやはりアンドロイドが機能停止した時間からの経過時間がわかるわけだ。

「申し訳ありません。それは私が機能停止した時点の時間です。私に把握できるのは、あなたがたと同じ体感時間だけです。つまり私が機能停止状態にあった期間の経過時間は計測できていません」

「つまりお前は自らが機能停止してからどれくらいの時間がたったかわからないんだな」

「はつきりと申し上げますとそういう事です」

レイヴン・ジャックはやれやれという顔をして両手を広げた。ミユキと僕はというところにかく彼が僕達に危害を加えそうには無いと見て僅かに安心した。カッサード大佐がやっとな大きなアサルトライフルの標的をアンドロイドから外した。その表情にはほとんど形というものがなかった。

「あの、失礼ですが、これはどういう事なのでしょう？」

地域

「なるほど、そうでしたか」

僕たちはアンドロイドに現在の時代の状況についての話を聞かせた。アンドロイドはそこまで驚いた様子を見せなかった。それは彼がアンドロイドだからなのだろうか？

「驚くべきことです。たしかに、過去からそういう懸念はありました。つまり近未来中に地球が現在のような姿になってしまいうだろうということです。事実そうなってしまうことが間近に迫った時代にあの事故ですから、なんとも」

「あの事故？」

あの事故とは、地球を滅ぼす大きな要因となったとされる悪魔の事故のことだろうか。僕は訊ねてみることにした。

「事故というのは、原子炉の爆発のことか？」

「そうです。67誘融炉崩壊事故と呼ばれる史上最悪の原発事故です。もつとも後々の見解としては起こるべくして起こったと言われる人災です」

「その事故が原因で人類が滅亡したわけではないんだな？」

「もちろんです。大きな要因にはなりましたが。当時の地球上の総人口は計測上で約87億人でした。さらにその人口のほとんどは世界最大の大陸であるラシア大陸に集中していました。元来この地域は乏しい土地と極寒、凍りついた港のせいで過疎であつた地域なのですが、温暖化により赤道付近が居住不能地域となり、港の氷が溶け始め貿易港としての機能を発揮し始めたころ急速に人口が増加したのです」

「それにしてもすごい人口ね。今とは比べ物にならないわ」

「そうでもないですよ。私のデータによれば、過去の世界総人口の最大値は約220億人です。」

とにかく、直接的な被害を受けた人々はその内の約35億人にの

ばりました。そしてその内で災害によって死亡した人々が約30億人。約5億人が被爆し全員が8年以内に死亡しました。食物や水の被爆によって二次的な被害を受けた人々が15億人、被爆した人々はほとんどが死亡し、その子孫にも甚大な影響を及ぼしました。経済の麻痺などによる食糧危機により被爆しなかった多くの人々も飢饉により死亡しました。何しろ当時の唯一の居住快適エリアだったと言えるラシア大陸で大規模な原発事故が起こったのです」

「起こるべくして起こったというのはどういふことかね？」

壁にもたれかかっているレイヴン・ジャックが訊ねた。

「私たちは原子炉を作りすぎたのです。当時ラシア大陸には石油という化石燃料がまだ大量に残っているという予想だったのです。ところが凍りついた大地が太陽の熱で解凍され、本格的な調査が入ると、それは幻想に過ぎなかったということが判明しました。」

そこで代替エネルギーとして選ばれたのが原子力発電だったので、大陸に集まる人々の消費エネルギーを補うには少なくとも75の原子炉が必要なのがありました。

政府はなんとか原子炉の数を67まで削減することにまでは成功したのですが、一刻も早い石油からのエネルギー転換を必要とされていたこともあり、無理矢理に原子炉を建設したのです。

立地条件なども検討した結果、67の原子炉群が完成しました」

誘爆

「なるほど、原子炉同士を密集させたのね」

「そしてある日、炉心融解を起こし爆発した原子炉は隣の原子炉を巻き込み、あとはもうねずみ算式です。人類に為す術はありませんでした」

割とまぬけな話だが、大事故の理由など、現実には思うより単純なミスによるものなのかもしれない。

「ということはこのシエルターはその爆発が起きる前から存在していたのかね？」

レイヴン・ジャックがもう一度訊ねた。

「そうです。ここは事故現場からは割と離れたところに位置していますし、世界有数の巨大シエルターですから。被害は殆ど受けていません」

「なるほど」

カッサード大佐が長身を乗り出して言った。

「その話はもういい、どちらにしろ我々はここから脱出しなければならぬのだ。一度体制を立てなおしてな。だがそれもこの先にそういうものがあればの話だ。熱を生むための技術でも何でもいい。そういうものはこの先に存在するのか？」

アンドロイドは腕を組んで考え込んだ。僕は彼に対して機械が内部に存在するいくつかのデータを引き出す様子を連想したが、実際に彼が考え込んでいる様子はまさしく人間と同じだ。

アンドロイドが声を発するまで、そう長い時間はかからなかった。「無いとは言えないのですが――」

ミュキと僕は身を乗り出したが、レイヴン・ジャックと大佐は極めて冷静な表情を崩さなかった。

雷吼樹

「まず言わなければいけないと思うのですが、あれは熱を作り出す機械でもなければ技術でもありません。端的に申し上げますと、生物なのです。雷吼樹と呼ばれる植物です」

「雷吼樹？それはどんな植物なのかしら？」

「5m程の大きさの植物です。細い幹に長い刺のような枝が付いている植物なのですが、1日のうちの何時間か、雷吼樹は燃えるのです」

「燃える？植物がか？それはどんな仕組みだ？」

レイヴン・ジャックが医者として訊ねた。

「生物が自ら燃えるなどありえない。発光する種や水を出す生物については聞いたことがあるし、その理由だっ理解できるものだ。」

しかし、植物が燃える？それはどういうメカニズムなんだ？そもそも燃えたあとはどうなる？お前さんの身体についてはよく知らないが、自然の生き物は燃える物質から成り立つのが普通だ」

「その通りです、ドクター・レイヴン、私たちもそのメカニズムを解明できていないのです。とにかく私のデータにはありません。」

それからもう一つ申し上げますと、ドクター・レイヴン。雷吼樹は燃えない物質でできているわけではありません。何故なら雷吼樹は発火したあとで、完全に燃え尽きるのです。燃え尽きたあとには黒い灰と細い幹が焼け焦げた炭が残るだけです」

「たまげたな。自らを消滅させる生命なんて想像したこともなかったぜ」

「雷吼樹は確かに消滅します。ですが、復活するのです」

「なんだって？」

気が付くと僕は自分で思っている以上の大きさの声を上げていた？客観的にはそれほど大きな声ではなかっただろう。しかしそれは僕の考えよりも大きな声だった。

「復活する？どついう意味だ？」
僕が言う前に、簡潔に、手短に大佐が訊いた。

復活

「復活です。C・カッサード。焼けた雷吼樹の炭は時間が経つとわずかに水分を取り戻し、もとのような幹に戻るのです。そして1日も立たないうちに、もともと根が生えていた部分から真新しい根が生え出し、寄生するようにして地面の中に潜り込んでいくのです。そしてやはり1日も立たないうちに幹はその身を起こし、復活するのです。それから枝が生え始め、80cmほどまで枝が生えたとき、雷吼樹は発火しだすのです」

信じられない話だった。この死の大陸に入る前の僕だったなら、全てをそんな風に片付けられていただろう。だが今はそれができない。したくてもできないのだ。このアンドロイドの言っていることは嘘ではない。

僕はもう知りすぎているのだ。化物草が僕自身を捕食しようと襲ってきた、生まれて初めて―どれくらい遡れるのかはわからないが僕の先祖においても初めてだろう―日光を見た、しかも広大な森の中で、圧倒的に聳え立つ巨木の海の底で朝を見た。気が狂ったような自然の底で地下に潜ると、さらにそこには暗黒の海があり、古代コンピュータの揃った部屋があり、青白い肌のアンドロイドがいて、そいつが僕に、それもえらく丁寧な言葉遣いで、燃えさかつては再生する植物の話をしている。

何もかもがでたらめだ。何もかもがふざけている。

真上

「なるほど、しかしメカニズムやら仕組みやらは俺達には関係の無いことだ。目処が立ちそうなものがあるのならそれでいい。かといってこのままではいかんだろう、一度シエルターに戻って部隊を立て直す」

（お前さんはもう少し驚いたほうがいいと思うぜ）レイヴン・ジヤックがそんな風に言ってくれることを期待したのだが、医者はそんなことは言わなかった。

「ちよつと質問させてもらって構わないかな？」

「もちろんです。M・ビジネス」

「まず、君のことはどう呼べばいいんだ？その、君の正式名称か何かは少し僕らには長すぎる」

「ごもつともです。M・ビジネス」

「コムログでいいじゃないかしら？だってそう書いてあるのよ」

書いてある。という表現はなんとなく残酷な気がした。このアンドロイドは自らを人間だと思っているかもしれない。あるいはそう思いたいのもかもしれないじゃないか。

「かまいませんよ、M・エレレンス」

コムログは全く否定ということをしなかった。彼は僕達に的確なアドバイスをするが、否定や拒否といったこと、自分が嫌だと言うことをしないのだ。

「その方が可愛いわよ」

このまま話が逸れるのが嫌だったので、僕は単刀直入に聞くことにした。

「君以外の人間はどこにいったんだ？」

「申し訳ありません、M・ビジネス。私が機能停止した時点では全員この地下施設にいたはずなのです。私が記憶しているのは私が起動状態で記憶したデータと、事前に書きこまれていたデータだけな

のです」

「事前に書きこまれていたデータ？」

「製造段階でプログラムされた記録です。つまりです、M・ビジネス。人類が認知する情報はすべて私が記憶していると言っても過言ではありません。停止状態以降のことは記憶にも記録にもありませんのでどうしようもないのですが」

「すごいじゃないか」

僕は心の底から、本当にすごいと思った。いうなれば彼は歩く百科事典と言っても間違いではない。

「ありがとうございます。しかしあなたがたにとって有益な情報を私は記憶しても記録してもいないようです」

「それでだ、コムログよ。雷吼樹というのがある場所まではどれくらいの距離がある？」

「やれやれ、大佐の頭にあるのは、現在の任務だけなのだ。そしてそれを遂行するにあたり、この男は右に並ぶものなど想像もできないプロだ。」

「ここの真上です、C・カッサード」

何もかもが急すぎる。

太陽

僕からすれば聞きたいことはまだまだあった。だがこの部隊の間はあまりにも任務とか仕事とかいうものに執着しすぎている。あるいはそれをプロというのだろうか。しかしそういうものはある意味で現実離れしている。さすがは選りすぐりの、最高のチームだ。

「そうか、それは運がいい」

「いや、良くない。」

「待ってくれ。まさかこのまま見に行くなんてことはないだろうな？」

「見に行きたいのか？ビジネスよ。それほど距離がないのならば、俺一人で様子を見に行こうと思っていたのだが、自信があるのならば来ても構わん」

僕の予想の斜め上に行く答えだった。

「そうじゃない。全員で穏やかに戻ったほうが良いと思うんだよ。燃える植物なんて馬鹿げたものがあるんだ、どんな危険な生物がいるかだってわからない」

「だから俺一人で行くのだ。ビジネスよ。帰ればロマンコフが通信機を完成させているだろう。簡易なものだが、森から抜ければシエルトーに通信することも可能はずだ。少なくともロマンコフはそういう設計をする。幸いにも多くの機材がここにはある」

僕は全くもって全員で確認しに行くのではないかと考えていた。

あるいはこの男ならば単独でこの森で生き延びることができるのだろうか。どちらにせよ、馬鹿げた発想だ。本当に何かあるのかわからないのだ。何が起るのか、何が住み着いているのかわからない。突然死をもたらす毒ガスがどこからか湧いてきたって、僕は多少驚く程度だろう。

「しかし――」

僕がその先の言葉を探ろうとしたとき、大佐の口角が弧を描いた。

ニヤリ、という音が聞こえてきそだ。そしてその表情は恐ろしく不気味だった。

「心配するな。サバイバルするわけじゃない。少し様子を見るだけさ」

この男は楽しんでいるのだ。

問題

「問題があります。M・カッサード」

「どんな問題だ？」

「率直に申し上げますと、雷吼樹がまだあるのかどうか、私にも確実なところは判断できないのです」

コムログは申し訳なさそうに言った。その表情は人間が申し訳なさそうにするときのそれと全く同じだと言ってよかった。

「雷吼樹の存在が確認できるのは私が機能停止した時点の話です。そして先ほど私が聞かせていただいた話によれば、外の世界は私の知っている世界と大きく異なっているのです。たとえば、たしかにクロノキは広大な森でしたが、あなた方に訊かせて頂いたような摩訶不思議な動植物は存在しませんでした。ごく普通の森だったのです。」

それに世界はまだ暑苦しく、現在のような極寒の世界ではありませんでした。広大な海も存在していましたし、太陽は当然のように東から昇り西に沈んでいきました」

僕はこの時はじめて、太陽が東から昇り西に沈むものだを知った。「造作無い。問題などない」

はやくもやれやれ、という仕草をしたのはレイヴン・ジャックだ。彼がこの部隊に召集されたのは、もちろん医師としてなのだろう。莫大な金が動いたはずだ。

そして僕も思った。問題だらけじゃないか。

丁寧

「どうせ確認するのだ。あればあるで万々歳だ。なかったとしても一度シエルターに撤退せねばならん。どちらにしても同じことだ」

僕は太佐を説得することが半ば無理なのだと思つた。この男ならそのくらいのこととは造作なくやり遂げられるのではないかと思つたのだ。自由にさせてやろう。ただし、この男が途中で死んでしまうようなことになればそれは大問題だ。帰りの道中でまたもし訳の分からぬ未知の生物が襲つてきたとき、この男がいないというのはかなりの損失だからだ。

「君はどうするんだ？」

僕はコムログに向かつて訊ねた。

「ここにいる必要はあるのかい？」

「いえ、正直に言いまして、私もどうしたものかと思っています、M・ビジネス」

「なら一緒に行かないか？君の知識というのかデータというのか、とにかくそれは僕らにとって必要だし、興味深いことだ。それに君だつていつまでもこんな地の果てで暮らすわけにはいかないだろう？」

「たしかにな、うまそうなメシもない」

これはレイヴン・ジャックだ。そういえば、ここには食料と水があると思つている。まだ誰も口にしてはいないのか、と僕は思つた。ガンドが飲み食いできる。といったのは予想の話だつたのだろう。それもそうだが、いくら見た目が食べられそうだからと言って、こんな辺鄙なところにあるものなど誰も口にしたいわけではない。

「構いませんよね？カッサード太佐？」

懇願の意味を含ませてミユキが言つた。

「造作無い」

なんの躊躇もなく太佐は答えた。

「そういうことでしたら、皆さん、私が力になれるかどうかはわかりませんが、きっと何か期待に応えて見せます。お供させていただきますよ」

「ありがとう」

僕は心の底からそう思った。僕はなんとなくこの丁寧なアンドロイドが好きになったのだ。

レーション

「それから、ドクター・レイヴン。さきほど食料のことを話されましたね？」

「それがどうした？ レトルトカレーでもあれば嬉しいね」

頭の後ろで手を組んだ医師は退屈そうに答えた。

「軍用レーションなら保存されているはずですよ。あれは持ち出されてはいないでしょう。山ほどありますよ」

「軍用レーションか」

僕はため息を吐きながら言った。あれはあんまり美味くないのだ。栄養価も高いし、現在の技術なら破損や劣化でもない限りは半永久的な保存性を誇る。だけど本当に美味くないのだ。

「この保存スペースを管理しているのは私ですから、誰かがこじ開けたりしていない限りはまだあるはずですよ」

「この？」

この、というのはどういう意味なのだろうか。

「そうです。この、保管スペースです。M・ビジネス」

コムログは微笑みをこちらに向けながら壁に手を当てた。無機質で真っ平らな壁のそこにあっただのはパネルだった。コムログがそこにあてた途端、半透明のタッチパネルが浮き上がり、原始的な数字の並んだパスワードの入力画面が現れた。

タッチパネルが浮かび上がったとき、カッサード大佐はいつのまにかガンホルダーから半分ほど身を乗り出した45のトリガーに指をかけていた。極めて余裕のある、冷静な表情だった。

コムログは8桁のパスワードを入力した。入力し終わったと思うと、タッチパネルは音も立てずに同化して消えた。

「ここですよ」

コムログはそう言ってその壁から一步後ずさり、その分だけ距離をとった。

壁の表面は数センチ浮き上がり、蓋をずらすようにスライドした。隙間から僅かな冷気が溢れ出したのを見て、それが未だに機能していることを僕は確認した。実際にそれが冷気なのかどうかはわからないが、この施設は生きている。

壁がスライドを終えると、そこから現れたのは原始的な棚だった。どこからどう見てもなんの変哲もないただの棚で、実際それはただの棚だった。棚には複数の、人間が一人身を丸めれば、なんとか入れそうな具合の箱が8箱詰まっていた。

「ここにあるのはすべてレーションです。いろいろなレーションがありますよ。当時の、ですが、世界各国のレーションが取り揃えられています。特に美味なのはフランス、イタリアノ、あとはニッポン」

僕はどの国の名前も知らなかった。この男と歴史の話をするのはとても面白いことだろう。何しろこの男は過去の出来事についての知識に欠けて抜群の能力を持っている。過去の出来事、それは歴史と呼ばれる、今ではその大義を大きく失ってしまった知識の集合体。今の人々の多くは、過去を振り返る余裕などない。

そこで僕はふと気付いた。この男は歴史を知っている。

合衆国

「一番まずいのは？」

レイヴン・ジャックが訊いた。本当にこの男は世紀の悪徳医師なのだろうか？確かにとびきりの変わり者ではありそうだが、そういった類の残虐性は全く感じられない。

「合衆国のものはひどいですよ」

「合衆国？」

「アメリカ。と言ったほうが伝わりやすいのかもしれませんが、ドクター・レイヴン」

「それは耳にしたことがあるな」

僕もだ。おそらく過去において最も強く、名のある国だったのではないだろうか？と僕は思った。何しろ、歴史の意味が退化したこの時代の普遍的な男ですら、少しは知っている国なのだ。名前だけとはいえ聞いたことぐらいはある。

「地上最後の超大国と言われ、あらゆる分野において最高の人材を、機関を有していた大国です。ある時期で言えば、世界のルールを定めているのはアメリカであり、アメリカこそがルールでした。」

もう少し、素晴らしい点を挙げるとするならば、それは史上名立たる大国家と合衆国の異なった点です。歴史的に見て、抑止と自由、両方の概念をほとんど両立させてしまった唯一の国家が合衆国だったのです。

それこそが、合衆国が超自然的な理由により衰退するまで発展し続けた理由なのです」

僕には二つの気になる点があった。

「抑止と自由を両立させたとはどういう意味かな？」

コムログは嬉しそうに答える。おそらく彼は質問されるのが好きなのだろう。すべての答えを知っているのならば、そういう気持ちはわからなくもない。

哲学

「決定的な支配をしなかったのです。合衆国はどんなときでも世界のリーダーであり、実際にそのように振舞ってきました。しかし、かつての滅びた大国と同じ轍は踏みませんでした。自分たちで支配しないのです。合衆国は重大な決定に立会い、議論に加わり、議論の上で決議されたことを強く保持したのです。つまり、議論は他国にさせたのです。かつて世界を支配した国々は全てを自らで管理しようとしたのです。それが傲慢だったのです。」

繁栄しすぎた国は滅びる。それは決定的な哲学でした。繁栄すればするほど、国は大きくなり、管理が難しくなり、やがては不可能になる、すると小さなところにほころびができるのです。そのほころびは一度解け始めると止まることをしらずにその範囲を大きくし、やがては国を滅ぼすのです。かつてのローマ帝国の衰亡の理由は全くもってここにあったのです。」

合衆国はこの永遠のジレンマと思われた哲学を、システムティックスな技で覆してしまったのです」

繁栄しすぎた国は滅びる。その言葉は僕の頭の中をうろつきまわり、離れようとしなかった。（これは哲学ですよ。M・ビジネス）コムログはそんなふうに言っただろうか？人類は繁栄しすぎたのかもしれない。ふいにそんな考えが頭によぎった。

「もう一ついいかな」

「もちろんです。M・ビジネス」

「超自然的な力とは何だい？どうして合衆国は衰退したんだ？」

「超自然的な力とはですね、M・ビジネス。気温です。」

確かに、実際に今、残り僅かな人類は寒さに喘いでいる。

「現在とは逆で、世界はほとんど灼熱の地獄でした。とにかく暑かった。そこで、単純なことですよ。人々は快適な場所を求めてロシアへと移住したのです。それはもう大規模な移動でした。西洋史の

変換期と言って差支えのないゲルマン民族の大移動の規模をはるかに凌駕するものです。太陽という名のヴァイキングに襲われ始めた人類はロシアというかつての不毛地帯に住処を求めたのです」

彼の話にはわからない単語が多すぎた。西洋？ヴァイキングというのはいったい何なのだろうかと僕は思ったが、彼の話を止めるのは悪いと思つたし、僕自身その先に興味があつたので質問はやめた。「そんな単純な理由でアメリカからは多くの人が消えたのです。実際にはアメリカの北部、ベーリング海に近いアラスカ周辺に移動した人々も存在しましたが、人間というのは一旦群れを成すと止まらないのです。結局、世界の人口はロシアの広大な国土に密集したのです。そして人々が集まり始めたとき、かつてまでは凍りついて使えない物にならなかつたロシア北部の港が発達し、僅かに残つた他国の人々との連携を可能にしたのです」

僕は話の続きを期待したが、はつとしたような顔をしたコムログは顎に手をやって何かを考え出した。何かを考え出した。ということが僕にはわかつた。

血

「今ふと思ったのですが、貴方達はおそらくアメリカ人の血をひいているのではないでしょうか？」

「あるいはそうかもしれないけれど、確かめる術がないわ。でもどうして？」

「はつきりとした根拠は口にできませんが、まず、あなた方が今生き残っているというのが1つの根拠ではあります。かつてのロシアを含む大陸で子孫まで残して生き残っているというのは考えにくいのです。皆それぞれ遺伝子的な問題も抱えていましたから。もちろん被爆によつてです。」

それから、生き残った地域でシエルターを作るほどの科学力があつたのは、かろうじてアメリカだけです」

「なんだか、歴史的な話に聞こえちゃうわね。今まで先祖のことなんて考えたこともなかったわ。ちよつと素敵よ、そういうの」

「やはりアメリカは怖い国です。そして強い国です。そしてM・エレンス。もつと遡つて言えば、あなたの先祖はおそらくジャパン出身ですよ」

「ジャパン？」

「そういう国があつたのですよ。美しい国です。技術、文化、芸術、どれをとつても超一流の国家でした。世界でも最も興味深いとされる国でした」

本当にいろいろなことを知っているなど、僕は素直に感心した。そして彼はそれをどういう風に話せば良いのかも心得ている。

「それぐらいにしてそろそろ行くぞ。ここに長居する理由はない」
カッサード大佐は現実的なことを言いながら廊下への扉を開いた。
ミユキの表情はあからさまにその先を知りたがっていた。

僕たちは元来た道に戻り始めた。

言語

「それにしても、よく言葉が通じたもんだ」

シエルターで使われる言葉はもちろん1つだったから、僕はそんなことに気付かなかった。しかし確かにレイヴン・ジャックの言うとおりだ。果てしない年月を経てなお、コムログと僕らの間では同じ言葉がかわされている。シエルター内でだって、失われた言葉や新しい言葉、はやり言葉がしょっちゅうでてくるのだ。

「実をいいますと、先程から私の知らない単語は登場していますよ。あるいはどうしてそんな言葉を？と思えるような外来語も、貴方達は使っています。なかなか興味深いものです。ほとんどが推測でその意味は判断できませんし、外来語については、私はほとんどの言語をプログラムされています、多少の意味の変化は見られるものの理解できるものです」

「外来語？」

「別の国の言語を自らの言語に取り入れることです、簡単に説明しますと。昔は多くの言語が存在していたのですよ。最盛期には約400の言語が確認されていました」

たまらない数だ。世界の人口が仮に400人なら僕たちは誰ともコミュニケーションを取れないのではないだろうか、そんなふうに僕が考えていたとき、目の前に迫った大昔のコンピュータ部屋の扉の中から騒音が鳴り響いた。それはある種の銃声だった。

火薬

カッサード大佐は扉を盾にするように身構え、その大型アサルトライフルとともに部屋の中に飛び込んだ。レイヴン・ジャックとコムログを残し、僕とミユキもそれに続く。

部屋の中には火薬の匂いが立ち込めている。見ると扉のすぐ横側には馬鹿でかい銃痕があり、壁が大きく崩れている。中に見えるのは強化ゴムのような素材でできたいくつもの配線だ。

「またんか！ジョージ！」

大きな叫び声はガンドのものだ。ガンドはチラリとこちらを見た、しかし僕らのことなど気にもかけずに、暗黒の廊下へ続く扉に駆け出した。僕とガンドが入ってきたあの扉だ。

だしぬけに、小さな隙間に空気が吸い込まれるような音がした。

「伏せるんだ！！」

ガンドがさつきよりも大きい声で叫んだ。彼の声が僕の耳に入ったちょうどその時、カッサード大佐がこちらに向き直り、猛烈な勢いで僕とミユキを抱え込んで倒れ込んだ。相当な勢いで地面にぶつかった衝撃を感じたとき、僕らの上にいる大佐の背中の中1mほど上で猛烈な爆発が起こった。その爆発は無反動ランチャーのそれであることが僕にはすぐに分かった。

扉の外からアンドロイドとコムログが飛び込んできた。医者はカッサード大佐に駆け寄り、怪我を確かめるような目で言った。

「大丈夫か？」

「造作無い」

表情というものを殺し、そう言って大佐は立ち上がった。僕とミユキを抱き起こそうとするコムログよりも遥かに機械的な姿だった。

シルエット

ジョージ？

あまりにも突然の出来事だったから、僕の頭は状況というものをうまく把握していなかったのだけれど、乾いた砂に落ちた水のように、状況というものがゆっくりと僕の頭に浸透してきた。

ガンドの声を頭の中で再生させ、それを頼りに疑問を探りだす。
(またんか！ジョージ！！)

ジョージ？僕達に二人の男の死を丁寧な、哀悼の意を含めた口調で話した、落ち着いた、好かれるべき青年が、こちらに向かって砲撃をかましたのか？

「何があつた？」

相変わらずの落ち着いた、渋い声が響いた。

カッサード大佐はアサルトライフルを構え直している。

「わかりません。突然、ジョージのやつがそっちの壁に銃をぶっ放して、扉のほうに歩き出したんです」

極めて早口でガンドは答えた。その間も二人は歩き、ジョージを追いかける姿勢を崩さない。ジョージはすでに扉の向こう側だ。

「ミユキ、ここは任せる。待っている。ビジネス、お前は我々についてこい、銃の安全装置は外しておけ」

「わかった。博士、怪我はありませんか？」

「大丈夫だ」

カッサードとは別の種類の落ち着きが彼女にはあつた。椅子に座ったまま足を組み、やれやれ、わけがわからない。といった姿勢をとっている。

彼女の目の前の机にはいくつかの無線機らしいものがおいてあつた。

僕は何も言わずに大佐のあとに、駆け足で続いた。

扉まで来ると、僕たちは扉の脇に肩をつけ、一気に中へ飛び込ん

だ。

それはやはり僕とガンドが（おそらく大佐たちも）歩いてきた廊下だったが、ある意味でそれは同じ廊下ではなかった。行きは気付かなかったどこかにある照明が点いている。ただしそのいくつかの照明はあまりに遠くに設置されていて、僕達が周りに何かがあると判断できるほどの光を産み出してはいなかった。僕らが判断できるのは、ただの光源と、この廊下が恐ろしく幅広く、高さがあるということだけだった。

ガンドが大型のサーチライトを点けると、不気味なシルエットを伴ったジョージ・バンディクーの後ろ姿が見えた。

だが、僕にはその後姿がジョージのものだとは思えなかった。たしかに人の形をしてはいたが、それは微妙なところで、人間とは違う何かのように感じられた。

レールガン

僕達三人はそれぞれの武器を味方であるはずの男に、その銃口を向けた。ガンドは重そうな、巨大な銃を構えている。相当な威力のあるM9でまず間違いないであろうその銃の先のやはり巨大なサーチライトがジョージを照らす。カッサード大佐も相変わらず大きなアサルトライフルを片手で構えている、スーツの力を取り入れたとして、マズルジャンプを片手で抑えこむのにはかなりの力が必要なのはだ。

「ジョージー!!」

ガンドが重低音の声で叫んだ。目の前にいる男の歩みがとまった。なんとも形容しがたい沈黙が立ち込めた。緊張の面持ちで銃を構える僕とガンドとは対照的に、カッサード大佐は余裕の表情で、堂々相手の動きを待っている。

目の前の後姿は立ったまま死んでいるのではないかと僕が思い始めたとき、そのシルエットは素早くこちらを向いた。当たり前のようにその右手には小型のレールガンが構えられている。

そしてこれも当たり前のようにジョージはレールガンをこちらに向けた。

その瞬間、僕の左側で激しい銃声と撃鉄の弾かれた音が聞こえた。躊躇なく、仲間であるはずの男に引き金を引いたのは、もちろんとすべきかカッサード大佐だ。

しかしジョージとて相当の手練だ。銃声が轟いたその瞬間、右足に力を込め、スーツの助力を活かして思い切り左に飛ぶ、一瞬、空中で横倒しになり、華麗な弧を描きつつ2mほどの距離を飛ぶ。その間にジョージは引き金を引いていた、レールガンは破壊力こそ抜群だが、トリガーを引いてから実際に弾丸を射出するまでには微妙なタイムラグがある。

ジョージが両足を地面につけたと同時にレールガンの先から小規

模な青白い稲妻を纏った帯電弾道弾が射出される。僕とガンドは別々の方向へ飛び、なんとかその弾道をやり過ごす。銃弾は僕達の間を貫き、その先の壁に激突した。

レールガンは射程距離に応じてその威力を大きく変える、最大出力で最も効果が発揮されるのは充分に加速がついた中距離だ。壁にぶち当たった帯電弾道弾はその勢いをほとんど空気中に放出していた。小規模な衝撃が壁に生じた。

大佐はすでに行動を開始している、僕達を狙ったレールガンの弾道の遥か離れた位置から、猛烈な勢いでジョージに向かう。その姿はある種の、俊敏な肉食獣を思い出させた。

僕が後ろ手にバックパックのサイドポケットから気絶鞭を取り出すごく僅かな時間で、すでにガンドはジョージとの距離をかなり縮めていた。ジョージがレールガンの引き金に指をかけると同時に、ガンドも俊敏に45口径を構える。

「動くな!!」

ガンドが叫ぶ。標的はジョージの肩だ。おそらくその辺りのはずだ。あるいは大佐なら眉間であつたかもしれない、そして引き金はすでに引かれている、もっと言えばジョージはすでに生き絶えている。

普通の人間はその銃の照準が自分に合わせられていると知っていて、動くなと命じられれば行動を停止する。だが、あるうことか、ジョージはガンドの言葉を完全に無視し、引き金を引いた。それはガンドにとって、僕にとって全く予想外の出来事だった。

レールガンの先端に刹那、青白い光が纏った。この距離でその銃撃を受けたなら、大男の体に大きな穴が空く。残るのは胴体に不自然な穴の空いた焼け焦げた死体だけだ。

ジュウドー

突然、ジョージの体が、まさに重力を失ったがごとく後ろに倒れた。ふわりと両足が浮き、足があったはずの場所に頭が移動する。

レールガンはジョージの斜め上後方へと射出され、激しい音を立て何かを破壊したあと、おそらくは天井にぶつかって煙を上げた。

倒れたジョージの後ろ側にはカッサード大佐がいた。おそらく、ジュウドーが何かの技を使ってジョージを思い切り地面に叩きつけたのだろう。大佐はジョージが手にしているレールガンを蹴り飛ばした。しかしジョージが気絶しているのは明らかだった。

僕がそれを確認するとほぼ同時に、今度はまた別のところから大きな音が鳴り響いた。それはまるで金属の板が地面に叩きつけられるような音だったが、何しろ大きな音だった。

それが金属の板なのだとしたら、とてつもなく大きな金属の板だ。「何の音だ？」

「わからん。天井が崩れたのかもしれない。念の為にスタンウィップを使っておけ」

大佐は容赦なく言った。味方にこれを使うのは気が滅入ったが、さっきのジョージの様子を思い出し、僕はしぶしぶ、最低出力のスタンウィップを仰向けに倒れているジョージに浴びせた。30分は目が覚めないだろう。

「何があつたんだ？」

「わからん。コムログに訊いてみるのが良さそうだ」

「コムログ？あの妙に青白い男のことですかい？」

「そうだ」

「何が何だかわかりませんな」

「まったくわからない」

僕の脳には気の利いた言葉が蓄えられていないようだった。僕にだって何が何だかわからない。

キノコ

「ビジネスよ。説明は歩きながらしてやれ」

「俺が運びましょう」

ガンドがそう言つてジョージを担ぎ上げようとしたとき、僕の目に妙なものが映った。

「ちよつと待ってくれ。これはなんだ？」

見ると、ジョージの首の後ろのあたりに妙なものがくつついている。それは緑色をしたキノコのようなもので、ぴつたりと、タートルネックになつたスーツの部分に張り付いている。

「なんだこれは？」

「うん？」

ガンドと大佐も、僕と同じようにそれを覗き込んだ。3人の視線は俯せになつたジョージのうなじに注がれている。

やはりそれは僕の見間違えではなく、しっかりとそこに存在していた。何度見てもやはりそれはキノコのように見えた。いや、これは完全にキノコだ。だが僕はこんなキノコを見たことはなかった。手のひらにちようど良く乗ってしまいそうな大きさの緑のキノコは、生物的な息遣いを僕達に知らせながら、しっかりとジョージの首に付着している。

「もぎ取つていいと思うか？」

「わからん。わからんがこういう、良く解らんことが人間の体に起こったときは医者に見せるのが一番だろうよ。これはな、じいさんの言葉だが」

カッサード大佐は何も言わず、難しい顔をしていたが、少し沈黙したあと、すつと口を開いた。

僕はこの沈黙を、おそらく大佐が今すぐにこれを除去しなければジョージが死んでしまうのか、あるいは専門的な処置を施さなければ死んでしまうのか、その選択にかけた時間だったと考えた。

「異常行動はこのキノコが原因なのかもしれん、それならばとにかく死にはせんだろう。純粋な毒キノコの類ならもう死んでいる」

実際的には、僕はその選択が正しいのかどうか、わかりかねていた。しかしこの男の考えるところは、口に出した全てではないはずだ。僕はその秘められた大佐の思考を信じて、口を出さないことにした。

そして大佐はこう言いたした。

「そもそも猛毒のキノコ程度なら問題はないのだ」

僕にはそれがどういう意味なのかわからなかった。

「戻るぞ。レイヴンに見せよう。あるいはコムログに」

「なるほど」

僕は納得を声に出した。出してしまったといった方が正しい。なるほど。その程度なら、あの闇医者が治してしまうということか。

「何かなるほどなんだ？」

ジョージを背負ったガンドが不思議そうに訊いてきた。

「何でもないさ、行こう。コムログのことは歩きながら話すよ」

僕達はもう一度、古代コンピュータの部屋を目指した。

寄生

「しかしまあ、信じられん話だ」

そうだろう。僕は何とはなしに自慢気に、心のなかでそういった。「私も同意見だ。そもそも、どういう動力で今まで起動してきたんだ」

少し離れた場所から、博士は腕を組んでコムログを見た。その声はもちろんコムログに聞こえている。

「しかし、興味深くはある」

博士の直接的な物言いにコムログは嫌そうな顔も何もしなかった。むしろ、（そうでしょう、スゴイでしょう）といった感じすら伝わってきそうな表情で、嬉しそうと言っても間違いではないのかもしれない表情を作っている。

「どうなんだ？レイヴン」

カッサード大佐は医師に訪ねた。二人の間には、並べられた机の上に横たわるジョージがいる。

「お手上げだな。こんなものは見たことも聞いたこともない」

医者はいとも簡単にさじを投げた。さっきからそうだが、この男からは人を救おうとする医者の心が感じられない。とんでもない医者がいるもんだ。

「おいおい、あんたは医者だろう？少し考えてみてもいいじゃないか」

僕は我慢できなくなって言った。そもそも、こういう事態が起きたときのために、この男は呼ばれたんじゃないか。

「馬鹿をいうな。私はね、病気や怪我の人間の治療はする。だがなんだこれは？お前さんにはこれが病気やら怪我やらだとわかるのかい？」

医者の言うことは分からないでもなかった。

「だけどあんたは医者だ。それもとびきり性質の悪い、天才外科医

だ。どんな病気でも治せるんじゃないのか？」

「あんまり調子に乗らないほうがいいぜ坊や。私あね、自分でそんなことを言った覚えはない。無理を言うな。病気にしろ怪我にしろ、なんにしろ、無理なものは無理なのさ」

僕はそれ以上何も言わなかった。悔しいが、何も言えなかったと言ってもいい。

「おそらく寄生植物の一種だろうが。こんなものに手を出したくはないね」

「その通りです、ドクター・レイヴン。それは寄生キノコの一種です」

「なんだって？」

レイヴン・ジャックはコムログの方へ振り返った。

「それは知能を持ったキノコなのです。少々巨大化していますがピワガサで間違いないでしょう」

「待ってくれ」

僕は話を理解できず、咄嗟に話の流れを止めた。

知能

「待ってくれ、それはどういう意味なんだ？ ジョージにキノコが寄生した？」

「その通りです。M・ビジネス。しかもビワガサは高度な知能を有しています」

それが冗談でないのなら、ジョージが寄生されたのはミユキともにも外に出た時だろう。ミユキには異常が見受けられなかったのが幸いだ。

「治す方法は？」

大佐が不安を見せずに言った。

「ありません」

わずかに落胆したような表情を見せてコムログは答えた。

「ほらな。治療法がないものを、私にどうしろというんだ」

これが今まで数多の患者を回復させ、数々の新しい治療法を確立してきた男の言葉なのだろうか？

「くそ！ どうにかならんのか！」

ガンドが思い切り壁を叩いた。スーツの助力も加わった怪力は、鋼鉄製であろう壁を砕いた。

目を閉じたまま、ジョージは未だ机の上に横たわっている。

「先生、本当にどうにもならないんですか？」

最もか弱く心配そうな声を出したのはミユキだ。医者はお手上げのジェスチャーをして、呆れた顔を見せた。

そしてため息を吐いた医者はコムログに訊ねた。

「このきのこを取るとどうなる？」

「死にます。このきのこは動物の首の後ろに寄生し、頸神経に向けて根をはるのです。それも恐ろしいスピードで。もし無理にこのきのこを取り除くと、頸神経に重大なダメージを与えてしまいます。人間を別にすれば、生物界における最も知能指数の高い種です。こ

のビワガサはそこまで賢い種ではありませんが。

実を言うと、かつて私が生まれた時代のビワガサは人間には寄生しませんでした。主な宿主となるのは昆虫で、稀に小動物にも寄生していましたが、まさか・・・しかしこれは間違いなくビワガサです」

医者は腕を組んで下を向いた。

僕はやけになって医者に悪態を吐いた。

「機械みたいに、頭でも取り替えたらいいいじゃないか、あんたなら出来るだろう」

「素人の坊ちゃんには黙っていてもらいたいね。頸神経叢は連結部位を含めると前腕部まで伸びている。」

お前さんの頭と両腕、それから首の周りの筋肉や神経、胸鎖乳突筋まで、私によこすのならやってやろう。成功するとは限らんがね」
「やぶ医者め」

金

「金なら払うぞ、レイヴン」

「博士、こりゃあ金の問題じゃあない。できないものはできないんだ」

「しかし金は払うぞ、いくらでも。政府にも、この要望は通る」

「成功する見込みはない」

博士は脚を組み替え、右手の甲を顎に押し付けた。

「私にはあると思えるのだよ、レイヴン。私はね、君ならなんだつてやり遂げられると考えている。人体の治療に関してね」

「私には何もできんさ。私は患者の手伝いをするだけだ」

出し抜けに、ミュキが医者の腕に取り付いて叫んだ。

「お願いです。先生。ジョージを助けてください」

沈黙が少しく舞い降りたあと、タバコを取り出した博士が言った。
「私はね、私が正しいと思っている。とにかく見てやってみてくれ。私としても、少ない隊員がまた減るといふのは非常に好ましくない」

医者はその言語を軽く鼻で笑い、腕を掴むミュキをひっぺがした。
「五千万だ。治る見込みのない手術に、五千万いただこう」

あまりの大きさに、僕は一瞬それが何を示す数字なのかわからなかった。もちろんすぐあとで、それが手術料だということはわかったのだが。

この男は手術を引き受けるだけで（あるいはそれをだけと表現するのは好ましくないのかもしれないが）、僕にとっては天文学的な金を手にすることができるのだ。信じられない。博士は、政府は、こんな男の言いなりになってしまうのか。バカげている。

「いいだろう。感謝する。」

バカげている。

外

「失敗しても私は一切責任を負いませんぜ」

「二言はないよ」

「いいだろう」

医師は椅子に座り、懷から葉巻を取り出してカッターでその先端を削り始めた。

「ミュキ。私の荷物を取ってきてほしい」

「わかりました」

ミュキはいささかだけ安心したよう表情をしてから、部屋の隅に向かった。

「ドクター・レイヴン。しかしどうやってここで手術を行うのですか？」

生憎、申し訳ありませんが、ここには医療設備がないのです」

「心配しなくていいさ。準備はしてある」

ミュキが部屋の隅にあった少し大きめのバックパックをまさぐっている。

「まさかその準備というのはあのバックパックに入っているのか？」

僕は訊ねた。あんな小さなところに？コムログもやや驚いたような表情を作った。

「そうだ。とにかく、ここは私が引き受ける。お前さんたちにはやるべきことがあるだろう」

僕にはそれが何を指すのかわからなかった。

「どういうことだ？」

僕の質問に答えたのは医者ではなくカッサード大佐だった。

「地上にでる。おれと、お前と、ガンドでな」

「どうして？」

正直に言つと、あまり外に出たくはなかった。何と言っても、どんな魑魅魍魎が潜んでいるのかもわからない、得体の知れない危険

地帯に旅出すのはごめん被りたい。

それにこの大佐の冒険心は、僕が納得するだけの論理を示してはくれないだろうからだ。

「ウェインかブリックの死体を探す」

死体探し？そんなことをして何になるというのだろうか。宗教的な儀式を始めるでもないはずだ。

「スーツを新調するのは少し非現実的だからな」

僕たちは死体から衣服を剥ぎ取る作業に出かけなければならないようだ。

それは全くもって憂鬱な仕事になりそうな気配を強く匂わせていたが、僕はそれに従う他なかった。

雨の世界

何はともあれ、医者はジョージを引き受けた。傲慢と諦めの早い態度に僕は怒りを感じていたが、女博士と金の力が、質の悪い天才医師の心を動かした。

治る見込みのない手術に五千万。女博士は医者を高く買っているようだ。だけど僕は思った。五千万。それでジョージが回復するならば、それは大した金額ではない。倫理的にもそうだが、何しろ半減してしまった人数がこれ以上減ってしまうというのは、あまりにいただけない。

僕、ガンドそしてカッサード大佐はミユキの案内を受け、ウェインとブリックという名の隊員が死んだ入り口につながる梯子を登っていた。

医者の手術を見守る博士やミユキ、コムログのことが僕は心配になった。なぜなら、何かのミスが起き、ビワガサの洗脳を受けたままのジョージが起き上がるようなことがあれば、彼らがそれに対応できるのかということが気がかりだったからだ。

しかし今、僕にはそれ以上に心配すべきことがある。僕自身の命だ。あの医師が術中に何かミスを犯すとは思えないが、今まさに大佐が手をかけた扉の先にいるであろう巨大な昆虫に僕が立ち向かい、あるいは追い返すことができるという保証はない。

何しろ、それがどんなものなのかもよくわからないのだから。

僕の頭に僅かだけしぶきのような物が降りかかった。

「いくぞ」

少しく扉を開け、視界の限り安全を確認した大佐が言った。

覚悟はできたか、僕。ジョン・ビジネス。

ガンドが巨体を小さな扉から這い出させたその後を僕は追った。

僕の顔には、既に液体がまとわりつき、首筋まで流れていく。

僕が扉から這い出すと、ガンドがその扉を閉めた。あるいは閉じ

たと表現するのが妥当だろう。カッサード大佐は取り付けたゴーグルの前で、例のアサルトライフルを構えている。

僕は立ち上がり、バックパックからゴーグルを取り出した。

大粒の水滴が、厳しく、叩きつけるように僕の身体を責め立てた。お前は間違った場所に立っているんだ。降り注ぐ、圧倒的な激しさを伴った豪雨は、僕にそう言っているようだった。

滝

「すごい雨だな」

ガンドが言った。しかしそれは正しい表現ではなかった。天空から降り注ぐ、これは滝だ。

僕達を濡らすしぶきは上空から所々に降り注ぐ小さな滝が作り出したものだ。

雨と呼ぶにはあまりにも全体的でない。穴の開いたビニールを天井にするならば、こんな不思議な雨も降らないではない。しかしそんなものが上空に張り巡らされているわけがないのだ。おそらく、太陽の輝く日ならば木漏れ日が降り注ぐその部分に、集中した豪雨が降り注いでいるのだ。

その水量たるや、まさに小さな滝だ。おかげで地上には濃い霧が立ち込めている。

ところでカッサード大佐の着けたゴーグルは熱感知式の可視化ゴーグルだろう。ガンドもそれと同じものをバックパックから取り出す。僕は森の外で使った暗視ゴーグルを取り出し装着し、熱感知モードに切り替えた。

僅かに陽光の熱を帯びた霧が薄く白い靄を作り出している。ゴーグルの感度を調整するとその靄は晴れた。ゴーグルはほとんど肉眼と違うない景色を僕にもたらししたが、それは実際には幾許か肉眼よりも輝度の差が激しい景色だった。熱を持った箇所、例えば上空を見るに連れその景色は眩く輝き、ガンドや大佐の身体も、上空ほどではないが、肉眼では確認できない輝きを帯びている。

辺りを見回すと、10mほど先に僕らと同じ輝きをもった何かが、巨大な木の根元に巻きつくように、その片鱗を覗かせていた。

それはどう見ても人間の脚に見えた。

だがその脚の主の姿は、巨木と僕らの間にある多数の木に遮られて見ることができない。

僕の肩を叩いたのはガンドだった。

「行こう、慎重にな。ここからはもうどんな油断も隙もあつてはならない」

アサルトライフルを、その鋭角な頬に食い込ませ、大佐は慎重に進みだした。そして僕とガンドは使い勝手のよいオートマティックを構え、一歩ずつ、深い落ち葉の中に足を沈めていった。そしてそれは新雪のように柔らかく、僕らの足を包み込んだ。

奇形

10 m程度の距離を、僕たちは相当な時間をかけて縮めていく。何しろここは何か飛び出してくるかもしれないと思える場所が多すぎる。木の影、枝、上。あるいは類まれなる迷彩効果を發揮して地面や樹木、植物に模倣している生物が襲ってくるかもしれない。もしそのような生物がどこか見える範囲に潜んでいるならば、ゴーグルを通し、輝度で確認することはできる。しかしそれでも僕らは至極慎重に進んだ。木の後ろに潜む凶悪な生物がいつ飛び出し、僕らを捉えるのかわかったもんじやない。そしてなにより、攻撃的肉食性の樹木に対して、今のところこのゴーグルは役に立たない。なぜならそのような植物はおそらく、僕達にとってほとんどノーマルな、つまり人間を襲うなどという馬鹿げた行動を起こさない植物と温度の差を持たないからだ。

疑えば、何もかもが怪しく思えてくる。右を向くと、不自然に地面に広がる木がある。ほとんど完全な皿型をしたその木は、その中央に雨水を大量に溜め込んでいる。何に適応するためにこの樹木は進化し、このような形態を完成させたのだろうか？あるいは突然変異的に不慮の奇形となって発生してしまったのだろうか？仮にそうだとすればここはまさに奇形の森だ。巨大化しすぎ、永遠の成長を続けてしまっている巨木たちのメカニズムは何かしら生物的な宿命を無視してしまっているように思われるし、ガンドが銃口を向けている白く細長く、多量の穴の開いた木はまさに奇形の代表格といった出で立ちでそびえ立っている。

漁夫

ちょうど僕がその多量の穴の開いた木を凝視しているときだ、穴の奥に何か光るものが動きを示した。それはまさしく生命がこのゴ―グルの中で放つ輝きだ。

穴の開いた木とは逆の方向を向いていたはずの大佐が残像を残しそうな動きで、アサルトライフルの銃口をそれに向けた。

あの木の裏で何かが蠢いている。

「まだ撃つな。音をたてるな」

大佐の声に返事をするものはいなかったが、沈黙こそが返答だった。聞こえるのは水しぶきがたてる僅かな音と滝となった雨が作る豪快な音だけだ。

ついにその時はやってきた。木の裏側から光る生物の片鱗が飛び出したのだ。しかしその動物は明らかに僕らに襲いかかるうとはしていなかった。なぜならそれが飛び立とうとしている方向は僕らのいる位置とは別の方角だ。

おそらくそれが翼を羽ばたかせたのはつい今しがたのことだろう。なぜなら僕達はその羽音を耳にしたのが今この瞬間だからだ。

それは巨大な羽の生えた翼が生む音であり、鳥類の羽ばたきだった。気持ちの悪い音を吐き出す薄く小さい虫類の羽が生む音ではない。

それは明らかに何かから逃れようとしている。

大部分が木の影となつて見えないが、穴からは巨大な灰色をした鳥の翼が見える。灰色の羽が激しく飛び散っている。木の裏側では激しい戦闘が行われているに違いない。鳥は不思議なことに一切の鳴き声を上げなかった。

大佐は未だ戦闘開始の指示を出さなかった。アサルトライフルのスコープを覗く姿はまさにスナイパーの顔つきだ。

僕ら三人は微動だにせず。あるいは戦闘を終えた直後の傷ついた

勝者を一刺しする漁夫になろうとその時を待った。

翼

纏わり付く棘のついた蔓を引きちぎり、傷つき血を流しながら飛び立った翼は僕らを驚かすに全く問題のない姿をしていた。

それは鳥ではなかった。それは翼だったのだ。僕はそれが鳥の翼だということを疑わなかったが、鳥という生物につきものの足や頭、胴体といったものがその生命体には見受けられなかった。

蝶のように重なった翼は完全な左右対称を作り出している。そして仮にそれが胴体と呼べるのならば、両翼の合わさった中心部分、そのほとんど中央の場所から一本の長い、毛むくじやらの管のようなものが生えていた。体の中央から出る目的不明の管の長さたるや、その生物の広げた両翼よりも長い。それは僕に不自然な位置から生えた長大なしっぽを連想させた。

両翼はひどく傷つき、ところどころの羽が剥ぎ取られて、生物の地の素肌を確認することができた。

力を失い、よろよろと飛び去る翼の姿は敗者のそれではなかった。命からがらの生還だ。この森の弱者にとって生還とは勝利を意味する。生きていることが勝利なのだ。

僕はなんども声を発しそうになった。しかし恐怖と興奮が僕の音を喉の奥で締め上げ殺したおかげで「なんだあれは」と馬鹿のような、答えの返ってくる見込みのない質問をせずにすんだ、そして戦闘の一部始終を見納めることができた。

もし僕らの中の誰かが大声を出したなら、それを聞きつけたハンター達が僕らのもとに殺到するかもしれない。

ここはもう、森の奥深くなのだ。

構え

「雨音で多少はましだろうが、念のためだ、大きな音をだすことはまかりならん」

そう言いながら大佐はアサルトライフルの簡易な安全装置をオンにし、ずっしりとした重みのあるそれを肩にかけた。大佐はライフルの代わりにバックパックからサイレンサー付きの大型拳銃と大きなサヴァイヴアル・ナイフを取り出し、両手で器用に構えた。右手で逆手に構えたナイフの柄をグリップにぴたりとつけ、左手でそれを覆うようにトリガーに指をかける。ちょうど銃とナイフを両手でまとめて掴んでいる形だ。窮屈ではないのだろうか？

僕たちはまたゆっくりと歩き出した。

僕は右手でプラズマ銃を構えている。手頃な消音式の武器が見つからなかったのだ。本来、これは戦闘用の武器ではないのだが、軽く機構内が水に濡れる心配もない、なにより全くの無反動なので片手で扱える、そして軽いのだ。俊敏な動きが求められる今、電光石火の飛び出しを仕掛けてくる厄介な怪物どもを焼き尽くすには、割かし気の利いた銃だ。

あるいはスタン・ウィップもそのような特徴を備えてはいるが、飛び道具ではないし、攻撃するまでには蓄電の微妙なタイムロスがある、それになにより、こんな豪雨の中で、つまりは水場で、強烈な電気をむき出しにする危険な棒は使えない

薔薇

無数の穴のあいた木を通り過ぎようとしたとき、あの翼を襲った何者かが一体何だったのか、僕たちは知ることができた。

それは巨大なバラだった。ただしバラは地面に横たわるようにして、その大きな花弁を広げていた。花弁の下から覗く数多の蔓だ。蔓には鋭いトゲが備わっている。人間がこんなものに刺されたら、重症どころの話ではないだろう。

「たまげたな。近寄らないようにしよう」

それは僕の心からの言葉だった。ガンドはそれに頷いたが、大佐は何も答えなかった。かと言ってもちろんこの妙な植物に危害を加えられる気はないと思うが。

蔓には多量の血液が付着しており、雨に流れた大半の血は地面をどす黒く染めている。

僕らは眠れる怪物を起こさぬように、至極静かに目的のものを目指して歩いた。そしてようやく目のあたりにすることができた足首の主はブロンドの男の死体だった。

男の死体の左胸は、心臓を通り過ぎ、右の胸筋あたりまでを深くえぐられていた。多量の出血により異常に青ざめた男の両目は半開きになり、その瞳の主の生命活動が停止していることを明白に知らせていた。

「神の祈りのご加護を（ミゲタ・プリュス・パクス）」

ガンドが胸の前で空に十字架を描き、哀悼の言葉を捧げた。あまり宗教的なことに興味を抱かなかった少年時代を過ごした僕には、それはどこか一種の現実逃避のように思えた。

完全に、すぐく、死んでいる。

カッサード大佐は拳銃を構えた手を決して緩めなかった。

成長

何も言わずにガンドは死体に手を伸ばし、スーツの首部分をめくり、内側に張り付いたジッパを摘んだ。僕と大佐はいつどこから、化物が飛び出してきても対応ができるよう、それぞれ違った方向にそれぞれの武器を構えた。三人のうちの一人は、完全に無防備な状態だと言える。僕の緊張感是否応なしに高まった。

ガンドがそのジッパを軽く引つ張ると、あとはほとんど自動的に、スーツはブリックの左の胴体を腰のあたりまで、さばくようにして脱げた。スーツの内部からは隆々の筋肉に貼りつく灰色のアンダーアーマーと、それに付着した大量の血液が見えた。

ガンドはブリックの左肩をスーツから露出させ、スーツの首の部分を大きく開いた。そして同様に右肩をスーツから出そうとしているが、横目でちらと見る限り、それは少し困難な作業のように見える。

物理的に難しいわけではない。何故なら、このタイプのスーツは構造上、ジッパを引いて露出させた部分が十分であれば、自力であろうと他力であろうと、ごく簡単に脱げてしまうのだ。そして今ガンドが開いた露出部分はスーツを脱ぐに当たり十分な広さを得ている。

大男はブリックの体をできるだけ丁寧に扱う必要があった。あまり力を入れると、痛々しく、ほとんどを切り裂かれた上半身がさけてしまうだろう。

僕はそのいわく形容しがたい、生々しいとも痛々しいとも言える、そんな残酷な風景から目を逸らし、視線を手元から真っ直ぐ遠くに向けてみた。

両手で構えたコイルガン。外見は標準的なオートピストルとほとんど差はない。差といえば、取り除かれた、というよりコイルガンには不必要な撃鉄がないことと、プラズマ機構のために膨らんだバ

レルぐらいだろう。

僕は視線でリアサイトからフロントサイトを舐め、さらにマズルの向こうを見た。

深い森が続いている。所々が低音の、つまり暗く見える水しぶきで視界が邪魔されている。木々は相変わらず、あまりにも巨大だ。そこにはもう、時間の概念というものがなかった。この森では、どんな生物も時間というものを忘れてしまっている。

時間。もともとそれは断たれることのない永遠の法則だった。だが木々は、植物たちは、成長という名の牙を、衝動だけを頼りに、闇雲に、異様に、広がっていく。

熱、光、湿り気、変わることはないもの、決して変わるはずがなかったもの。しかし既に、それがどれほど続いているかを知る者は存在しない。

（どれくらい？）（なぜ？どうして？）そんな疑問に気を利かせるのは、森に迷い込んだ数人の人間だけだ。だが僕達もそろそろ、そんな疑問は意思の外へと追いやらねばならない。

そこはもう思考の場ではないのだ。成長が、遺伝子が、野生が、植物が、それに取って代わっている。

儀式

「ダメージが大きいな、なんとか接合できればいいが」

振り返ると、ガンドが右わき腹の大きく裂けたスーツを手にしていた。アンダーアーマー姿のブリックは木の前に横たえられ、両手を胸の前で組んでいる。

「とにかくくつつけておこう、多少は自動修復するだろう」

そう言つてガンドはスーツの裂けた部分同士を重ねあわせた。もちろん、たちどころに接着できるわけではないが、こうしておけばこれ以上に傷が広がることはないし、修復の際の手間が少しは省けそう。今はまだ、簡易な自動修復機能に頼るしかない。長い時間さえあれば、どんな修理もなくスーツは自動的にその修復を完全なものにすることができるが、そこまでの時間は僕らには残されていない。自動修復機能は未だ、そこまで便利で完全なものではない。「無いよりはいい。あのアンドロイドにも協力してもらつ必要がある」

それにアンドロイドとは言え、意思があり、精神を持っている。こんな地球の果てのような場所に置き去りにするわけにもいかない。「そうだな。やつも人間と暮らすほうが快適だろう。誰もいないシエルターなんて、地獄とかわらん。退屈すぎる」

ガンドは僕の意見を肯定しつつ、片方の手でブリックの死体に落ち葉をかけていた。やがて、多量の落ち葉で死体は見えなくなつた。湿った落ち葉は完全にブリックを覆い隠した。だがそれにはことなく、気休めの儀式のような雰囲気があつた。

同意

しゃがんでいたガンドが立ち上がりこちらを向いた。そして僕の肩を軽く叩き、歩き始めた。

「戻るぞ」

ガンドの表情は複雑なものだった。それは悲しみに満ちてはいたが、強い意志のようなものが潜んでいた。

「待て」

大佐の声は、声色は、僕の緊張感を引き立てるに十分な響きを帯びていた。見ると、大佐は右ひざを地面に付け、何かに狙いを定めている。僕とガンドは大佐の銃が狙いを定めている方向からの攻撃を防ぐように、木の影に半身を隠した。

「なんだ？ どうしたんだ？」

僕はできるだけ空気を振動させないような声で大佐に訊ねた。

「よく見てみる」

大佐は銃の先を軽く振ってその先にあるものを僕に示した。

「まいったな」

僕はガンドの言葉に同意せざるを得なかった。

「化け物どもめ」

僕はもう一度同意した。

僕の額を流れ落ちる水滴の中には、じっとりとした汗が混じっている。

撤退

「あいつらは少々厄介だ。撤退する」

「そうしよう」

大佐とガンドの口ぶりは既にあの異様な生物たちを知っているようだ。

「なんなんだあれは？」

だから僕は訊いてみた。答えたのはガンドだ。

「わからん。だがお前とここで会う前に一度、俺達はいつらに襲われたんだ。幸い犠牲はなかったがな。気をつけてくれ、そこいらにいた植物共とは違って多少頭を使えるみたいだ」

「そうみたいだな」

僕がそう思ったのは、まずその生物が集団で行動しているという点だ。目視できるのが4匹。それぞれが等間隔に立ちこちらを向いているところを見ると、明らかにこちらに気付いている。そして、相手はこちらが自らの存在に気づいていることもわかっていて。だからこそ、すぐに襲いかかるうとはしないのだろう。なるほど、動物程度には脳みそが発達している。見た目は人間とは程遠い。それどころか、今までの僕が見たことのあるほとんど全ての生物とも程遠い姿だ。大きさは僕達と同じぐらいだろう。二足歩行であるという事実は僕を大いに驚かせたが。

「名前は？」

ガンドがニヤリと笑った。

「まだ決まってるない」

「ハリガネ人間なんてどうだ？」

「悪くないな」

そうなのだ。例えるならばその生物はハリガネ人間だ。二足歩行、サイズ、その2つに関しては人間と似ていると評してやつてもいいが、その体は全くの直線でできており、言うなれば錆びついた鉄パイプでできた棒人間だ。頭部と思われる部分に目や口と言った生物的な器官はついておらず、顎の部分には棘のような長く鋭いヒゲが生えている。そして頭は左右に割れ、その先端もやはり鋭い棘のようになっている。全くの棒状といってよい胴体部分に腕は生えておらず裂けるようにして両脚が生えている。そしてその脚の、妙に高い位置に存在する関節部分（それは膝に見える）から下は棘付きの棍棒だ。彼らが一步步くたび、棘だらけの棍棒が落ち葉を突き刺した。

彼らは徐々に近づいてくる。

「何匹確認できる？」

「4（ポホヴ）」

「違う」

カッサード大佐の声と共に聞こえたのはサイレンサーを被された銃声の音だ。強烈に空気を切り裂く高い音が放たれた後、樹木が碎かれたような音が鈍く空気に響いた。

ばさばさという音を立てて地面に落ちたのは碎けたハリガネ人間の亡骸だった。驚いたことに、バラバラに碎けた体からは一切の出血がなかった。

「12だ（ポホアンドウ）。囲まれた」

夕の世界

大佐は上空に向けて銃を構えている。

「前方に4、上に1、左に2、右に2、後方に2」

僕は慌てて周りを確認した。前方の4匹は確かにガンドと確認した。ただしさつきよりもかなり殺気立っている。一部の生物がそうするように、あるいは威嚇姿勢か、あるいは攻撃態勢か、顎に生える刺はさきほどより鋭く長くなっている。あれは間違いなく武器になる。

上空を見ると5mほどの高さの木の枝から1匹がこちらを覗いている。ただしその姿からは少し躊躇や恐怖というものが感じられた。顎の刺も萎縮している。大佐の狙いが定められていることを、そしてその意味を理解しているのだろうか。生物的本能的に、大佐に対して恐怖を抱いているのだろう。

理解できる。大佐からは前方のハリガネ人間を遙かに凌駕する殺気を感じる。化け物を超える化け物、野獣的殺気。

左右には同じような位置取りを左右対称に低姿勢をとったハリガネ人間が2匹ずつ、武器はもちろん巨大化している。

そして後方、つまり僕らの退路を防ぐ2匹が巨大化した武器を構えている。大佐はそのことにも気付いている。それでいて「撤退」を宣言した。

それが意味するのはもちろん、この2匹の殺傷と強引な突破だろう。

「楽しめそうだ」

楽しめない。大佐の独り言だろうが、僕は心のなかで否定した。僕がガンドの方へ視線を向けると、大男は目を閉じ、大きく、ゆっくり、2回うなずいた。

「同情する」

「ありがとよ」

「後ろはまかせろ、左右の4匹は問題ない」

左右の4匹は問題ない？という事なのだろうか？

「ビジネス。俺達が退路を開かねばならんようだ。2匹だが、侮るな」

僕はプラズマ銃を構えた。ガンドは大きなアンチギミック、大きなスペツナズナイフ。大男が持つにはせこい武器だ。僕は何か笑えてきた。

左右の4匹と後方となった4匹が顎の刺を剥き出しにし、僕らに狙いを定め、加速を開始した。

一気にカタを着ける気だろう。

そして大佐もそれに呼応した。

「戦闘開始だ（ボナペティ）」

いつの間にか、雨は止んでいた。

雨で湿った空気は強烈な木漏れ日を強力に屈折させ、あたり一面を落ち着いたオレンジ色に変えていた。この世界の雨は、気温を大幅に下げている。しかしまた太陽は復活する。

朝の前に訪れる、不思議な夕方が始まる。

刺

その光景はさながら追い込みをかけるメスライオンの狩りだ。今ではすっかり、おとなしい稀少動物となって動物園に住み着いているライオンも、大昔は勇敢な狩りを行っていたのだ。僕はその映像を頭の中に思い描いた。ただ今回、そのライオンに似せた戦略的狩猟は成功しないだろう。何しろ、敵は反撃しようと試みているところか、すべてを把握している上で突破しようとしているのだ。

僕とガンドは加速を開始し、猛烈な勢いで、武器を構え立ちはだかる2匹のハリガネ人間に猛進した。2匹は全く怯む様子を見せず、むしろ全て上手くいつている、しめしめ、と言った感じの風貌だ。カッサード大佐が攻撃を仕掛けないのは、彼らのその油断、無知を狙っているからだろう。どんな手段を使うかは僕にも予想できないが、大佐が彼らがその猛威に気付くほどの攻撃をかませば、流石に異常を感じ、何かやっかいな行動を起こすかもしれない。あるいは大佐が圧倒的な力を見せつけければ彼らの方が逃げ出すかもしれないが。

「くるぞ！」

僕達の前方にいる2匹が膝の関節を折り曲げ、スタートダッシュを決めようとするランナーの姿勢になった。それに合わせガンドは素早くスぺツナズナイフを構え、僕はプラズマ銃を最大限にチャージした。そしてまたそれに合わせるように、1匹のハリガネ人間の刺がさらに巨大化する。

「なんだありや？」

「様子が変だな」

ハリガネ人間との距離は5mもない、僕達が丁度、地下へとつながる扉の上を通過しようとした時だ。

「ビジネズ！気を付けろ！やつらかましてきそうだ」

その時、ハリガネ人間の顎が小さな爆発を起こした。僕はその瞬

間、ハリガネ人間は顎に空気を溜めていたのだと瞬時に理解できた。

「避ける！ ガンド！」

「くそ野郎め（シラーズ）！」

僕達に向かって射出されたのはハリガネ人間の顎から猛烈な勢いで飛び出た、巨大な刺だった。

突進

僕らは思い切り横に跳ね、なんとかその凶器をかわす。僕は右肩に地面の衝撃を感じながら、プラズマ銃のトリガーから指を離した。溜め込んでいた高温のエネルギーが射出され、紫色の小さな稲妻がハリガネ人間を襲う。

いち早くそのエネルギーの危険性に気づいたのは左側のハリガネ人間だったようで、そのハリガネ人間は素早く地面に伏せ攻撃をまぬがれた。高速で射出されるプラズマを避けたのだから、それは相当な運動神経に違いない。そして何より、僕が銃を向けたときにそれが武器だと判断したその動物的な勘が素晴らしい。

プラズマの雷撃をもろに受けた方のハリガネ人間は青白い火花を体中に迸らせたあと、一瞬にして燃え尽きた。そしてそれは一切の悲鳴をあげなかった。

ガンドが地面に横たわった体勢から素早く起き上がり、もう一度、ハリガネ人間に向かって走りだす。屈んだ姿勢のハリガネ人間は起き上がりかけたところに大男の猛烈な突進を受け吹き飛ぶ。

僕の後ろ側では大佐と6匹のハリガネ人間が戦闘を開始する。僕は6匹の化物と1人のモンスターの戦いに釘付けになる。勝敗はもう分かっている。僕の、何年も、おそらく人類の発生、あるいは文明の発達によって限りなく無に近く削られた獣の本能が僕に知らせている。

カッサード大佐は、あまりにも圧倒している。ハリガネ人間はもはや獲物ではない。

右側に位置する2匹のハリガネ人間に素早く発砲した大佐は、発砲の勢いそのままに、銃を振り回すように弧を描かせた銃を、流れるまま左側のハリガネ人間に向け発砲した。

銃からはほとんど銃声が聞こえなかったが、僕のプラズマ銃を見たハリガネ人間たちはそれが自分たちに対する武器だと理解してい

るようで、軽く計2発の銃弾をかわす。そして今や巨大化した武器を向けた左右のハリガネ人間達は大佐に向かって突進を始める。それは一種の諦めなのか何なのか、おそらく彼らにはそうすることしかできないのだろう。

大佐はいつの間にやら取り出していた2つの手榴弾をそれぞれ両手に持ち、安全ピンを口で引き抜いた。ピンを抜くと同時に、2つの手榴弾は両手から放たれた、しかもそれはオーソドックスな、というよりはそれ以外に使われたことのない、つまり地面に向けて投げられず、空中に向かって山なりに放たれた。カッサード大佐の左右に放たれた主榴弾は空中4 mほどの高さまで上り詰めたあと、重力に導かれ降下を始めた。

労力

「ビジネス！」

チラとガンドに目をやると、彼はすでに地下へとつながる扉を開けていた。膝をついて片手で扉を持ち上げている。

空いた左手でブリックのものだったスーツを地下に放り込んだガンドが叫んだ。

「早く！」

見ると、大佐の向こう側にいた4匹のハリガネ人間はその数を増やしている。援軍が隠れていたのか呼ばれたのか、とにかくやっかいなことになりそうだ。

大佐の左右のハリガネ人間はなおも高速で突進を続ける。しかもはやカッソード大佐は左右のハリガネ人間のことなど、全く思慮に入れず、後ろ向きに歩きながら、いつのまにか装備しなおした、お馴染みのアサルトライフルを後方に向け、引き金を引いた。

銃声は聞こえなかった。なぜならカッソード大佐の発砲と同時に、それを上回る爆音が鳴り響いたからだ。

爆音。それは正しく1つの爆発音だった。しかし爆発を起こした箇所は2つ。左でカッソード大佐に進撃していたハリガネ人間2匹と、その反対側で同じ動きをしていたハリガネ人間の2匹。計4匹がいきなり爆発し、爆音を轟かせ、不自然な、非生命体的な跡形のみを残して吹き飛んだ。同時に後方のハリガネ人間の集団の中の5匹の頭も吹き飛んだ。

「いけ。ビジネス、ガンド」

僕は全くの心配や意見を考えず、その言葉に従って、扉に向かった。

僕はカッソード大佐が何をしたのかということがすぐにわかった。まず後方の5匹は、アサルトライフルの射撃によるものだ。左右

の4匹は、絶妙のタイミングで投げられた手榴弾が、彼らの頭上で爆発したのだろう。カッサード大佐は手榴弾の爆発のタイミングとハリガネ人間のスピードを寸分違わず計算し、最低限の労力ですべてをやつてのけたのだ。直接投げれば、爆発のタイミングが合わないだろう、あるいは避けられるかもしれない。地面になれば、それなりの知力を持ったハリガネ人間はそれに近づかないかもしれない。

だが、突如として降り注いだ爆発物に、彼らは気付けなかったのだ。それはそうだろう。僕だってカッサード大佐の行為の意味がわかったのは、ことが済んでからだ。

夜の世界

いくつかの銃声を聞きながら、僕は梯子を降りていた。

下で待ち構えていたガンドはすでにブリックのスーツを拾い上げ、傷の具合を確かめていた。

「大丈夫か？」

「ああ、問題ないよ」

「しかしとんでもない化物がいたもんだな。あんな生き物は見たことがねえ」

ガンドはもちろんハリガネ人間のことを言っているのだろうが、僕からすれば、それは大佐の話に聞こえなくもない。

梯子を下るカツカツという音が聞こえ、おそらく残りの10段ほどを飛び降りたカツサード大佐が現れた。

「戻るぞ。ジョージの様子も気になるな」

「急いだほうがいい」

僕は不安だったのだ。もし洗脳されたジョージが暴れていたなら？
「なぜだ？」

ガンドは本当に不思議そうな顔をしてこちらを向いた。

僕がジョージの暴走を示唆すると、大佐はやれやれ、という感じの仕草をし、何も言わずに歩き出した。それは本当に「やれやれ」という感じだった。

「大丈夫さ。大丈夫。あの先生はそんなヘマはしねえよ」

今度は僕が「やれやれ」と言う番だった。

「やれやれ、たいしたゴロツキだ」

僕たちは戻ったのだ、太陽が届かない地下、静寂の夜の世界に。

ボディチェック

「待て」

僕とガンドが振り返ると、そこにはこちらに銃口を突きつける大佐がいた。

「悪いな。ふたりとも」

今銃口を突きつけられているのは僕だ。幸いガンドの方にその凶器は向けられていない。にもかかわらずガンドはピクリとも動かなかった。大佐がこちらに銃を向けている。その一事が既に、致命的に動きを取れる状況ではないのだ。

「どういふつもりだ？」

僕は震え上がりそうになる声を必死に制御し、大佐と目を逸らさないようにして言った。

「心配するな、単なるボディチェックだよ。ふたりとも後ろを向け」
僕のスーツの内側では冷たい汗がづるりと流れ、すぐさまスーツに吸収された。死ぬかもしれない、という恐怖はあった。それはもう、どうしようもなく受け入れるしかない事実であるかのように思えた。銃を握っているのが大佐だからに決まっている。後ろを向いた瞬間、僕は全ての感覚を失い、地面に横たわる意識なき肉片に変わってしまうのではないだろうか。そんな考えを必死に抑制しながら、僕は、僕は大佐の指示に従った。

「なにをそんなにこわばっている。殺す気などない」

僕は心底安心した。それと同時に訳がわからなくなった。確かに、大佐がそんな、つまり、今から殺そうとする相手に「殺さない」などと伝えるわけがない。そんなことは全くの無駄だ。

もし本気で大佐が僕らを抹消しようと言ふのなら、僕らがそれに対抗出来る術も、気付くことすらできないだろう。

「いいだろう」

そう言つて大佐は銃を下ろした。

は？僕を客観的に観察する何者かがいたならば、僕の頭からはク
エスチョンマークが飛び出していたに違いない。そして僕はもう一
度クエスチョンマークを飛びさせるはめになった。は？今度は声に
出しそうになった？

「さて、おれの方は大丈夫だろうな。一応、確認してくれ」

僕とガンドは何も言わずに、両手を上げて背中を見せた大佐をた
だアホのようにみつめた。

「異常はないか？」

「ええ、まあ」

呆然とした様子でガンドが応えた。

「ちよつとまってくれ。さっきから何をしてるんだ？」

カッサード大佐は表情を変えないままこちらに向き直り、じっと
僕の目を見て呆れるように顎を動かした。

認識

「やれやれ、よくそれでここまでこれたな、新入り（ルーキー）」

「悪かったな」

「戻ろっ、とにかく異常はない」

「わかったぞ」

歩きながら小声でガンドが話しかけてきた。

「何が？」

「大佐が調べたのはキノコだぜ、たぶん」

「なるほど」

ガンドが気付いたのも今更になってからだ。僕は少し前からそのことに気付いていた。

まったく、カッサード大佐とは抜け目のない男だ。いや、この場合、僕とガンドの認識が甘かったのだろう。何しろここは単なる不思議の森ではない。べらぼうに危険な悪魔どもの巣窟なのだ。

やっと目の前に扉が見えてきた。1つ1つの部屋よりも廊下や梯子のほうが巨大なのがこの地下施設の特徴だと、僕は徐々に認識していった。

「ところでカッサード大佐」

僕はふと気になることがあったので、カッサード大佐に訊ねた。

「やつらは追ってこないのか？」

「どうだろうな。可能性が無いとは言えんが、見たところやつらの力と身体の構造であの扉を開けるのは難しいだろう。内側に電子式のロックもあった」

「あの後どうなったんだ？」

「何も起こらん、やつらの数が増えたただけだ」

起こってるじゃないか。と僕は思ったが口にするのはやめておいた。この男と僕はあまりにも感覚というものがかけ離れている。

ガンドが扉に手をかけた。医者は患者を回復させたのだろうか。

心配

「遅かったじゃないか」

僕は地上にいた時間がそこまで長いものだったとは思えなかったが、地下で待つていた博士たちにとってはかなり長い時間だったらしい。

僕らは地上で限られた場所に滞在していただけだ。極度の緊張が僕の体内時間を急速に早めたのだろう。

「無線機は既に完成している。無論、一度この森から抜けださんと本部に連絡はできんが、ここにいる隊員同士での通信は森の中でも可能なはずだ」

机を見ると、そこには確かに8つの無線機が並べられていた。それらは全て僕が持つてきた、壊れた無線機を修理し、複製したものだということが僕には予想できた。

「ジョージは？」

僕は冷静すぎる女博士に対して、出来る限りの深刻な、真面目な表情でそう訊ねた。

ところが、博士は僕を馬鹿なやつのような目で見返した。

「そこで横になっている」

博士は奥にある机の裏側を指さした。

「大丈夫なのか？」

「やはり心配しているのか」

彼女はそう、僕を半ばからかうように笑い言った。

「そりゃあそうだろう」

「レイヴンが大丈夫と言っていたんだ。大丈夫さ」

どうしてどいつもこいつもあんなヤクザをそんなに信頼しているんだ。

「不思議そうだな、ビジネス」

後ろから大佐の声がした。

「医者にとって重要なのは正義ではない。病を治せるか治せないか、それだけだ」

やれやれ、僕は肩をすぼめ、呆れる以外の動作をすることができなかった。

「悪く思ふな、奴の言葉だ」

そう言つたと大佐は、机の無線機をいじり始めた。

「気持ちわかるぜ、ジョーン」

もう一押しをしようと話しかけてきたのはガンドだった。

「医者に正義は必要だ。だが先生みたいな神業だつて必要だ。

実際、おれは先生の治療が成功するかどうかより、無線機に必要なものがあるかどうかの方が心配だったぜ。

やれやれ。しかし確かに、無線機のこと懸案事項に含まれていないな。

僕は何も答えず、ジョージのもとに歩きだした。

疲労感

そこには床に敷かれたマットに横たわるジョージがいた。手術後にも関わらず、ジョージはスーツを着たまま眠っていた。

そして眠っているのはジョージだけではなかった。

「そつとおいてあげて、疲れてるのよ」

右腕を机にまかせて座っていたミユキが立ち上がりながらそういつた。彼女の表情も心なしか疲労感を僕に伝えるようなものだった。「何があつたんだ？」

「どういう意味？」

「ずいぶん疲れた様子じゃないか。君も疲れているようだし、やぶ医者なんて馬鹿みたいに眠ってる」

「なにもないわよ。彼がずっとジョージを治療していただけ。私も力になりたかつたんだけど」

どんな手術だったのかはわからない。だが僕達がここに帰ってくるまで、4時間も経過していないはずだ。4時間以内に終わるような手術が、そんなにも大手術だったのだろうか？

「本当に神業よ。機械みたいに手が動くの、すごい集中力、体力、気力。ほとんど見ているだけの私が先に倒れちゃって」

「それで、手術はうまくいったのかい？」

ふと後ろを見ると、ガンドがコムログにスーツを手渡していた。

コムログはスーツに興味深そうに見つめ、ガンドと何かを話していた。

大佐の方も新しく完成した無線機を拾い上げ、何やら博士と話し込んでいる。

ミユキはふと朗らかな笑顔を見せ「大丈夫」と言った。

「知らないの？先生が手術のあとで眠ったってことは、手術が成功したということなのよ」

「そうかい」

僕はミユキの笑顔を崩すのも嫌だったので、否定せずにそう答えた。

医者が手術後に寝るのは単なる癖だろう。失敗した手術がなかったからそう思えるだけなのだ。結局のところそれは間違いない。

スーツを着たまま寝込んでいる手術後の男は、本当に手術を受けた直後というイメージを僕に与えなかった。おそらくスーツを着ているままだからとか、そういうことではない。仮にスーツを脱がしたとして、ジョージの体には一切の手術跡を確認することができないだろう。

神業なのだ。とにかく。

「スーツを着てたほうが回復が早いらしいの」

聞いてもいないのにミユキが答えた。それは僕がジョージの様子を伺ったからに違いない。

「窮屈そうだな」

意識

「やはりそう思うか」

気が付くとやぶ医者が両目を開けていた。両手を組んだまま座り込み、患者の方を見ると「そろそろ目を覚ます頃だな」と言った。どうしてそんなことがわかるのか僕にはわからなかった。

医者は天才的な勘と論理で（僕にはそれがどんな論理なのか全くわからない）ジョージが目を覚ますタイミングを予告した。そしてあたかも気絶していたほうが医者の言葉に合わせたように、はつきりと目を覚ました。

「ジョージ！」

叫んだのはミユキ・エレレンスだ。目を覚ましたジョージを確認するやいなや、電光石火でジョージの側に駆け寄り、地面に膝をついた。

「先生！ジョージが目を覚ましたわ！」

「わかつている。気分はどうかね？」

医者はジョージに訊ねた。ミユキはレイヴンからジョージへと視線を移した。

「よくはないですね」

精一杯の力を込めたであろうジョージの声は、やはり彼が手術直後の人間であるということをはつきりと示していた。

「それよりもみんな、すまなかった」

「あなたのせいじゃないのよ、ジョージ。誰だって怪我も何もしないんだから、いいのよ」

「いや、俺の不注意だった。だがありがとう、ミユキ」

そう言つとジョージは上半身を起こし、右手で首の後ろを抑えた。「痛むなら無理をするな。スーツは首まで上げておけ、今お前さんの傷を癒しているのはスーツだけだからね。首から腰までメスを入れたんだ。私としちゃああまり動いて欲しくない」

「いや、大丈夫だ、先生。だが無理はしない」

そう言ってジョージは立ち上がると、ゆっくりとした足取りで僕の方へ近づき、僕の肩に手を置いた。

「すまなかった、ジョン。もう少して殺してしまうところだったな」
「覚えているのか？」

僕は驚いた、ジョージは意識がありつつ凶行に及んだのだろうか。
「難しいね。思い出せるが、あの時、意識はなかった」

「仕方ないさ」

不思議な現象だと思うほか僕のすべきことはなかった。憎むべき寄生キノコ、ビワガサは寄生中、ジョージの意識と行動の一切を奪い、天才外科医レイヴン・ジャックに何らかの外科的手術でひっぺがされたあと、凶行の記憶だけをジョージに残した。どういう理屈なのだろうか。一度、博士がレイヴンに訊いてみるか。

傷口

「どれぐらい動ける？」

僕の後ろから覗き込んだのは女博士だ。両手を後ろで組み、口にははっか煙草を咥えている。

「普通に行動する程度なら問題ない。スーツを着ての話だ、激しい運動は控えてもらおう」

ジョージの代わりに答えたのはレイヴン・ジャックだ。

「傷口が開きだしたりなんてすると私はまたムラムラと治したくなっちゃう。面倒なんぞでな」

「大丈夫ですよ、先生。俺は動ける」

医者はジョージと視線を合わせるために、腰を落とした。

「いいか、本当ならお前さんには長い休養が必要だ、傷も完治していない。この先どんな戦闘があつたとして、お前さんが参戦することとはまかりならん」

一瞬の沈黙、女博士が医者の意見を肯定する旨を発言するまで、誰も口を開かず、真剣な瞳で、医者と患者の視線が交わり火花を散らす空間を見つめていた。

「うむ、医者の言うことは聞いておくべきだな、ジョージ」

仕方ない。という感じの表情をもろに浮かべたジョージは「わかりました」とだけ言った。

梯子

「おう、ジョージ。目を覚ましたな」

回復しているのが当然だと言うが如く、ほとんど心配という感情を欠いた様子のガンドが戻ってきた。

「迷惑をかけたな」

「いいことよ、仕方ないぜ」

大男は親指を立ててみせた。「それより」とガンドは言った。

「ちよいとまずいことになった」

頭を掻きながら「梯子が壊れてるぜ」と突然言ったガンドの言葉の意味が僕にはいまいちよく理解できなかった。

「どの梯子だ？」

「地上へ出る梯子だよ」

やれやれ、どうしてこうも問題ばかり起こるのだろうか。

通信

部屋に入っただけに、僕は思った。ここにある梯子は施設にある長大な梯子の中でも最も巨大なものだ。つまり、最も頑丈であるべきで、実際に最も頑丈なものなのだ。

それは僕が最初に降りてきた梯子だった。暗闇の中、長い時間をかけて降りたあの梯子。それは今、僕の眼前で、死んだように崩れ落ちている。

「これを見るよ」

ガンドの方を見ると、10m程先にいるガンドが崩れ落ちた梯子の先端、破損部分に指を当てていた。

僕はガンドに近づき、梯子を見た。僕はそれを見た瞬間、この巨大で頑丈な梯子が破壊された原因がわかった。

「焼き切れてるぜ」

「あの時だな」

僕はキノコに洗脳されたジョージが持っていたレールガン进行出した。

ジョージはガンドに向けレールガンを構えた。あの時、レールガンは明後日の方向を撃ちぬいた。カッサード大佐がジョージを組み伏せた弾みで、弾は後ろに反れたのだ。その時だろう、大佐とジョージの遥か後方にあったこれに、レールガンの一撃が炸裂したのだ。

「絶たれたな、退路が」

後ろから声がしたかと思うと、そこでは博士がはつかたばこに火を着けていた。

「何とかして上へ登れませんか、博士」

僕は天井を見上げた。ガンドは言葉を続ける。

「何しろこの梯子の先の道なら俺たちが知ってる場所ですぜ。それなりに安全に帰れるんだ」

薄暗く、周囲が多少は見渡せる程度には明るくなったこの大部屋

だが、上を見上げると、そこに広がるのは真つ黒の天井か、光の届かない上空かのどちらかで、スーツの補助をどれだけ便りにしたところで、決して触れることのできない領域だった。

「無理だ。無線機を作ったときに機材を集めたが、浮遊機を作るのには無理があるな」

ガンドも天井を見上げた。その先にあるのはやはり忌々しい闇だけだった。

「残念な事態だが我々は進むしかない。カッサードとお前たちが戻ってきた扉でもいいが、化け物が待ち構えているらしいな。もつとも、カッサードがいるんだ、強行突破できないことはない。戦力外のレイヴンと私がいることを考慮してもな」

ハリガネ人間を見てもいないのに、大佐がいるなら大丈夫か。カッサード大佐の化け物ぶりは女博士の飛び切りに優秀な論理的思考を根本からたたきつぶしたらしい。

「これをつける」

そう言つて博士は金属の塊を僕とガンドに渡し、自身もそれを白衣の襟元へ取り着けた。

「原始的な無線機だ。通信は全員に向けることもできるし、個人に向けることもできる。切り替えは二種類で操作は簡単だが、ここにいる者としは通信はできない」

「つまり森の外に出ても助けは呼べない？」

僕は重要なことを訊ねた。ポリノの研究所との通信コードは頭に叩きこんである。

「わからん。なぜこの森の中か、あるいは森の周辺に近付くと通信が妨害されるのか、原因不明だからな。もしお前が無線できた最後の地点まで我々が戻れたなら、通信が回復する見込みはある、この無線機の基本構造はお前が持ってきたものと同じだからな、急遽、専用コードを持つコピーを作っただけだ」

僕とガンドは操作方法をすぐに覚えることができた。シエルター内の多くの日常電子機器を作っているのは誰あろうこの女博士だ。

この無線機ほどシンプルではないにしろ、その商品の数々は高度な操作が可能な上に、直感的な使用ができる理想的な電子機器ばかりだ。

そして博士が自由気ままに研究や実験を行える裏側に、そのような商品で得た収入があるのだ。

大企業、ファリス・エレクトロニクスの創設者、彼女のもう一つの顔。

「戻るぞ、もう一つ扉があることは知っているな、コムログによればなかなか都合のいい出入口だそうだ」

「どういう意味だろうか？都合がいい？悪くない表現だ。」

「今回は全員で行く。脱出だよ」

映画

僕達が大部屋に到着すると、そこには全員が集まっていた。ジョージは何事もなかったように椅子に座っているし、大佐は壁に背中を預けて腕を組んでいる。そして確認したところ、全員が同じ無線機をつけている。

「どうぞ座って、ジョン。ガンドと博士も」

ミユキが立ち上がり僕らを促したので、手近にあった椅子に僕は腰を落とした。ガンドが座った椅子はやや苦しそうな悲鳴をあげた。

「みなさん、これを御覧ください」

正面でコムログが何かの薄っぺらいリモコンのスイッチをいれると、映画館のようなホロスクリンが現れた。もちろん、本物の映画館のスクリーンほど大きくはない。

僕は映画というものが好きだ。確か最後に見た映画は推理小説を元に作られた馬鹿げたファンタジーだった。誰でも魔法を使える世界である魔法を使った殺人事件が起こり、探偵が魔法とおなじみの賢い脳みそを使って犯人を暴きだす。そんなストーリーだったと思う。

魔法。魔法か。そんなものがあるはずがない、魔法とは、科学が、人間が証明できない何らかの現象につけた総称にすぎない。そうさ、僕達は納得すべき理由を必要とする生き物なんだ。魔法でも、心霊現象でもいい。理由がわからないほど怖いものはないのだから。

この世界がこんな風になっちゃったのは魔法のせいではない。地球の生態系をここまで異様にしてしまったのも、豊かだったはずの大海を失ってしまったのも、魔法のせいではなく、大昔から続けてきた人類の悪行が原因なのだ。

神や魔法や心霊現象やその他の解明不能なフェノメノンではない、僕らが地球を痛めつけ、傷付け、苦しめ、壊したのだ。自分で自分

の首を絞めている。

地上

「これが私達に残された最後のルートです」

コムログの声に合わせ、ホロスクリンは電子式であろう銀色の扉を映しだした。その扉は今まで僕らが使ったことのある扉とは少し形状が違っている。

「この扉はですね、おそらく、M・エレレンス、あなたが発見されたものと思われます」

「そうよ、でもその扉はまだ開けていないわ」

「はい、M・エレレンス。実はこの扉は電子ロックがかかっていて、パスワードが必要です」

「パスワードは知ってるのか？」

僕の隣でガンドが言った。

「もちろんです、M・ブルーノ」

「その扉は電動式か？」

「そうです、E・ロマンコフ^{エル}」

「なぜその扉だけ電動式で、しかもロックが掛けられている」

「なぜならこれはエレベータだからです。一度、北へと進み、中継シエルターに向かいます。その後そこにある上昇エレベータで地上へ出るという計画です」

「待ってくれ、北へ行くと帰る道が遠くなる。僕達が戻らなければいけないのは南の方角だ」

「その通りです、M・ビジネス。しかし私達はこのルートで脱出するしかありません」

「他に出口はないのか？」

「ありません、M・ビジネス、外へとつながる扉は、エレベータ、巨大はしごの部屋、そして、ハリガネ人間とやらがいた扉だけです」
ハリガネ人間。コムログが僕らの決めた名称で呼ぶということは、それが彼のデータベースに存在しないということだ。

「危険なのはわかるが、ハリガネ人間の扉から脱出したほうが北へと進むよりマシなんじゃないのか？どうせ北へ出たところで、どんな化物に出会ったかわかったもんじゃない」

いつの間にかホロスクリーンはシェルターの全体構造を映し出している。たしかにコムログが言うエレベータは北へと長く伸び、その先には離れのような部屋がポツンと存在している。

「私もそう考えます、M・ビジネス。ですが先程、M・カッサードにお聞きしたところ、外で雨が降っていたということなので——」

何が問題なのだろうか。まさか彼の体が水でショートしてしまうとか、錆びるとか、そんなことではないだろう。そもそも、僕らが退散したときには雨は殆ど止んでいたのだ。

「——おそらく、もうすぐこの地上は火の海になります」

発火

まいったぜ。僕は本当にそう思った。椅子に座っていなければ、僕は地面に腰を抜かしたに違いない。

「先ほど申し上げたように、雷吼樹の森がこの真上にあるのです。雷光樹は雨上がりに発火するので、残念ながら、その扉を使うと私達はたちまち燃え尽きてしまいます」

「まさか！」

僕は思わず声を荒らげた。全くの無意識だ。誰に文句を言ったところでどうにもならないのはわかっている。

「そんな馬鹿な！地上には何かが燃えたあとも何もなかった、そもそも同じ形状の樹木ばかりじゃなかったぞ」

僕は自分で思っている以上に大きな声を出していることに気付いた。

「まさか、10年越しぐらいに降った雨に、運悪くぶち当たったってわけじゃないだろう？」

僕は冗談で怒りをごまかした。だがコムログはそんな僕の心境を見透かしたように、僕に合わせて取り乱す事のないように答えた。

「いえ、その点は私にもわかりません。ただ、動物類は確かに異様な変貌を遂げているようなのですが、聞くところによると、植物類は強靱に、巨大になっています。植物が燃えた痕跡が見られないというのも、おそらく短期間で他の植物も再生するんでしょう。おそらく雷吼樹もその例に漏れないでしょう。かなり生命力の高い種族ですから」

「どれくらい燃え続けるんだ？」

「私が知っている限り10時間ほどでしたが、現在の規模を考えると、私にも予想ができません」

摂氏

「燃え尽きるまで待てないのか？」

「ダメです。M・ビジネス。時間がかかりすぎます。おそらく、雷吼樹そのものが燃え尽きても、その他の植物は燃え続けるでしょう、それに想定通りの規模の雷吼樹が存在するならば、地上一帯は文字通りの火の海どころか、沈下したあとも猛烈な熱が残っていると思われるわね」

「熱が引くまで待てばいいじゃないか、北へはどれぐらい進むんだ？」

「およそ60マイル先にプロスキ・トルバチックと呼ばれた死火山があり、エレベータはその麓にあるのです」

「そんなに遠くなるの？まだここでやり過ごしたほうが安全じゃないかしら？」

「M・エレレンス。いえ、皆さん、話さなければならぬことがあります。先ほどC・カッサードとはお話ししたのですが、私達は、厳密に言えば私以外の、つまり生身の人間である皆さんは、一刻も早くここを脱出しなければなりません」

「なぜだ？そもそも、本当にその雷吼樹とやらが存在しているかどうかさえはつきりとはしてないぜ」

「ガンドの言うとおりだ、僕らは外に出たとき様々な木々を見たが、どれがその雷吼樹にあたるのかはよくわからなかった。」

「だってよ、もしこんな植物だらけの場所で火事みたいなもんが起こつてみる、炎が消えるのはこの森を焼き尽くしてからだぜ」

「M・ブルーノ、あなたの言うとおりです、しかしもう一つの事実は雷吼樹が存在することを告げているのです」

「どういふことかしら？」

「カッサード大佐の指示でこんなデータをとってみたのです」

ホロスクリーンはコムログの言葉に従い、その画面に棒グラフを

映しだした。左から右に行くに従って棒グラフは徐々に短くなっている。

表示されている数字はこうだ。数字は左から22・080、22・074、22・068、21・060。そんな風に、法則を持たずして、ランダムではあるが、徐々にその数を減らしていた。そして最も右に位置する数字は19・888だった。

「これは？」

僕にはそれが何の数字かわからなかった。

「摂氏だ」

答えたのはカッサード大佐だった。

摂氏？

「申し訳ありません」

コムログははっとしたように言った。

「華氏に切り替えます」

そこで僕もはっとした。華氏に切り替える必要などない。これは温度だ、おそらく、この地下施設の。

準備

「これは私が起動してからこの地下施設の推移をグラフ化したものです。ご覧のように、徐々にではありますが温度は下がりっぱなしです」

嫌な予感が走った。もういい、コムログ、ここから脱出しなければならぬ理由が、その緊急性がじわじわと僕の不安感を責め立てた。

「この地下施設の温度が下がってきているのでは、おそらくないでしょう。もとの戻り始めているのです」

「もういいぞ、アンドロイド、それで十分だよ」
博士が立ち上がった。

「準備というほどのものはないな、すぐに出発できるのなら、すぐに出よう。長居する理由はないし、こんなところには私もさっさとさよならを言いたい」

「保存庫にあったレーションは片っ端からこのバッグに詰めた。いいな？コムログ」

「もちろんです。C・カッサード」

ノーと言ったところで何か意味はあるのだろうか。

箱の世界

僕は思い出していた。たしかに、この地下施設に潜ったとき、僕はこう思ったのだ。大地の温かみを感じた。快適な温度だった、と。そんな馬鹿な話はない、地熱？地球はすでに死んでいるはずだ。おそらくすでにその熱を失っている。もちろんここには暖房設備などない。凍てつく闇の世界だったはずだ。つまり、地下にシエルターを作ったところで、人類に生き残るすべはなかったのだ。

なるほど、これは僕の粗末な仮設に過ぎないが、ここに人っ子ひとりいない理由は、人類がそれに気付いたからではないだろうか？だから誰もここに入らなかったのだ。それなら、暖房設備でもつければいいだけだが。

とにかく、この地下施設の温度が僕らにとって、現在、快適である理由。それは僕らがここに到着する以前に、地上が灼熱地獄だったからではないだろうか？地上の植物の成長度からして前回雨が降ったのはそれなりに前のことだろうが（ただ、僕らはここにいる植物がどれほどの猛烈な成長力を持っているのか知らないのだが）、現在の温度にして快適、さらに徐々に冷えている、ということは、以前、今よりもここがもっと熱かったことを意味する。

つまり、放っておけばこの地下施設は火の立たぬ灼熱地獄に変貌する。

機械系やコムログが無事だということは少なくとも鉄や、コムログを形成する何らかの物質が溶け出すような温度ではないだろう。だからと言って、僕ら生身の人間が太刀打ちできる温度かと言うと、そうでもないらしい。それは博士の（脱出しよう）という判断で納得できる。きっと何か僕には難しい計算をしたに違いない。

だから僕らはすぐにエレベータに乗った。用意すべきものなど、保存庫に保管されていた大量のレーションが詰まった圧縮パックを別にすれば、ほとんど存在しなかった。

僕らはそれぞれの武器を手にエレベータに向かった。
高速で水平移動を行う箱の世界に、僕らは足を踏み入れた。

地球

僕はコムログの言うエレベータを鋼鉄が何かで作られた単なる無機質な箱のようなものだと思像していたが、実際にはそれは僕が想像したところのそれとは異なっていた。

高速で水平移動をしているにも関わらず、そのスペースは（空間は予想通り正方形に近かった）快適で、何よりかなりの広さがあった。

おそらく進行方向だと思っ壁には棚があり、多種多様な武器が収められていた。左から、様々なスタンナイフ、スタンウィップ、スタンスティック。その隣には銃類、M1903、M1ガーランドなどのライフル。カラシニコフ。これは僕も知っていた。どれもこれもアンティークで、特にガンドは目を輝かせていた。表情には出さぬものの、カッサード大佐も吟味するようにもはや伝説級の古めかしさをもつ武器たちを見つめていた。コモン・テストス、モシン・ナガン・ドラグーン、ドラグノフ。さらにカンピピストレーやパンツァーフアウストなどのグレネードまである。

逃げ延びた人類が残してくれた数少ない産物、資料。それらに載っている、今では存在しないはずの動物、武器、書物など、とにかくそれらは僕らにとって伝説のようなものだった。

今、僕らの目の前にあるのは、大昔の伝説なのだ。

シエルターにいる人間はみな夢を見る。今はもうなくなってしまうもの。シェイクスピアの傑作、怪しげなモナ・リザ、エミラテスの輝き。美しきサラブレッド、巨大なマンモス、凶暴なサメ、空を舞う鷹。圧倒的な自然、山、海、川、そして太陽。

かつて地球はそれほどまでに美しかった。

ピースメーカー

ガンドは古い拳銃をずっと眺めている。いかにも興味深そうな瞳が僕を誘った。

「なにをそんなに見てるんだ？何か特別な銃なのか？」

「ああ、こいつを知っているか？」

「いや、見たことない銃だな」

実際にはその機構について多少の理解があった。使いにくそうな手動タイプのリボルバー。こんな不便な銃はこの店に行ったら置いていない。

何という銃なのだろうか、この銃がガンドにとってどんな価値があるのだろうか。

「ピースメーカーですね」

コムログが口を挟んだ。

コルト・シングル・アクション・アーミー

「CSAA。1892年に製作された名銃です。このタイプは2043年まで出回った45口径フォーティファイブですね。ウィンチェスター銃と並ぶ史上屈指の偉大な回転式拳銃です」

「2043年」

僕とガンドは声を揃えた。それはおそらくコムログが生きていた時代ではない。その果てしなき時間の流れを想像して、僕はめまいを覚えた。

コムログの知識は底なしだ、過去の人類史をほとんど網羅している。博士がシエルターに連れて帰りがっている理由もわかる。僕達が学べるものがあるとすれば、それは過去から以外の何者でもないのだ。

「これを見せてくれ」

ガンドがガンホルダーからゆっくりと取り出したのは、驚くべきことにコムログが言う伝説の銃と全く同じ姿をしていた。

「どうしたんだ、それは？」

コムログすらも興味深そうにそれを見つめた。フレームにはEmion Brunoという名前が彫られている。

「先祖から代々引き継がれてきた銃だ」

ガンドはゆつくりと話した。ひとつひとつの思い出をひねり絞るように。

「誰も、名前すら知らないシロモノだった。俺の家ではこれが代々お守りだった」

感動のあまりだろう。ガンドの目が少し潤んだように、僕には見えなかった。

「長い間、家族を守ってきた銃だ。昔はちゃんと使われてたんだろ。うな。ばかみたいな時間が過ぎちまって、今じゃあ弾が売ってねえから、本当にただのお守りになっちまった」

苦笑したガンドは声を震わせながら愛しい銃をしっかりと握りしめた。

「M・ブルーノ。これを」

コムログが棚から選んでガンドに差し出したのは赤い箱だった。

「これは？」

ガンドは赤い箱を受け取った。

「45ロングコルト。他にも互換性のある銃弾はありますが、私はこれを推奨させていただきます、M・ブルーノ」

ガンドはゆつくりと赤い箱を開けた。先端に銀色をまとい、金色に輝く弾丸がたんまりと眠っていた。

「毎日、手入れは欠かさねんだ。いつか、こんな日がくればと思ってた。俺の先祖からの、俺たちの夢だった」

ガンドは弾丸をひとつつまみ上げじっくりと見つめた。そしてゆつくりと歴史ある先祖の銃に装填した。

「ありがとう」

突然ガンドに抱きしめられたコムログは笑顔で言った。

「お役に立てて光栄です。M・ブルーノ」

安静

「ジョージ。傷の具合はどう？」

ミユキがジョージに話しかけた。

「気分は良い。手術した後だとは思えないよ。自分でも」

「無理はするな。そりゃあスーツのおかげだ。そのスーツがお前さんの体に密着して切ったところを頑丈にしてやがるんだ」

医者は椅子に座って煙草をふかしている。

「お前さんの上半身のほとんどのところにメスを入れたんだ。そのスーツがなきゃあ絶対に動くことはまかならん」

「だが先生がいなければ俺は死んでいた。スーツもそうだが、とにかくあなたのおかげだ」

「そうですよ先生。先生がこの部隊にいてくれて本当によかったわ」

「フフ、私は金のためにやっているだけさ。とにかく、お前さんはまだ安静にしておくんだ。ここにはベッドがないからな、到着するまで、そのへんで横になっておけ。私も少し寝る。寝られる時に寝ておかなきゃあなあ」

医者は煙草の火を消すと、並べた椅子に足を伸ばして目を閉じた。

覚悟

僕達は長い間、鋼鉄のゆりかごに揺られ続けていた。

「向こう側に着いたら我々はどうすればいい？何がある？」

大佐が銃の手入れを終えてコムログに近づいてきた。

「向こう側のシェルターについては問題ありません。このエレベータと同じく人為的な手段を持ってしない限り、まず侵入はできないでしょう」

「上昇エレベータの出口は確保できているのか？」

「そこなのです、C・カッサード。私はそのことについて考えていました」

「やはり塞がっている可能性があるということか？」

おいおい、それはどういうことだ、それがもし本当なら、僕達はどうすることもできない。ただ地下で死ぬのを待つだけだ。ここは馬鹿でかいハイテク棺桶と化す。

「大規模な地殻変動があった場合や。水生植物が巨大成長を遂げて出入り口を塞いでいた場合、脱出は不可能です」

「どれくらいの確率だ？」

「私はほとんど可能性は低いと考えています。C・カッサード」

「雷吼樹だな？」

コムログはやや驚いたように「そのとおりです。C・カッサード」と言った。

僕は我慢できなくなり、二人の会話に入った。

「どういうことだ？」

「聞いておられたのですか、M・ビジネス」

「どうせ全員に覚悟する必要がある。構わん」

どんな覚悟だ？それは。

「泳ぎはお得意ですか？M・ビジネス」

ニューバイカル

コムログとカッサード大佐を前にして全員集合だ。これから、僕に泳ぎは得意かと訊いた意味を教えてください。

「みなさんに、お伝えしておかなければならないことがあります」
やれやれ、どうせ悪い知らせだ。

「我々はこの先のシェルターで上昇エレベータに乗り移り脱出を図ります。しかし上昇エレベータですぐに地上に出られるわけではありません」

「水か」

女博士は右手でペンを弄びながら言った。

一体どういう脳みそをしているんだろうか。僕とは想像力の桁が違う。コムログだって驚いている。

「そのとおりです。いえ、少し驚きました」

「ちょっと待って、私達のほうが驚いてるわよ。水って言うのはどういうこと？何が、水なの？」

そうだ、ミユキ。それが正しい反応だ。どうも大佐と博士、それからあの医者に親近感がわかないのは事ある事象に対しての反応が僕らのような一般人とあまりにかけ離れているからだろ。医者なんて腕を組み眠ったままだ。

「M・ミユキ。これは知らなければわからないことですが、実は我々のシェルターは水中に建設されているのです。」

何しろ非常時のためのシェルターですから、立地条件が多少不便でも、とにかく脱出に適していて、かつ地上災害の被害を受けない場所に存在する必要があります。シンプルに言えば、裏口、と言えます」

「まさか、海なんてもんはとくに干上がっちゃってるぜ？俺たちが生まれるずっと前からだ。今頃はそのシェルターとやらもむき出しで、悪けりゃ植物の巣になってる」

ガンドの言っていることは正しい。だがこんな森がシェルターの外にあったのだ、海がないとは言えない。可能性は0じゃない。僕にだってそれぐらいの想像力は蓄えられている。

「海ではありません。正確には、M・ブルーノ。湖です、ニューバイカル湖。当時、世界最深クラスの湖です」

「どっちにしても干上がっちゃってんじゃねえか？」

「その可能性もあったのでしようが。どうやらニューバイカル湖は持ちこたえたようです。しかしM・ブルーノ、湖に水が残っている可能性を私に教えてくれたのは、あなたのおかげといってもいいでしょう」

「どういうことだ？記憶にねえな」

ガンドは人差し指と親指で顎を挟み、首を傾けた。

「雷吼樹ですよ」

「わかんねえ」

なるほど、僕はやっとわかった。

「M・ブルーノ。なぜ雷吼樹が森を焼き尽くしていないのか、とおっしゃったのはあなたですね？」

「ああ、それは覚えてるな」

「我々は元いたシェルターの地上に雷吼樹がありました。とすれば、雷吼樹が燃え広がらない理由も必要になります。それがなければ雷吼樹は存在しないことになるからです、この森が実際に焼かれ果てていないのですから。」

ニューバイカルはかつてプロスキ・トルバチックが活動していた時期に流れでた溶岩の流れ、地殻変動と断層が作り出した湖で、形状は異様を極めます。いわゆる火口湖に近く、メインシェルターを囲むような形で形成されているのです」

「なるほど、そいつが炎をせき止めているということか」

「おそらくです。M・バンディクー」

「しかしコムログ、その湖はさっきのシェルターを完全に囲っているわけではないのだろう？ならば他の場所から火が回る可能性は高

い」

「M・バンディクー。ある仮説が、私にとっては当たり前だったことなのですが、成り立てば、火が回るルートはたった一つです。」

この湖がニューバイカルと呼ばれるのはかつて世界最深の湖であったバイカル湖と様々な点での偶然の一致があつたからです。その約2000mにも及ぶ水深に立地、そして独特の三日月形です」

三日月というものがどんなものか僕達にはよくわからなかったが、コムログが何らかの合図をすると現れたホロスクリーンのお陰で理解することができた。

たしかに、湖はやや北東から南に位置し、巨大に湾曲しながらシエルターを囲んでいる。

「ご覧のとおり、ニューバイカル湖が生きていれば、北東から南に炎の行く道はありません」

「北側と西側はガラ空きじゃねえか」

「北には海があります。M・ブルーノ」

北極海

なんだって？、何？、え？、そのような意味を持つ言葉たちが僕らの口から一斉に飛び出した。

大佐はしかめっ面をするに踏みとどまっているが、大抵のことにはどこを風が吹くかといったような感じの博士ですら、ぼくらの異口同音となった。

「それは確かか？」

これは貴重な姿だ、博士すら少し興奮している。それもそうだろう、現在の科学者にとって、海は夢の塊だ。生物の母、そこにはどんな未知のエネルギーが存在しているのだろう。

「可能性です、E・ロマンコフ。常識的な知識として、地球の北の果てには北極海があり、凍りついた地表があつたのです」

「まだ干からびていない、最後の海か」

「そうなっている可能性もあります。何しろ、信じがたいことです。あの太平洋が消滅したとあつては——しかし、とにかく、私にとって最も妥当な推理は北には海が残っているということです。あるいは西側のように何らかの耐火物がこの一帯を囲んでいるのかもしれない」

「そんなに大きな範囲を囲める耐火物が存在するのかい？」とジョージ。

「はい、自然に存在します。苦灰岩や鉾石の多い岩山などがあれば考えられます。ドロミーティのような山岳地帯がうまく形成されている可能性があります」

ドロミーティという謎の単語を知っているものは僕達の中にいなかった。だけど僕達は誰一人それについて質問しなかった。コムログの言うことは正しいのだ、そう信じるのだ。わからないことを掘り探れば、次から次で際限がない。

水圧

「話が逸れているな。とにかく脱出の方法だ」

カッサード大佐が言った。

そうだ、この際、どうして雷吼樹の炎が燃え広がらないのかとか、滅びた地球のどこかで奇跡が起きているかもしれないということは二の次だ。まず僕らは僕達の命を繋げなくてはならない。

「そうですね。まずはそれが先決だわ。エレベータが向こう側に到着したらどうすればいいの？」

「まずは先ほど申し上げた通り、上昇エレベータへと移動します。上昇エレベータへは小さなシエルターが直通しているだけなので、なんの問題ありませんが、ここで皆さんにO₂バレルを確保して頂きます。人数分は十分にあるはずです」

「O₂バレルか」

ジョージが右手で後頭部を抑えた。

「まさか、泳いで岸に上がるなんてことはないわよね？」

残念だな、ミユキ、君の推理は実に惜しい。

「申し訳ありません、M・エレレンス」

「なんてこと（ホーリーヘル）、悪夢だわ」

「自然の水の中を泳ぐのは初めてだ、まったく、馬鹿げていやがる」
ガンドが皮肉った。自然の水の中。その言葉に僕は何らかの、漠然とした疑問と不安を覚えた。

「仕方ねえな。詳しく教えてくれ」

「水中と言っても湖底から水面まで浮上するわけではありません。M・ガンド。さすがにそのスーツでも2000m級の水圧には耐えられないでしょうし、そもそも水の重みで我々は動けないと思います。」

我々が上昇エレベータでたどり着く先は地下です。出口は対岸の岸壁、湖底から約1800mに位置していますので、我々はそこか

ら200mほどを自力で浮上しなければなりません。出口までは洞窟が続きます。洞窟をまっすぐ進むと二重ドアがありますので、私がロックを解除します。

出口から外に出る際に注意していただきたいのは、幾許か水位に変動があるかもしれないという点です」

ちよつと待て、僕は頭の中でそう思った。何か引つかかる言葉があつたような気がする。

「話を止めて悪いが、ひとつ聞きたい」

「なんででしょうか？M・ビジネス」

「今、こう聞こえた気がするんだ。出口は対岸の岸壁」

「そうです。もともと、この経路は一帯を覆う湖の外側への緊急脱出通路なのです」

「じゃあこういうことかい？今、僕らは湖の中にいる」

もしそうなら、僕は今までどれだけ自分が脳天気だったかということ进行い知らされることになる。初めての感覚が僕を襲いそうになる。莫大な量の自然の水、湖の中に、もうすでに僕はいる。

僕はそれを想像して目眩を覚えた。想像が僕を押し潰そうとしていくかのようだ。

「その通りです。我々が搭乗している水平移動エレベータは現在、ニューバイカルを突き抜けるパイプラインを移動しています」

僕、ジョージ、ミユキ、ガンド、つまりは一般人の精神に緊張という侵入者がいとも簡単に入り込んだ。僕はグローブを外して手のひらを確認した。どうしてそんなことをしたのかはわからない。それは美しくも醜くもない普通の手のひらだった。手のひらには、じつと汗が滲んでいた。

医者はまだ眠っている。

水量

「いきなりとんでもないことを知ってしまったようだね」

ジョージが半分ぐらい笑いながら言った。

「笑うしかないぜ」

ガンドも瞬きを忘れていたようだ。

「申し訳ありません。伝えるのが遅くなってしまったようで」

「仕方ないさ。君と僕らではちよつと常識が違うみたいだから」

僕は顔をひきつらせながら言った。僕は怖いのだろうか。

「だが対岸に出口があるというのは幸運だな。泳いで湖を渡らなくてもいいわけだ。その点は安心と言つか、まだよかった」

「そのことなのです、M・バンディクー。湖がまだ存在していることは私の予測ではほとんど確実なのですが、どのくらいの水量が残っているかという点は全くわかりません」

「200mの浮上では済まないかもしれないということ?」

「それもあります、M・エレレンス。しかしその逆もありえます。

だから、その点を十分に注意していただきたいのです。

もし水量が増えていれば我々は予想より多く泳がなければなりません。そしてもし水量が減っていれば我々は泳ぐのではなく、崖をよじ登らなければなりません。ロツククライミングです。さらにもし水量が減少していることに気付かず、勢い良く出口から飛び出せば、最悪の場合は何百mも下の水面に叩きつけられてしまいます。

出口から脱出するとき、そのことに注意してください」

「崖登りか、全くいろいろなことをやらされるぜ」

全くもってガンドの言うとおりだ。

「大昔の人は強化スーツなしで200mも浮上してたの?」

「とんでもありません、M・エレレンス、死んでしまいます。技術的にスーツは存在していましたが、ここに用意されていたのは浮上カプセルです」

「それを使えばいいじゃないか」

僕は本当にそれを使いたかった。

「それが、どこにも見当たらないのです」

「どうということだ？」

「何者かに使用されたのでしょうか思えません」

コムログが何者か、というのだから、それが誰かということとはわからないということだ。でも、僕らより先にカプセルを使ってしまった誰かを僕は恨みたかった。

「どのような理由かはわかりませんが、ここからの脱出で使用されたようですね。あるいは湖の向こう側に渡りたかったのかもしれないませんが、私の記憶によると、湖の向こうにはただただ続く緩やかな山岳地帯です」

「いまでも緩やかな山岳地帯だといいわね」

「また怪物の森が続いてるかもしれんがな」

ミユキとガンドがそんな会話をしているとき、突然エレベータが僅かな振動で震えた。

「到着です。皆さん」

ほとんど音も立てず、エレベータの扉がゆっくりと開き始めた。

同感

僕らは身構えてエレベータの扉の全開を待った。何かが飛び出し
てはこないだろうか？何かが起こりはしないだろうか？そんな不安
が僕を襲う。

ようやく扉が全開すると、とにかく出口の扉に悪いことが起きて
いて、ここまで水が侵入しているということはないようだ。しかし
極悪の生物はどうだ。まだわからない。僕らは鋼鉄の箱から、暗闇
の中へと侵入する。

大佐が先頭に立ち、その後ろにサーチライトで前方を照らすガン
ドが続いた。大佐は銃とナイフを同時に持つ例のスタイルだ。

強力なサーチライトが最初に照らし出したのは無機質な壁だった。
そこは本当に何も無い部屋で、その無機質さときたらエレベータの
ほうがマシなぐらいだ。あるのはたった一つ、もうひとつの扉だけ
だ、おそらくあれが上昇エレベータだろう。

「上昇に要する時間は？」

静寂を破って博士が言った。

「ものの数分です」

コムログは全員が部屋に入ったことを確かめると、扉の横の壁を
触った。扉は入ってきた時よりも滑らかに閉まった。そのままコム
ログはもうひとつの扉の前に移動し、扉を閉めた時と同じように壁
を撫でた。

「こちらです」

上昇エレベータは音も立てずにその口を開き、何世紀も前から溜
め込んでいた吐息を吐き出した。

「ふう」

ガンドが大きな溜息を吐き出した。気合を入れたつもりだろうか。
「緊張するのか？」

僕は訊いてみた。僕は僕の胸の内側に何とも言えない感情が漂っ

ていることに気付いた。

「緊張？まあ緊張もしてるけどな、なんだかほっとしてる。こんな穴蔵の中で死ぬのはごめんだね」

「同感だ」

その理由が僕にはわからなかった。地下とはなんなのだろう。地表には新たな危険が待ち受けているに違いない。それでも僕はとにかく外に出たかった。生まれてこのかた見たことのなかった太陽を生命の本能が求めている。

着替え

「行こう」

大佐はエレベータの中に入ると地表を見上げた。

「生まれ変わるような気持ちね」

ミユキがその後にく。

そうだ、僕達は地下から這い上がり、もう一度太陽の下に生まれる。

「傷は大丈夫なのか？」

「問題ないさ」

ガンドとジョージが踏み入った。

「やはりこれは着ねばならんか」

博士はいかにも嫌そうにスーツを抱えてエレベータの奥に行き。

その場で着替え始めた。

エレベータは大した広さではない。8人と巨大なバックパックを詰め込むと、半分の空間を失ってしまう。

「何してるんですか」

ミユキがやや固まっていった。

「着替えだよ。私もスーツを着ねばならんだろう。止めてくれ」

「博士……」

男共は何とはなしに天井を見つめた。おかげで全員がカッサード大佐の姿勢を真似した形になった。

「放って置こう」

僕はそう言っ後ろを向き、そのままエレベータの中に入った。

最後に乗り込んだのはレイヴン・ジャックともちろんコムログだ。コムログが扉を閉めるとエレベータが作動し始め、狭い空間に緊張が走った気がした。エレベータはほとんど揺れを感じさせない。

「確認します。この先にあるのは洞窟です。その洞窟を抜けて湖を200m浮上すると陸地です。たどり着いた先の大地については全

くの未知です。一応ではありますが、私が知っている情報を頼れば先に広がるのはベーリング平原という名の広大な平地です。ベーリング平原を辿り、湖を迂回して南へ抜けるのがこの森から抜け出す最短のルートだと思われます」

「湖から浮上したあとのルートはその都度考えよう。できれば元の場所で回収船を呼ぶ方がいい。我々にとっては空も含めて知っている情報が全くない」

博士の言い分には一理あった。今回ぼくたちがこの北の大地にこれたのも、僕の知らない、賢い連中の調査があったからなのかもしれない。実際、僕と博士たちが辿った空のルートは全く同じだった。しかしだからと言ってわざわざ遠回りをして危険な森を探索するのもどうだろうか。

「わかりました」

「コムログ」

ジョージがバックパックを開けて中を探った。

「これを」

それはスーツだった。生身のアンドロイドはそれを受け取った。

「ありがとうございます。私からも皆さんに渡して置かなければならないものがあります」

コムログが壁を触ると、天井の一部が開き、中から小型の酸素ボンベが降りてきた。ただしその数は7つしかない。

「私は長時間呼吸しなくても生存可能なように製造されているので必要ありませんが――」

コムログがそこまで言ったときミユキが遮った。

「大丈夫よ、見て」

そう言うときミユキはスーツのうなじからつながるフードケースを開き、マスクを装着した。

「このマスクは酸素ボンベとしての機能も備えている。理論的には酸素ボンベとは別物だけどね」

ジョージが言った。

「それは安心しました」

コムログがそう言うのと酸素ボンベは天井に吸い込まれた。

「装着の前に正確に作動するか調べる必要がありましたので」

コムログはもともと着ている簡素な服の上からスーツを着て、ミ
コキを真似るようにマスクを装着した。

「素晴らしく快適ですね。重みもない」

「誰が作ったと思ってる」

博士がニヤリと言ってマスクをを装着し始めた。見ると大佐と医
者もマスクをつけようとしている。

エレベータが少し振動した。止まったのだと思った。

「到着です。皆さん」

僕はマスクを装着し、コイルガンがガンホルダーにしっかりと詰
め込まれていることを確認した。

底の世界

「洞窟はかなりの大きさです。自然の洞窟を利用したもので、内部の構造のほとんどが不明です」

「それに加えてどんな変化を起こしているかわからないというわけだな」

「その通りです。L・ロマンコフ」

「仕方ないさ」

「そろそろ行こうか。開けてくれ」

カッサード大佐は僕が当然に持っているような感情を完全に持ち合わせていなかった。恐れというものは完全に消滅している。ただ進まなければならぬ道のりを進む。そういつた覚悟が僕にも必要だ。

「参りましょう」

僕らは進む。地下の穴蔵を、光を求めて、地底。底の世界を。

水

コムログが壁を撫でると、徐々に扉が開きだした。

「なに、これ」

ミユキが呟いた。

「コムログ！」

僕は叫んだ。これは一体何だと僕が叫ぶ前に彼は答えた。

「水です」

開いていく扉の隙間から白い煙が立ち込めてくる。それは猛烈な勢いでエレベータの内部に充満し、暗闇を作り出した。

じつとエレベータの上部を見上げると、ライトが白い煙で覆われてしまっていることに気付いた。

水？こんなものが水なのか？たとえ毒ガスであつたとしても、ここにいる全員は既にマスクを着けているので問題はない。それでも僕は自らの鼻と口を手で塞いだ。

「大丈夫です！成分はただの水分です」

暗い。それはあの巨大梯子で感じた闇よりもさらに深い深淵の闇だった。ただ暗いというだけで僕はパニックを起こしかけた。

僕は誰に急かされるでもなく暗視ゴーグルを起動させた。

見えない。暗視ゴーグルの先に映るのは鮮明な地下の世界ではなく。闇のなかでうごめく多量の薄暗い灰色の斑点だけだった。

「なんだこれは！」

僕は暗闇の中で叫んだ！

「大佐！どうする！」

ガンドが叫んだ。

「落ち着け」

カッサード大佐の落ち着きは人間のものとは思えなかった。

「ビジネス。暗視ゴーグルは作動しているか？」

「だめだ！全く何も見えない」

僕は博士の問いに答えた。この女の冷静さも計り知れない。

「なるほどな、赤外線モードに切り替えても無駄なようだ」

博士は冷静に言った。どうやらゴーグルを切り替えているらしい。このゴーグルは幾つかの暗視モードを搭載している。

「音波もだめだな」

今度は医者が出た。

「コムログ、これは水だと言ったな？」

「私の分析では完全に水そのものです。一体どういうことでしょう。これは」

もしこれが本当に水なら、僕はその水圧を感じ取ることができただろうし、体が少しは浮き上がったりするはずだ。これは液体ではない。

「ガンド、サーチライトだ」

大佐の言葉を聞いて、ガンドはすぐにサーチライトをつけた。もっとも直接的で原始的な方法だ。

「つけますぜ」

ガンドの声が聞こえると、出し抜けに周囲が明るくなった。

「眩しい！」

ミユキが小さな悲鳴を上げた。僕の目も眩んだ。そうだ、今度は明るすぎるのだ。視界のほとんどが過剰な光で覆われてしまっている。これでは何も見えない。

「きつてくれ！ガンド！」

「すまん！」

狭いエレベータ内でのサーチライトの強烈な光は苦痛そのものだった。ジョージが訴えるとガンドはすぐにサーチライトを切った。

「なるほど、これは霧だな。それもとことん濃霧だ」

「そんな……」

コムログの声は驚きを示していた。

「ゴーグルを水中用に切り替える」

僕はそんなモードがあることは知らなかった。それもそうだ、まさか水中でこのゴーグルを使う機会に出会えるとは思っていなかったし、水の中に潜るなんてことも考えていなかった。よくまあ、こんな機能をつけておいてくれたものだ。

ゴーグルの内部画面に水中モードの表示が浮かんた。それと同時に真っ暗だった視界が徐々に色づき、外部の世界を明確にしていく。そして僕は見た。エレベータの外側にある洞窟の中の奇跡を。

洞窟

エレベータの外に広がる洞窟の世界は僕が予想するよりもはるかに大きかった。そして一層目を引くのは各所にそびえる巨大な物体だった。

白くなめらかに輝く物体を見て、誰もが啞然とした。

「なんと巨大な…」

「生物かしら」

ミユキの間にはコムログが答えた。というよりコムログにおいて他にこの物体の正体を知る者はいなかった。

「成分はこれが完全に鍾乳石であることを示しています。しかし、これほど巨大なものは史上確認されていません」

コムログと大佐がエレベータの外に出た。それに連れて僕らも鋼鉄の床からごつごつとした岩のような地表を踏んだ。地面はひどく滑りやすかった。

「綺麗ね」

ミユキはそう言うが、僕にはどこか危険なものに見えた。

「しかし鍾乳石には見えませんね。こんなにも巨大で光沢のある鍾乳石は記憶にありません」

「鍾乳石っていうのはこの白い塊のことかい？」

「そうです、M・バンディクー。主に炭酸カルシウムを元に生成された洞窟生成物ですが、ちょっと私には信じられない規模です」

そう言うてコムログは洞窟の奥に目を向けた。想像を絶した巨大空間の一角に直径がゆうに20mを超している白っぽい円柱状の物体が天井からぶら下がっている。むしろそれは地面に向かって突き進んでいるように見えた。

僕はその物体を下から順に上へと眺めていった。50m以上先の空間は暗くて見えなかった。

「いくぞ」

博士が言った。

「案内してくれるな？」

「もちろんです。少し動揺しましたが、参りましょう」
その時だった。

「ビジネス！」

ガンドが大声で叫んだ。僕には何かなんだかわからなかった。ひ
とつ判断できたことは、僕に危機が迫っているということだけだ。

魚

ガンドは僕の方に飛びかかろうとした。その右手にはナイフが握られている。

ところが、飛びかかろうとした体制でガンドは動きを止めた。その瞳は僕の後ろの空間を見つめている。僕は瞬時の判断で後ろを振り向いた。

不自然に宙に浮き、妙な動きで逃げていく生物の姿があった。

「なんだあれ」

その未知の生物は攻撃的な種族ではないようだったようで、僕は少しだけ安心した。

「おそらく魚だと思います」

魚か、資料で読んだことがある。代表的な水中生物だ。だがなぜ水中生物が空中を浮遊しているんだ？

「なんていう魚なんだ？マグロか？サケか？うまいらしいじゃないか、魚というのは」

僕は知っている限りの魚の名前を挙げた。

「いえ、あのような魚は見たことはありません。申し訳ありません、データにないのです」

「大丈夫か？気分でも悪そうじゃないか」

「大丈夫です、M・バンディクー。少々、信じられないことが多いですが、気が動転しそうです。私がアンドロイドでなければ頭痛に見舞われていたかもしれません」

そうか、そうなのだ。ほとんど何も知らない僕達にとってこの世界は未知との遭遇だが、全てを知っているコムログからすると、常識の崩壊であり、固定概念の破滅なのだ。

白鳥

「あれは攻撃してこないのか？」

博士がコムログに訊ねた。

「なにぶん魚ですから、故意に我々を攻撃してくるとは思えません。さきほどの反応を見ても臆病な性格のようですし。ただ、大型の魚類や水棲哺乳類には気を付けなければいけないかもしれません」

「あれでも大丈夫なの？」

ミュキが最も巨大な鍾乳石の奥を指さしていった。

鍾乳石の奥から何百匹もの魚の群れが現れた。魚たちはまさに水中を泳ぐが如く空中を旋回し泳ぎ回っている。1匹の大きさは手のひら程度だが、群れた魚たちは一種の巨大な生物に見えた。魚の群れは僕たちに近づくことなく洞窟の奥へ消えていった。

コムログは長い間、何も答えなかった。

「とにかく行くしかない。武器は携えておいたほうがいい」

大佐の言葉をきっかけにして僕らは歩き始めた。

少し歩いた所でコムログが口を開いた。

「申し訳ありませんでした、M・エレレンス。先程は、どうも何もかもが判断できる現象ではなかったのです」

「いいのよ」

ミュキは明るい声で言った。

「きっと私達よりあなたの方の驚きが大きいからね。あなたは何でも知ってるから、これがどれくらいありえないことかわかっちゃうのよ」

「そうかもしれません」

「心配するな、コムログ。むしろ喜ぶべきだぜ。既存の情報ではありえないことを驚くのは当然だし、そうでなきゃあ発見や発明とは言えん」

「ありがとうございます、D・レイヴン」

「魚は水の中にいるんでしょう？」

「そうです。海や湖、川にかく水のあるところにいる生物が魚です」

「でもあれは魚なんだろう？」

「はい、D・レイヴン」

「難しいな、コムログ。だが現実とはそういうものだ。水の中にいるのが魚だと言うなら、水の中にいない魚は魚じゃないはずだ。だがあれは魚なんだろう？　どうかね？　常識が覆った。お前さんはこれから魚という生物の定義を大きく書き換えなければならない」

「黒い白鳥ですね、D・レイヴン」

「黒い白鳥？」

「これと同じような哲学的問題があるので、M・エレレンス。白鳥とはそれまで真つ白な鳥のことを言ったのです。しかしある日、黒い白鳥が見つかる。遣伝子を調べても、生物的特徴を調べても、この鳥は白鳥に間違いない。それなのに黒い。間違っているのは今までの常識か、はたまたこの黒い白鳥か。たった1羽の白鳥の登場で、世界の常識は覆ったのです」

「なんだか難しそうな話ね」

「そんなことはない。要は常識にとられるなっただけだ」

「それから、我々の常識は非常に脆く、未来は予測ができないということです」

穴蔵

最も大きい鍾乳石までは思ったよりも距離があった。ということは、思ったよりも時間を要したということだが、その間にも多くの魚類が僕たちの周りを泳ぎ回り、僕たちなど存在しないかのように過ぎ去っていった。

「触っても大丈夫なのか？これは」

「特に問題はないと思います。M・ブルーノ」

ガンドは鍾乳石に手のひらを当てた。

「なんだこりゃ」

「どうしました？」

「かなり熱いな、熱を持ってる」

コムログも鍾乳石に手を触れる。

「本当ですね。妙な温かさです」

「コムログ、道が分かれてる、どちらに行けばいいんだ？」

「方角的にはあちら側ですね、M・バンディーク」

そう言ってコムログは純粹な道なりの方向を示した。

「あちらの穴蔵には何がある」

大佐は岩場に空いた大きな穴を指さした。

「申し訳ありません。データにはないようです」

「不自然だと思わんか」

コムログはじつとその穴を見つめた。

「そうですね、確かに…破壊されたあとのように見えます」

見ると、確かに穴は不自然に存在していた。まるで人工的に切り取られたその穴の周囲には瑠璃色の岩が点在していた。

「あれはラピスラズリですね。普通の岩石と混在しているのか、ここにある岩のほとんどがラピスラズリでそれが露出しているのかはわかりませんが」

「ラピスラズリか。この地下というのは資源にあふれたところらし

いな」

博士の声が嬉々としたものになっていく。

「博士、あそこは調査する必要があるのか？」

大佐が博士に訊ねた。良い判断だ。

「どう思う？」

「あんたが興味を持つのはわかるが、脱出が最優先だ、深追いはせんほうがいいだろう」

「危険そうなら引き返すさ」

「名目上、このチームのリーダーはあんただから、そう言うなら従おう、ただし危険かどうかの判断は俺がする」

「感謝する」

蒸気

僕たちは涇々と洞穴に近付いた。

一刻も早く脱出をしたいが、重要な資源を見つけることも重要だ。それは死んだ地球での人類の新たな繁栄につながるかもしれない。危険かもしれない、という程度のリスクならば、繁栄のきっかけを手に入るにたるリスクではある。

僕はいろいろな想像をしてみた。

穴は妙に人工的だ、もしかすると過去の人間が新たなシエルターを作り出していたのかもしれない。いや、ここにまだ生きている人間がいても、僕は大声を挙げるほど驚いたりはいしない。それならそれでいい、なぜこんなことになっているのか、コムログが機能停止していた時間の謎が解けるかもしれない。そういう意味でもコムログが僕らと共に行動していることは大きい。僕たちだけでは、生存している人間とコミュニケーションがとれないかもしれないのだ。何しろ過去に存在していたすべての言語を網羅しているコムログさえ、僕らとの会話にときどき苦労しているふしがある。

僕の想像はどちらかと言うとポジティブなものだった。

洞穴に近づいていくと、いっそう視界が悪くなっていく。そして空気が熱気を帯びていく。スーツの上からでもそれが感じられる。「熱いな」

僕は人知れず呟いたつもりだった。

「なるほど、コムログの言ってた水ってのは実際は湯だな。エレベーターに入ってきた白い煙は蒸気だろう。なんという湿度だ、それにしても」

レイヴン・ジャックが僕の後ろから言った。

僕は洞穴に足を踏み入れた。先に入っていた大佐、博士、ガンド、ミユキの動きが止まっている。それ以上先に進めないのだ。

足下を見ると、鏡のようにつややかなエメラルドの池があった。

池の水は洞窟の奥深くまで続いていて、その先は見えなかった。

池の水は見るからに毒々しく、触る気にはなれなかった。

おかしいことがある、これほどまでに異様な光景を目にしたにもかかわらず。全員の瞳はそれを見ていなかった。全員が見つめているのは溶けたエメラルドのような地の底の池ではなく、上だ。崖のように切り立った洞窟の天井。この洞穴は天井が低い。そこに存在している異様な物体に、僕らは目を奪われていた。

クリスタル

クリスタルの化物。

天井に貼り付けられたようにこちらを向く。大きな無生物がそこにいた。

体は巨大そのもので、脚や腕といった部位の関節は異様に尖っている。青白い結晶の塊のような顔。顎は鋭く尖り、口は大きく裂けている。

目にあたる部分はくぼみ、影を作り、全てを飲み込むような闇が潜んでいる。

それは、あくまで人間的なシルエットをしながら、人間ではない異質の存在として僕たちと対峙した。

時間が完全に止まっている。怪物が動き出す気配はない。死んでいるのか、そもそも生き物ではないのか、それすらわからなかった。

見下ろす瞳の奥の闇はなぜか、それを見上げる大佐を眺めているように見えた。

「引き返す」

誰が応えたわけでもなかったが、誰もがそれに納得し、従った。皆が洞穴の外に出ていくなか、僕はずっと怪物を眺めていた。これはいったい何だ。コムログが何も言わなかったということは、彼にもこれが何かわからないのだ。どれだけ目を凝らしてみても、それは微動だにしなかった。

どんな目的で作られたのだろう。僕の思考はそんな疑問に移っていった。

このオブジェは何のために作られたのだ、何かの象徴だろうか？あるいは宗教的な崇拝の儀式に必要なのか、なるほど、そんな雰囲気はないこともない。

宗教、軍隊。人間が産み出した、粘り強く残り続ける生きた化石。

動作

「ジョン？」

ミユキの声だ。

「すまない、すぐ行く」

僕は一度、クリスタルの化物のオブジェを見なおしてから、外に出た。生氣といったものはやはり感じられなかった。

「何してたの？」

微笑みながら話しかけてきたのはミユキだ。

「別に、なんとなくさっきのあれが気になってね」

「なんだと思う？」

「さあね、宗教の儀式に必要なものとかじゃないかな？」

「神様とか、イコンみたいなもの？」

「たぶんね」

「言われてみるとそんな気もするわ。それにしても綺麗な水だった」

「綺麗？」

僕には彼女の言っていることが理解できなかった。

「あれが綺麗だったのか？」

「ええ、綺麗だったじゃない。あんな色見たことないわ」

どう見ても綺麗ではなかった。明らかに毒々しい感じがしたはずだ。僕は僕のが感覚が狂ってはいないことを確認した。

「コムログに聞いてみたけど、あの水もあなたの言う儀式道具も、データにはないらしいわ」

「だろうね」

空中をさまようオレンジ色の魚が僕を後ろから追い抜いていった。ひらりと身を翻した魚の反対側は緑色に染まっていた。

「あれは綺麗か？」

僕はその魚を指さして言った。先に言っておこう、グロテスクだ。

「綺麗よ」

ついていけない。

正しい道を進むと、遠くに人工的な扉が見えてきた。人工的らしい、ではない、あれは完全に人が意図的につくったものだ。

「あれが外につながる第一の扉です。あの扉を開け、しっかりと閉めなおしてから第二の扉を開きます。開くと水が大量に流れこんでくると思われますので、脱出の前にO2バレルを装備してください。バレルは扉に備えられています」

やっと脱出だ。洞窟に致命的な危険が存在していなかったことは幸運だった。

「一応武器は用意しておいたほうがいいのか」

オート・カービン・ヴェノヴを取り出すガンドの姿を捉えた僕はすぐさま叫び、コイルガン取り出す動作に移った。1秒もかからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6686o/>

朝の世界

2011年12月2日18時51分発行